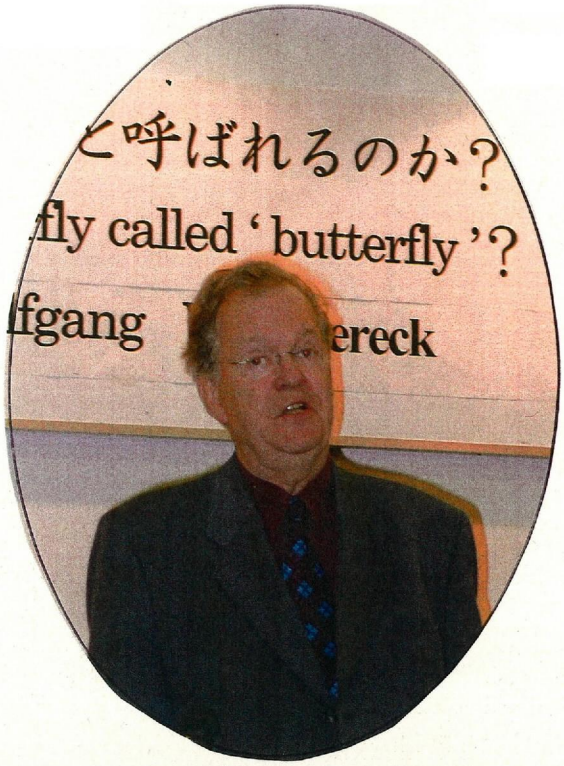
はじめてな国語授業自分史を書く

江 端 義 夫 編

広島大学教育学部国語文化教育学研究室



Wolfgang・W・Vierck 博士講演会

「なぜ蝶はバタフライと呼ばれるのか?」

平成 16 年 11 月 16 日(火)広島大学教育学部

国語文化教育学講座江端研究室江端ゼミ生一同

はじめてな国語授業自分史を書く

Describing the Individual History on the Japanese Class for the First Time

江 端 義 夫 編

edited: Yoshio Ebata

平成１７年３月

March 22, 2005

広島大学教育学部国語文化教育学研究室

Japanese-Culture Instruction, Faculty of Education, Hiroshima University

○はじめに

古典の授業をどのように魅力的なものにするか。古典の授業の教材を開発するのでなく、従来の教材を用いて、しかも新風を取り込み、そんな読み方もあり得るのか、と子供たちに感じさせたい。当然、教える方も、そのたびごとに、新しい発見があるような古典の授業をしてみたい。これは、国語教師が等しく抱く感懐でしょう。

古典と言えば、ひとまず、係り結びの法則を教え、助詞・助動詞の活用と意味を丸暗記させなくては話にならないとベテランの先生なら、誰でもお思いになる。それも、解らないわけではないが、子供たちは、納得のいく説明をしてもらってから、暗記の作業に入りたいと思っているようである。このごろは、医学療法においても患者が納得してから治療が始められる時代である。規則だから丸覚えしなさい、というやり方では、通用しなくなってきているのではないだろうか。

そこで、賀茂北高校の親愛なるご協力をいただいて、広島大学教育学部三年生の江端ゼミ生は、教材『更級日記』の「竹芝寺」を使って、四人が四人なりの実習授業を試みさせていただいた。それらの学生の実践授業を通して、古典指導一般の問題を考えると共に、教える教員の問題や、教え方の問題、生徒の国語力の問題、その他根源的な課題にいたるまで、自由に考える機会にすることとした。

賀茂北高校では、『更級日記』だけでなく、「国語表現」「国語総合」「現代文」「古典」「漢文」などや課外活動なども学生は体験させていただき、随分、人間的な成長もさせていただいたようである。

しかし、本編では、特に『更級日記』に限定して、四人が四人ともに、四時間配分で、実践させていただいた授業の記録を文字化して、客観化し、それを具体的な材料にした分析を通して、教えるとはどういうことか、理解するとはどういう作業か、認識するとはどんな行為か、表現するとはどんな想像活動かなどについて、様々な考察を試行させることにした。

机上のモデルでなくて、実際に各自で建てた「指導案」の実践と分析である点で、極めて貴重なものだと言える。こういう自分史というか、個体史というか、教育実習実践史を編むことの意義は、今後、大切になっていくと思われる。手間暇のかかる作業であるが、身体で覚えていくのが、国語教育だと思われるので、学生の授業実習ではあるけれども、様々な発見の芽生えが見出され、興味ぶかいものである。

次に、こういう事態がある。関東地方では、授業の実践を記録して分析しても、学問にはならない。ならないと言ってしまっては言い過ぎであるとすれば、科学的な根拠も無い永遠の不完全なものを、書き付けても何の意味があるのかと言われてきた。それに対して、西日本地方では、教育実践科学という考え方が、普通のこととして受け入れられている。不思議な二極対立である。何故だろうか。

昭和三十年代の後半から、広島大学を中心にして、授業実践を、一過性のこととしないで、典型例を集積したり、名人と言われる人の実践を研究したりして、優れた授業の背後にある摂理を発見しようという意識が芽生えた。授業の名人と言われる人の全集も編まれたり、教育に関わる優れた人に、ペスタロッチ賞が与えられたりして、授業学への気運は高まった。何とかして、授業論を科学に持ち上げたいものだという願いがそのころから、今日まで続いてきているように思われる。しかし、義務教育課程では、方法の学問が、かなりの程度に、科学化できても高校レベルになると、教材のレベルが高くて、多彩なために、教え方だけで専門性を出し切ることが困難である。そのために、教える者も教えられる生徒も、教材の勉強に力が注がれ、肝心の授業の特異さには工夫が及ばず、学力もつけられないままで、時間が終わってしまうというのが現実である。したがって、古典の授業というばあいには、係り結びとか、助動詞の意味とか、古典重要単語を押さえるとか、音読を繰り返して、文章に慣れさせるとかの入門段階に留まりがちである。書かれた文章の内実に迫っていき、読み手と書き手とが、葛藤するという授業は、出来ない。本当は、古典の文章も現代文学の文章も差が無く、人間の真実を伝えるすばらしいものなのだけれど、すぐに、本質へ辿りつけないもどかしさがある。そこをどう、くぐり抜けるかが至難の技でもあり、技術とばかりは言っておられない難題でもある。　　（江端義夫）

はじめてな国語授業自分史を書く

目次

○はじめに

第１部　国語授業自分史を書く
第１章　教育実習から始まる「国語授業実践自分史」の習慣----------江端義夫（ 1）
第１節　国語の授業実践が学問になる
第２節　生徒を高めることになる「国語授業自分史」を書く生活

第２章　賀茂北高等学校における授業実践プロジェクトの概要----------小川俊輔（ 5）
第１節　『更級日記』授業実践の位置
第２節　実践者、指導者、教材等について

第２部　『更級日記』授業実践の構築
はじめに
第１章　第１学年中堅１クラス『更級日記』授業実践の研究----------江口洋美（ 9）
第１節　「竹芝寺」学習指導案
第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料
第３節　授業実践を通して得られた知見と反省
第２章　第１学年中堅２クラス『更級日記』授業実践の研究----------吉永麻紀子（53）
第１節　「竹芝寺」学習指導案
第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料
第３節　授業実践を通して得られた知見と反省
第３章　第１学年発展クラス『更級日記』授業実践の研究----------濱田和幸（97）
第１節　「竹芝寺」学習指導案
第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料
第３節　授業実践を通して得られた知見と反省
第４章　第１学年基礎クラス『更級日記』授業実践の研究----------豊田慎一郎（141）
第１節　「竹芝寺」学習指導案
第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料
第３節　授業実践を通して得られた知見と反省

○おわりに

第１部　国語授業自分史を書く

第１章　教育実習から始まる「国語授業実践自分史」の習慣

江　端　義　夫

第１節　国語の授業実践が学問になる

東日本では、高校国語の授業を記録してそれを学問の対象にするような行為に意味を見出す人が少ない。授業は教材と生徒と教員との間の切磋琢磨であり、一回ごとに異なる。ベテランの教員でも、体調が勝れない日には、話す内容が定まらなかったりするし、突然の事態の変化に戸惑う場合もあったりする。授業は、定型的には行えない。十分に教材勉強をしていても、生徒の受容態度の如何で、効果があがらない場合も少なくない。あるいは、教員の熱意が強すぎて、生徒が先生の期待する段階にまで、辿りつけない場合もある。そんな融通無碍なものなので、「授業」を客観的な対象にするということを、敢えて、行わないのかもしれない。

ともかくも、東日本の多くの高校では、授業の勉強会は盛んでも、それを資料化して、研究の対象にするということがあまり行われていないのではないかと思われる。

それに対して、西日本では、授業観察が普通のこととして行われているように見受けられる。西日本では、理論よりも子供とのコミュニケーション活動が成立しなくては授業にならないという考え方がある。「授業の成立」が一番に求められる点が注目される。したがって、先生の質問に対して、生徒がどのように答えるかということが一番の注目点である。問いと答えとが問題になる。

西日本の高校では、もう一つ抽象度を上げて言えば、「人間論」が盛んであるとも言える。人間論というのは、哲学的である。算数のようには行かない。およそ、人間ほど不条理な存在は無い。そんな不条理な人間をつかまえて、「人間的」と言ったって、ほとんど意味が無い。人間の人間らしさなどを雰囲気的に感じ取って、それを規定しても無意味である。しかし、そんな甘さを好むのが、西日本の多くの学校である。

東日本の思索風土が理詰めでかつ、教材本位なのに対して、西日本の思索風土は、情念本位で生徒本位だと対比的に述べることが許されるかもしれない。

では、どの立場に向かえば良いか。もちろん、教員が教員の生活を記録して、それを研究の対象にしなくては、立つ瀬がない。教員生活という行為の全体を問題にして行けば、人間研究にもなるし、教育は政治や経済や文化と無縁ではないので、授業を分析し始めると、生きている時代をまるごと問題にせざるをえなくなるであろう。まさに生きていることの実感が、授業分析である。それを、自己の授業に限定した場合に、「教科授業自分史」と言うことができるであろう。特にここでは、国語という教科について問題にしているので、国語授業自分史の研究と言うことが出来る。

考えてみれば、「国語授業自分史」は、地域生活の研究に似ている。民俗学の対象がこの典型である。たとえば、農村の生活を取り上げてみよう。稲作の間に畑で大豆の収穫をすることがある。田の畦に大豆を蒔くときもある。蚕を飼ったり、牛を飼ったり、園芸をしたりして、多角的な農業を行うであろう。それらの行為は、繋がっていて、老いも若きも総出で手伝わなくては間に合わない。機械化以前の農業はみな、生活の全体が個人と絡み合っていた。そのような主たる家業を核として、家族の全体がまとまりを成していた。そういう家族集合体の生き方があった。それの全体を描きつつ、何を目的にして、彼らは家族を形成し、人間生活を営んだのか、と問いただしてみる。そこには、日本社会の価値観が透けて見えることがある。民俗学の貴重なところは、そんな総合価値の追究めいた点にあると私などは、考えている。

そんな生活研究としての民俗学と似たような存在が、授業研究にも存在するようである。国語教材をどんなに用意周到に勉強して行っても、授業が失敗することがある。それは、概して、その授業の人間的な側面を考慮しなかった場合に起きる。人間的な側面と言われても、その「人間」なるものが不確実である。ちょっとした雰囲気作りの未熟さに原因がある場合も少なくない。

先程の民俗学の話題で、「生活」を問題にしたが、「授業」も「生活」である。その教員生活を克明に記述することなしに、良い授業はできない。だとすれば、授業記録の省察を置いて他に客観的な分析方法は無いであろうとまで、言い切ってみる。それゆえ、生徒と共有する時間の芸術であるところの授業を科学的にとえらて学問対象に成し遂げて行けば良いと結論づけてみることにしたのである。

このような真剣な営みが学問になる。名人芸に見えても、その背後には、誰もが真似ることのできる合理的な摂理がある。それらの摂理を手くり寄せ、積み重ねて行けばよいのである。

学問とは何か。授業の実践を科学するとはどういうことか。それは、授業計画から指導案へ、指導案から実践記録へ、実践記録から一般化法則へなどという過程の中で、ためされる。一見、指導書を見れば書いてあり、授業計画など、面倒くさいと思われるかも知れない。しかし、実は、いろいろな高校に当てはめる時に、指導書どおりではうまく行かないのである。そのような時代の変化や生徒の理解力の差に応じてどのような工夫を施すかについて、互いの情報を交換しあうことが出来れば適切である。そういう場として、学問がある、と考えれば良いであろう。

ノーベル賞級の発見や発明だけを「学問」と言わなくてもさしつかえない。授業の新しい工夫が試みられたら、それによって優れた成果、つまり、国語の理解力が高まったとすれば、それは、教員全体の財産にもなる。その工夫をみんなに紹介し、共有すれば、教えるという行為は、今までよりも向上する。そんな些細なことが大切なのである。

授業の分析が学問になるということは、教員の工夫が実践され、確実な成果を得た

とすれば、それこそ、学問的成果に当たるということである。教員生活の革新に寄与する行為が、一つでも二つでも積み上げられて行くことを、念ずるものである。

第二節　生徒を高めることになる「国語授業自分史」を書く生活

授業は誰のものか。それは、言うまでもなく生徒のものである。かつて教員は、陶冶論の中で、産婆に例えられた。生み出すのは、生徒だということを意味している。授業の主体は生徒である。こんなことは、言わなくても聞かなくても、当然の理屈である。

そこで、優れた教材によって優れた教師により、優れた指導がなされなくては、優れた成果が望めないとも言われる。それも、当たっている。教材の優れたものを取り扱わなくては、勉強したことにならないことで、それが解る。

しかし、「優れた教師による優れた指導」というのが、分かりにくい。少なくとも、この部分が「授業論」での問題点であろう。

生徒と先生とは立場が違う。生徒は多人数だが、たいていその授業の教師は一人か多くて二人である。多くの生徒の意見を同時に聞いてまとめていくことは困難である。その困難な仕事を工夫しだいで、裁いていける。時間の有効な使い方とか、生徒同士で異なる意見を討論しあわせて、そののちにまとめることだってあり得る。時には、まとめることが後味の良くない場合には、いろいろに意見を出し合って、それでお終いということもあり得る。

いずれにしても、授業の主体者が生徒である点で、始末が悪い。教育とは、ヌエみたいなものである。例えば、授業記録と言われても、仮に一クラス 27 人の生徒がいたとする。ビデオで記録しても、テープレコーダーで記録しても、それを文字化しても、いざ、分析するとなった場合には、生徒の顔が映し出されない。動作も書き出せない。生徒の目の動きやしぐさも書き付けられない。例えば某生徒の滑稽な身振りに応じて、他の生徒達が敏感に反応して、笑ったとする。その笑った拍子に、それまで続いていた真剣な教室の雰囲気が乱れて、ユーモアを理解させる恰好な場が出来たということだってある。それなどは、教室の全体的な雰囲気を掴んでいないと理解出来ない。ビデオや録音機のような視覚の狭いものでは、捉えることが不可能なものである。授業とはもろくて、かすかなものでもある。一回ごとに異なるものでもある。ベテランの教師でも、二度と同じ授業を同じように完遂することは困難である。同じ成功を手にすることが難しい。オハコと言われる得手の教材を持っている先生は少なくない。しかし、そのオハコを繰り返しているうちに、その先生の冗漫さが鼻につき、自分で呆れることがあるであろう。そのような心の隙を、生徒が鋭く見抜く。そうすると、次の授業は失敗する。いつもは、この辺で生徒が笑うのにと思っても、笑わない。いわゆるマンネリを生徒は嫌う。落語ならまだしも、授業は、単純な繰り返しが

効かない。単純な反復が許されないので、厳しい職場だと言える。常に緊張を強いられる環境である。その緊張感をうまく使って、生徒の伸びようとする意欲に火を付ける。その火付け役が先生である。どのように火をつけるか。教室の生徒に、昨年と同じ教材を与える場合にも、新しい時代の雰囲気を背負った生徒には、去年と同じ教え方ではうまく行かない場合が多い。何らかの新しい工夫を取り入れないと、飽きられてしまう。教師はつらい職業である。単純な繰り返しが許されないのである。

ところが、そのような単純な繰り返しが許されない職場は、企業社会でも同じである。新しい製品開発を常に行っていなくては、企業は頓挫する。防衛のためには、常に生き残りをかけて、開発に力を尽くさなくてはならない。

考えてみれば、当然のことである。人は、ニュースには関心を示すけれども、過ぎ去ってしまえば、全く振り向きさえしない。新しいものにだけ興味を見せる。マスコミに限らず、人は、どんどん新規なもの、新奇なものに注目する。それが最も著しいのが生徒である。若い者ほど、新しいものごとに関心を抱きやすい。そのはずである。若ければ、金のかかることは無理である。金で何かに変換、交換、抽象化していくことよりも、直截的なものごとを手で触って確かめていく。そういう手近な手法による。

大人である教員は、生徒の未熟さに堪えられない。少なくとも、大人の立場では、どうしてそんな容易なことが解らないか、それが判らない。裏の裏を読む方法とか、全体のカラクリを読み解く方法とか、そんなことを示しても関心を示さない。がっかりする。しかし、子供の視線に降りて行っても良いが、必ず、大人の視線へ再び戻って来なくては教育にならない。

しかし、それだけなら、知恵者の大人が未熟な生徒を訓育することでお終いである。ところが、このごろは、子供の潜在能力を伸ばさなくては、真の教育ではないと言われる。だから困ってしまう。○×ではなくて、方向づけの指導であるからだ。

そんな複雑な指導には、「自分史」を採用するのが一番である。自分の歴史を振り返って書かせるのである。丁度、今回、授業実践史を自分史としてまとめたように、生徒たちにも、何か事がある度に、自分史を書かせるのが良い。自己省察を通して、本物の明日を、それぞれの希望に即して、書かせる。そのような方向付けをしてみてはどうであろうか。

国語力の育成には、思索力、思いやり、読み書き、話し聞くの四つの総合力も必要である。伝統と習慣に根ざした国語の使い方が出来るためには、教室の中だけでは限界がある。基本的な国語力しか身につけられないからである。応用力については、社会的な場面での実践が要る。いろいろな工夫を試みて、生徒の国語力の伸長に寄与しなくてはならない。

そうした総合的な国語力の育成に、最も有効なのが、生徒自身の「国語形成自分史」である。また、教員の側から言えば、最も有効なのが「国語授業自分史」だと言うことになる。

第2章　賀茂北高等学校における授業実践プロジェクトの概要　　小川俊輔

第1節　「竹芝寺」（『更級日記』）授業実践の位置

賀茂北高等学校国語科の年間指導計画は、同校編『賀茂北で何が学べるか』[*1]に明記されている。同書には、国語総合（1年・4単位）、現代文（2年・2単位）、古典（2年・2単位）、国語表現Ⅰ（2年・2単位）、現代文（3年・3単位）、国語表現演習（3年・2単位）、古典講読（3年・3単位）のそれぞれについて、33頁にわたって学習目標、評価の観点及び趣旨、単元名・題材名、学習内容等が詳述されている。「竹芝寺」（『更級日記』）の授業実践が、賀茂北高校における1年間、或いは3年間の国語科学習の中で、どのような位置を占めているかの詳細については、同書を参照されたい。ここでは、その内容を整理して簡潔に記す。

第1項　国語総合の学習目標

4名が授業実践を行った「竹芝寺」（『更級日記』）は、同校1年生の国語総合の時間に取り扱われる題材であった。国語総合の学習目標は、以下の通りである。

国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

国語総合の全授業が、上記の学習目標の達成の為に行われる。4名の行った「竹芝寺」（『更級日記』）の授業実践も、上記の目標達成の為に行われた。

第2項　国語総合の評価の観点及び趣旨

関心・意欲・態度
　国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してこの向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す・聞く能力
　自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く能力
　自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に書く。
読む能力
　自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり、読書に親しんだりする。
知識・理解
　表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付けている。

第3項　単元【古文4】の学習内容と評価の観点

「竹芝寺」（『更級日記』）は「芥川」（『伊勢物語』）とともに単元【古文4】を構成する題材である。単元【古文4】の学習内容と評価の観点は、以下の通りである。

---

*1同校の公式ホームページ上（http://www.kamokita-h.hiroshima-c.ed.jp/new_page_30.htm）に公開されている（2005.3.17現在）。

学習内容
・登場人物の行動に注目して、物語を読み比べる。
・物語を通して、平安時代の人々の生き方や考え方を知る。

評価の観点
関心・意欲・態度
平安時代の文学作品に興味を持ち、他の作品についても知ろうとする。
話す・聞く能力
なし
書く能力
二つの物語の対照的な結末を比較しながら、自己の考えを述べることができる。
読む能力
それぞれの物語から登場人物の身分や立場、そして物語の結末の違いを読み取ることができる。
知識・理解
助動詞(む・けむ・なり)、接続助詞「ば」を理解している。
敬語表現(敬語の種類、誰が、誰に)について理解し、文の解釈に役立てることができる。

以上が、単元【古文4】の学習内容と評価の観点である。4名は、上記の国語総合の目標以下の事柄を念頭に置きつつ各々の計画・実践・反省/考察を行った。

第2節　授業実践者、指導者、教材等について

第1項　授業実践者

平成16年11月・同17年2月に賀茂北高校に於いて教育実習を行ったのは次の4名である。

江口洋美・吉永真紀子・濱田和幸・豊田慎一郎

4名は、いずれも広島大学教育学部第3類(言語文化教育系)国語文化系コース所属の3年生である。

第2項　指導教員・院生

広島県立賀茂北高等学校校長・教頭(敬称略)
校長:下井泰全・教頭:戸野法史
広島県立賀茂北高等学校国語教諭（敬称略）
中原登美子・原一浩・松見弘子・森岡浩人

校長先生には、実践授業をご参観頂き、授業後に各実践者に対し懇ろにご指導頂いた。校務その他ご多用の折、時間を割いて頂き、大いに勉強させて頂いた。教頭先生には、事務的な事柄を中心に実践者をお世話頂き、優しく温かな言葉かけを頂いた。国語教諭の4名の先生方には、授業計画、実践、反省に渡って具体的・大局的・緻密・ご熱心なご指導を賜った。
賀茂北高校の諸先生方の尽力・御協力・ご指導・ご鞭撻によって、本実践は成立したものである。

広島大学大学院教授（敬称略）
江端義夫
広島大学大学院院生
又吉里美・小川俊輔

第3項　学年・科目(単位数)・単元・対象クラス

(1)平成16年11月実習

江口洋美
　2年生・古典(2)・「東くだり」・中堅クラス1
　3年生・国語表現Ⅱ(2)・「古代人と会話ができるか」・大学短大志望/専門学校志望
濱田和幸
　2年生・古典(2)・「東くだり」・中堅クラス2
　2年生・国語表現Ⅰ(2)・「敬語表現」・文化教養類型
　3年生・国語表現Ⅱ(2)・「古代人と会話ができるか」・大学短大志望
豊田慎一郎
　2年生・古典(2)・「東くだり」・基礎クラス
　3年生・国語表現Ⅱ(2)・「古代人と会話ができるか」・就職志望/専門学校志望
　3年生・古典講読(3)・「源氏物語」・文理類型(文系)

(2)平成17年2月実習

1年生・国語総合(4)・「竹芝寺」(『更級日記』)
　江口洋美（中堅クラス1）・吉永真紀子（中堅クラス2）
　濱田和幸（発展クラス）・豊田慎一郎（基礎クラス）[*2]
2年生・現代文(2)・「アフリカという毒」
　江口洋美(基礎クラス)・豊田慎一郎(中堅クラス1)

第4項　授業時間外での授業実践者と生徒との交流について

賀茂北高校のご配慮によって、4名は授業時間外にも生徒と交流を持つことができた。具体的には、朝礼・終礼の時間、掃除時間、放課後・休憩時間、部活動・生徒会活動の時間等にも、4名は生徒と交流を持つことができたのである。

執筆者は4名の授業時間・授業時間外の活動の様子を現場で見ていたが、授業時間外における授業実践者と生徒との交流によって両者の間に信頼関係が生まれたように思われた。そして、信頼関係の成立によって、授業がより円滑に進められるようになったという事実が見られた。

一般の教育実習では、様々な理由から、授業時間外での生徒との交流を行えない場合がある。しかし、今回はそれを行い得た。授業の文字化資料には、生々しい生徒と実践者とのやりとりが記録されている。そこには授業時間内・外での交流によって成り立った信頼関係があるからこその、応答・掛け合いが見られるのである。

---

*2　国語総合における基礎・中堅・発展の各クラスの位置づけは以下の通りである。
●基礎クラス…教科書の内容をより基本的に理解し、「読む」「書く」「聞く」「話す」といった基礎的な国語力を養成する。1週間4回の授業のうち、1回は「漢字検定」受験のための学習を行う。
●中堅クラス1,2…教科書の内容を基本的に理解し、応用的な学力の養成をする。1週間4回の授業のうち、1回は「漢字検定」受験のための学習を行う。
●発展クラス…教科書の内容をより高いレベルで理解し、入試に対応できる高度な学力の養成をする。1週間4回の授業のうち、その1時間分を後日まとめて、模試の受験対策や発展的な問題演習の指導にあてる。特に、模試の受験前1週間から2週間は、模試対策の受験授業となる。また、小論文発表や、予習プリント、復習プリント、長期休暇の際の進学補習へ参加等が課せられるため、高い学力を身につけることができる。
・「漢字検定」のための授業は行わない。各自、家庭学習で行ってくるものとする。
・模擬試験の受験、および長期休暇の補習に参加することを義務付ける。

第2部　『更級日記』授業実践の構築

はじめに

第2部は、4名の授業実践者の報告である。4名が1章ずつ執筆している。各章は次のような構成となっている。

1)学習指導案(授業で実際に使用したワークシートを含む)
2)授業を記録した録音の文字化資料
3)授業実践を通して得られた知見と反省

(1)学習指導案について
第1章以下に記述する「竹芝寺」の学習指導案は、授業実践までの間に数度の手直しを経て作成されたものである。この指導案が成るまでに、多くの試行錯誤が行われた。各章に記した最終指導案が成るまでの経過を以下に記す。
まず、4名が「竹芝寺」(全4時)の指導案を各自で作成した。
次に、4名が指導案を持ち寄り、大学内で指導教員である江端義夫と博士課程の大学院生である又吉里美、小川俊輔を交えて検討・討議を行った。
その結果を踏まえて、各自が第1次改訂版指導案を作成した。
第1次改訂版指導案を携え、4名は実践校である賀茂北高校で1週間の観察実習を行った。各自が担当するクラスの実態を参照しつつ、実態に見合うように指導案を改訂した。これが第2次改訂版指導案である。
第2次改訂版指導案の作成に当たっては、賀茂北高校国語教諭のご指導を賜った。江口洋美には森岡浩人教諭から、吉永麻紀子には松見弘子教諭から、濱田和幸には原一浩教諭から、豊田慎一郎には中原登美子教諭から、それぞれ具体的かつ大局的で緻密なご指導を賜った。
この第2次改訂版指導案を元に実践を行った。第1時の授業実践を行う前に、全4時の指導案をあらかじめ作成していた。第1時終了後、第1時の反省を行い、第2時の指導案を改訂した。同様に、第2時終了後に第3時、第3時終了後に第4時の指導案の改訂を行った。この反省・改訂の際にも、賀茂北高校国語教諭の方々の懇ろなご指導を賜った。
上記の経過を経て成ったものが、最終指導案である。この最終指導案を「竹芝寺」学習指導案として、第1章以下に記述をしている。

(2)授業を記録した録音の文字化資料について
全4時の授業をカセットテープ、MD、ビデオテープに記録した。全4時の授業実践終了後、それを各自が文字化した。基本的には実際の授業そのままを文字化している。

(3)授業実践を通して得られた知見と反省について

ここには、4名が賀茂北高校での授業実践を通して学んだこと、得られた知見、反省を記している。
数次に渡る指導案の改訂、授業実践、反省、授業の文字化、賀茂北高校の先生方のご指導・ご鞭撻、大学の指導教官、大学院生の指導を経て、4名が学んだことの肝要な部分を記している。実践を通してしか分からない苦労や新発見、新知見、反省点をあげている。学んだことは多岐・多量であったが、各自B5用紙2枚以内に次の題目でまとめている。
1)指導者について、2)指導法について、3)おわりに

第１章　　第１学年中堅１クラス『更級日記』授業実践の研究

江口　洋美

第１節　「竹芝寺」学習指導案

1、日時　　平成 17 年 2 月 14 日～18 日
2、場所　　広島県立賀茂北高等学校　１年１組教室
3、学校、学年、学級　　広島県立賀茂北高等学校、１年生、中堅１クラス
4、教科、科目、単位数　国語科、国語総合、４単位
5、教材、単元　　新編国語総合（東京書籍）、「竹芝寺」
6、本課について

①教材観

本教材には、菅原孝標女が京都へ戻る旅の途中で聞いた、「竹芝」という地名の由来が書かれている。その地名の由来として語られている「竹芝の男」と「皇女」にまつわる物語が話題の中心である。この当時の女性には珍しく、皇女は自分の意志で下京して武蔵の国に住み着いた。「更級日記」成立当時の物語に描かれる女性は「伊勢物語」の第６段「芥川」の女に代表されるように、受身的な生き方をしている。そのような文学史的状況にあって、本教材は非常に異色な作品と言ってよいだろう。

②生徒観

３学期に入り、生徒たちは高校の国語（「国語総合」）にもすっかり慣れ、現代文・古文・漢文といった単元に対して、得意もしくは苦手意識を持ちつつある。そうした中、特に古文は「内容がわからない、理解できないから面白くない」という理由で苦手意識を持つ生徒も多い。本教材は身分差のある恋、駆け落ちという、非常にドラマチックな要素がある。このドラマチックな恋愛要素は、恋愛に興味を持つ世代の生徒の興味を十分にひくものと思われる。ゆえに、古文に苦手意識を持ちつつある生徒にとって取り組みやすい教材であると思われる。

③指導観

本教材の学習指導に当たっては、文法事項に触れつつ、内容理解を主な目的とする。まず、物語内容を教師側の説明で理解させる。次に、物語の途中までは同じような展開を辿り、結末は正反対である「芥川」（伊勢物語）と本教材とを比較読みさせ、何故結末の相違が生じたのかを考えさせる。この結末の相違の原因を考える活動は、古文への興味を抱くきっかけになるのではないだろうか。

7、本課の目標

男が皇女を東国に連れて行った経緯、彼女がそこに住んだ経緯を読み取らせる。
口語訳に必要な助動詞及び係助詞を理解させる。
この話と「芥川」を比較読みさせることで、古文に興味を抱かせる。

8、各時の学習展開

第1時

(1) 本時の目標

①本文を正確に音読できるようになる。

②本文に出てくる語句の意味を理解する。

(2) 評価の観点

①ワークシート①を完成できたか。

②範読の際に、読み方の分からない語句の読みを、教科書に書き込むことができたか。

③ワークシート②で意味の分からない語句を辞書で調べることできたか。

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
作品・作者の文学史的位置について確認	1　「更級日記」と菅原孝標女についてワークシート①にまとめる。	1　更級日記の影印本の「竹芝寺」の部分をコピーした補助プリント①～③を配布する。 2　「更級日記」と菅原孝標女について、ワークシート①を配布し、辞書や便覧を用いて説明する。	5
範読を聞く	1　教師の範読を聞き、読み方が分からない語句には教科書に読み方を書き込む。 2　意味の分からない語句に印をつける。	1 本文を段ごとに間を空けて音読する。 2　読み方が分からない語句には教科書に読み方を書き込むこと、ワークシート①に挙げられていない意味が分からない語句がある場合は、印をつけておくように指示しておく。 3　机間指導を行う。	10
語句の意味調べ	1　ワークシート②に挙げられていない語句で、意味の分からないものを挙げ、教科書や辞書を利用して調べる。 2　発表する。	1　机間指導を行う。 2　挙げられた語句の意味について生徒を指名して答えさせる。必要な場合はさらに説明を加える。	15 25

「をのこ」と「姫君」について確認	1　「をのこ」と「姫君」についての説明や言動を本文中から抜き出し、ワークシート①に書き込む。 2　発表する。	1　「をのこ」と「姫君」についての説明や言動を本文中から抜き出させ、ワークシート①に書き込ませる。机間指導を行う。 2　生徒を指名し、発表させる。	30 35
敬語	1　ワークシート①を用いて敬語について知る。	1　ワークシート①を用いて敬語について具体例を用いて丁寧に説明をする。	40
次時の予告	1　次時の予告を聞く。	1　次回はワークシートを用いて第1段を読むので、ワークシート①②を忘れないように指示する。	50

第 2 時

(1) 本時の目標

①第 1 段の助動詞、係助詞を理解する。

②第 1 段の流れを把握する。

(2) 評価の観点

①ワークシート③④を完成できたか。

②第 1 段の内容や敬語について理解できたか。

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の想起	1　前時の想起を行う。 2　補助プリント③を元に敬語の復習をする。	1　ワークシート①を参照しながら、前回の内容を思い出させる。 2　補助プリント③を元に敬語について確認する。	10 25
第 1 段の音読	1　「竹芝寺」第 1 段を斉読する。	1　「竹芝寺」第 1 段を斉読するように指示する。 2　机間指導を行う。	30
助動詞、係助詞の学習	1　教科書を利用して、ワークシート③④の空欄を埋める形で助動詞、係助詞について理解する。 2　発表する。	1　補助プリント④とワークシート③④を配布する。ワークシート③④の空欄を埋めさせる。教科書 p294~297 を利用するように指示する。 2　生徒を指名して、意味や活用表を発表させる。 3　補助プリント⑦の口語訳とワークシート③④の助動詞、係助詞を照らし合わせて意味と活用形を確認させる。	35
「姫君」が武蔵の国に行った理由	1　「姫君」が武蔵の国へ行った理由をワークシート⑤にまとめる。 2　発表する。	1　姫君が武蔵の国へ行った理由をワークシート⑤にまとめさせる。 2　指名して発表させる。	40

次時の予告	1　次時の予告を聞く。	1　次回は第 2 段を読むので、補助プリント④とワークシート①～⑤を持ってくるよう指示する。	50

第３時

（1）本時の目標

①「竹芝寺」第２段の助動詞、係助詞を理解出来る。

②第２段の流れを掴む

（2）評価の観点

①ワークシート⑥を完成できたか。

②第２段の内容について理解できたか。

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の想起	1　前時の想起を行う。	1　前回配布した補助プリントやワークシートを利用し、前回の内容を思い出させる。	10
第２段の音読	1　「竹芝寺」第２段を音読する。	1　「竹芝寺」第２段を斉読するように指示する。	15
助動詞、係助詞の学習	1　教科書を利用して、ワークシート⑥の空欄を埋める形で助動詞、係助詞を理解する。 2　発表する。	1　補助プリント⑤⑥とワークシート⑥を配布する。ワークシート⑥の助動詞・係助詞の空欄を埋めさせる。教科書p294~297を利用するように指示する。 2　生徒を指名して、意味や活用表を発表させる。 3　補助プリント⑥の口語訳とワークシート⑥の助動詞、係助詞を照らし合わせて意味と活用形を確認させる。	20 30
「姫君」が武蔵の国へ住み着いた理由	1　「姫君」が武蔵の国へ住み着いた理由をまとめる。 2　発表する。	1　姫君が武蔵の国へ住みついた理由を考えさせる。 2　生徒を指名して発表させる	40 45
次時の予告	1　次時の予告を聞く。	1　次回は「芥川」を読む際に補助プリントやワークシートを利用するので、忘れないように指示する。	50

第４時

(1) 本時の目標

①「芥川」と「竹芝寺」の相違点を見つけることが出来る。

②「芥川」と「竹芝寺」の結末の違いについて、考えを持つことが出来る。

(2) 評価の観点

①「竹芝寺」と「芥川」の相違点を見つけることが出来たか。

②「竹芝寺」と「芥川」の結末が異なった原因を考えることが出来たか。

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の想起	1　前時の想起を行う。	1　補助プリントを参照しながら、「竹芝寺」がどんな話であったか訊ねる。	15
「竹芝寺」と「芥川」との相違点	1　補助プリント⑦とワークシート⑦を参照して、「芥川」と「竹芝寺」との相違点を考える。	1　補充プリント⑦とワークシート⑦を配布する。今までの補助プリントを参照させながら、「芥川」と「竹芝寺」との相違点を考えさせる。	25
	2　同じ所を発表する。	2　同じ所を発表させて、板書する。	30
	3　違う所を発表する。	3　違う所を発表させ、板書する。	35
「竹芝寺」と「芥川」の結末が異なった原因	1　「芥川」と「竹芝寺」の結末が違うのは何故かを考え、ワークシート⑦にまとめる。	1　机間指導を行う。この問いには決まった答えがないので、自分の考えを自由に書くように先に伝えておく。	40
	2　発表する	2　指名して、発表させる	45

＊なお、各時の板書計画についてはワークシートと同様である。

補助プリント①

15

16

17

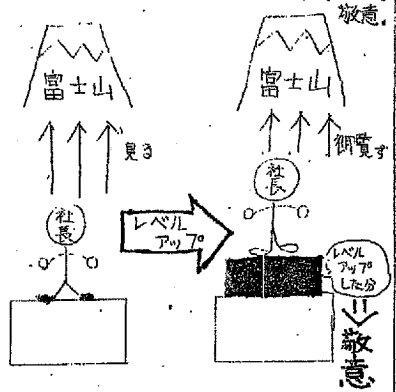
18

19

20

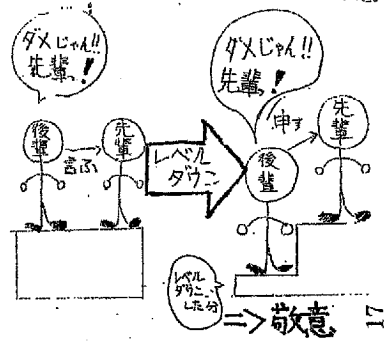
尊敬語

社長が富士山を 見る
↓ レベルアップ
社長が富士山を 御覧ず
↳ 社長の行動に対する敬意。

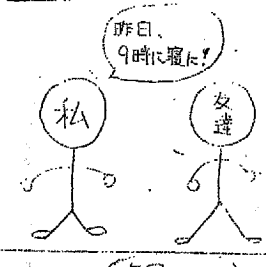


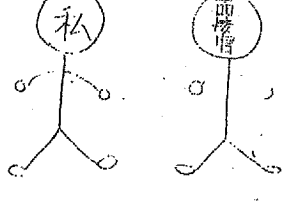
謙譲語

先輩に後輩が文句を言う。
↓ レベルダウン
先輩に後輩が文句を申す。
↳ 文句を言われた先輩にする敬意。



丁寧語





補助プリント④

「更級日記〜竹芝寺〜」

竹芝寺　第一段　本文　　プリント②

傍点がついているのは助動詞。

ここは、昔、竹芝という坂であった。

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。

土地の人でここに住んでいた男を火焚屋の火を焚く衛士に任命して朝廷に差し上げたところ、

国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたり　けるに、

御殿の前の庭を掃きながら、「どうしてこんな辛い目をみるのだろうか。

御前の庭を掃くとて、「なほ苦しきめを見るらむ。

私の故郷で、（あちらに）七つ、（こっちに）三つと酒を仕込み据えてある酒壺に

わが国に七つ三つ造り据えたる酒壺に、

南風が吹けば北になびき北風が吹けば南になびき、西風が吹けば

さし渡したる直垂のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば

東になびき、東風が吹けば西になびく光景を見ないで、このようであることよ。」と独り言を言い、東になびき、東吹けば西になび

くを見で、かくてあるよ。」と独りごち、

ぶつぶつ呟いていたところ、その時、帝の御娘でたいそう大切にされていらっしゃる（御娘が）

つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、

ただひとり、御簾のそばにお出ましになって、柱に寄りかかって、（外を）御覧になると、

ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧するに、

この男がこのように独り言を言うのを（お聞きになり、非常に心を動かされ、

このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、

どのようなひさごがどのようになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので、

いかなるひさごの、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、

御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちらへ参れ」とお呼びになったので、

御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち参れ」と召しければ、

男はかしこまって高欄のそばに参上したところ、

かしこまりて高欄のつらに参りたり　ければ、

「今言った事をもう一度、私に言って聞かせよ」と仰せになったので、

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、

酒壺のことをもう一度申し上げたところ、「私を連れて行って（それを）見せよ。

酒壺のことを、いま一かへり申しければ、「我率て行きて見せよ。

そう言う理由があるのだ」と仰せになったので、恐れ多く恐ろしいと思ったが、

そう言ふ理由があるのだ」と仰せになったので、恐れ多く恐ろしいと思ったが、

さ言ふやうあり。」と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれど、

そうなるはずだったのであろうか、（姫君を）背負い申し上げて国に下る時に、

さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、

言うまでもなく追っ手が追いかけてくるであろうと思って、その夜、勢多の橋のたもとに、

言うまでもなく追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、

この姫君を置き申し上げて、勢多の橋を一間ほど壊して、それを飛び越えて、

この姫君を置き申し上げて、勢多の橋を一間ほど壊して、それを飛び越えて、

この宮を抱き奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、

この姫宮を背負い申し上げて、七日七夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。

この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きに　けり。

「更級日記〜竹芝寺〜」

第一段　本文　　傍点がついているのは助動詞。

太字は係助詞。

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。
国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたり　けるに、
御前の庭を掃くとて、「なほや苦しきめを見るらむ。
わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、
さし渡したる直柄のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば
東になびき、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよ。」と独りごち、
つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、
ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧するに、
このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、
いかなるひさごの、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、
御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち参れ。」と召しければ、
かしこまりて高欄のつらに参りたり　ければ、
「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、
酒壺のことを、いま一かへり申しければ、「我率て行きて見せよ。
さ言ふやうあり。」と仰せられければ、かしこくおそろしと思ひけれど、
さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、
論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、
この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、
この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きに　けり。

第二段　本文　　傍点がついているのは助動詞。

太字は係助詞。

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、
「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げ　ける。」
と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。
論なくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、
勢多の橋こぼれて、え行きやらず。三月といふに武蔵の国に行き着きて、
このをのこを尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、
「我さるべき　にやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、
率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。
このをのこ罪し流せられば、我はいかであれと。
これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。
はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」と仰せられければ、
言はむ方なくて、上りて、帝に、かくなむありつると奏しければ、
「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、
都に返し奉るべき　にもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、
武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせ　じ。
ただ、宮にその国を預け奉らせ給へ。」
よしの宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、
宮など失せ給ひに　ければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。
その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。
それより後、火焚屋に女は居るなり。

補助プリント⑥

「更級日記〜竹芝寺〜」

竹芝寺第二段　本文

プリント③

傍点がついているのは助動詞。

帝と皇后は、姫が姿を消しなさってしまったとひどくご心配になり、お探しになると、

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、

「武蔵の国の衛士の男が、大そうよい香りのするものを首に引っ掛けて飛ぶように逃げていった」

（武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。）

と（ある者が）申し出て、この男を尋ねてみるといなかった。

と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。

言うまでもなく故郷の国に行っているだろうと、朝廷から使者が下り、追いかけてみるのだが、

論なくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、

夥多の橋が壊れて、行き続けることが出来ない。三ケ月という日数で武蔵の国に到着し、

夥多の橋こぼれて、え行きやらず。三月といふに武蔵の国に行き着きて、

この男を捜すと、この姫宮は朝廷の使者をお呼びになって、

このをのこを尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、

「私はそうなるはずの因縁であったのだろう、この男の家が見たくて、

「我さるべきにぞありけむ、このをのこの家ゆかしくて、

連れて行けといったので、連れてきてしまったのだ。大そうここは住みやすく思われる。

率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。

もしこの男が罪せられ、ひどい目にあわせられるならば、私はどうなれというのか。

このをのこ罪し責ぜらるれば、我はいかであれと。

これも前世でこの国に都から移り住むはずの因縁があったのだろう。

これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世にこそありけめ。

早く都に帰って帝や后にこのことを奏上しなさい。」と仰ったので、

はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」と仰せられければ、

（使者は）言いようもなくて、（都に）上って、帝にこのようでしたと奏上したところ、

言はむ方なくて、上りて、帝に、かくなりつると奏しければ、

（帝は）「どうしようもない。もしその男を処罰したとしても、今はこの姫宮を取り返して、

「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、

都に返し申し上げることも出来ない。竹芝の男に、生きている限り終身、

都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、

武蔵の国を預け与えて、租税や労役なども課さないようにしよう。

武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事なさせじ。

武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事なさせじ。

ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばす」

ただ、宮にその国を預け奉らせ給へ。」

といった旨の宣旨が下ったので、（男は）この家を内裏のように造って、住まわせ申し上げた家を、

よしの宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、

姫宮がお亡くなりになったので、寺にしたのを、竹芝寺というのである。

宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。

その姫宮が生みなさった子どもたちはそのまま武蔵という姓を得てここに住んだ（ということだ）。

その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。

それより後、（宮中の）火焚屋には（男はおかず）女が詰めているそうだ。

それより後、火焚屋に女は居るなり。

補助プリント⑦

更級日記〜竹芝寺〜」

「芥川〜伊勢物語　第六段〜」

昔、男ありけり。女のえ得(う)まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを

やっとのことで盗み出して、たいへん（あたりの様子が）暗くなってきた

からうじて盗み出(い)でて、いと暗きに来けり。

芥川という川へ伴っていくと、草の上に結んだ露を（女は）「あれは何？」と

芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何(なに)ぞ。」と

男に尋ねた。行く道のりも長く、夜も更けてきたので、鬼のいる所とは知らないで

な者男に問ひける。行くさき多く、夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、

雷までもがひどくなり、雨もひどく降ったので、荒れ果てた倉の奥に女を押し入れて

神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に女をば奥に押し入れて、

男は弓や胡籙を背負って戸口にいた。早く夜が明けて欲しいと思いながらいたところ、

男、弓、胡籙(やなぐひ)を負ひて戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、

鬼は（女を）一口で食べてしまった。（女は）「あっ」と言ったが、

鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、

（男は）雷の音で聞く事が出来なかった。だんだんと夜が明けるうちに、見れば連れてきた女がいない

神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。

（男は）足を地にこすり付けて泣いたけれど、どうしようもなかった。

足ずりをして泣けども、かひなし。

あの光るのは白玉ですか、何ですかとあの人が尋ねた時に、あれは露ですと答えて、（私も露のように）消えてしまえばよかったのに

白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを

プリント④

ワークシート①

「更級日記〜竹芝寺〜」

プリント①

更級日記……作者は（　　）で、作者十三歳の一〇二〇年から五十二歳の一〇五九年までの、約四十年間を回想して書いた（　　）。

▼「をのこ」と「姫君」について考えてみよう！

▼「をのこ」、「姫君」ってどんな人？本文から説明を抜き出そう！

をのこ…

姫君…

▼尊敬語・謙譲語・丁寧語について

▼尊敬語とは？

話し手(書き手)が動作主に敬意を表す表現

例:見る→御覧ず（見る→御覧になる）

▼謙譲語とは？

話し手(書き手)が動作の受け手に敬意を表す表現

例:行く→参る。

▼丁寧語とは？

話し手（書き手）が聞き手（読み手）に対して、直接、敬意を表すもので、丁寧な言い方をする時に用いられる。

例:年ごろ思ひつること、果たしぬ→年ごろ思ひつること、果たし侍りぬ。

（長年思っていた事を果たした→長年思っていた事を果たしました。）

ワークシート②

「更級日記～竹芝寺～　語句リスト　　プリント①－I

語句	意味	備考
・いにしへ	昔、以前	
・さか	坂	
・火焼屋	宮中警護の衛士が庭火を焚いて見張りをする小屋	
・衛士	警護兵・警備兵	
・奉り	①	動詞「奉る」の連用形
・などや	どうして	
・さし渡し	かけ渡す、さしかける。	「さし渡す」の連用形。
・直柄のひさご	瓢箪を縦に二つに割って作った、まっすぐな柄のひしゃく。	ひさご―ひしゃく
・いみじう	②	「いみじ」の連用形 ウ音便
・かくて	このように	
・かしづか	③	「かしづく」の未然形。
・給ふ	お～になる、……なさる。	補助動詞「給ふ」の連体形。 尊敬語。
・蔡	④	
・御覧ずる	⑤	「御覧ず」の連体形。
・かく	このように	
・いと	大そう	
・あはれに		「あはれなり」の連用形。
・いかなる	どのような	「いかなり」の連体形。
・いかに	どのように	
・ゆかしく	⑥	「ゆかし」の連用形。
・おぼさ	お思いになる。	「おぼす」の未然形。
・高欄	寝殿造りの建物の欄干	
・仰せられ	仰られる	「仰せらる」の連用形。
・一かえり	もう一度	
・申し	申し上げる	「申す」の連用形。
・率	⑦	「率る」の連用形。
・さ言ふようあり	そのように言うわけがあるのだ。	
・かしこく	恐れ多い	「かしこし」連用形。
・おそろし	怖い	「おそろし」終止形。

・奉り	お……申し上げる。	補助動詞「奉る」の連用形。 謙譲語
・論なく		「論なし」の連用形。
・勢多の橋	滋賀県大津市の瀬田川にかかる瀬田橋。	
・一間	橋脚と橋脚の間	
・こほち	⑧	「こほつ」の連用形。
・宮	（ここでは）姫宮	
・かき負ひ	背負う	「かき負ふ」の連用形。
・武蔵の国	現在の東京都・埼玉県・神奈川県	
・おぼしまどひ	⑨	「おぼしまどふ」の連用形。 「ひきかく」の連用形。
・ひきかけ	引き掛ける	「申し出づ」の連用形。
・申し出で	申し出る	「なし」の連用形。
・なかり	ない	
・おほやけ	朝廷・帝	え＋(動詞)＋ず
・え行きらやず	行き続けることが出来なかった。	～することが出来ない。 「ありよし」の連用形＋
・ありよくおぼゆ	住みやすく思われる。	「おぼゆ」の終止形。 「捨ず」の未然形。
・捨ぜ	貴め苛む	
・前の世	前世	
・跡を垂る	(高貴な人が)都から移り住む。	
・宿世	前世からの因縁・宿命。	
・よし	事の次第、いきさつ、事情。	「奏す」の命令形。
・奏せよ	（天皇・皇后）に申し上げよ。	
・言はむ方なく	言いようもなくて	「言ふかひなし」の終止形。
・言ふかひなし	⑩	
・おほやけ事	租税、労役など。	
・宣旨	天皇の仰せを伝える文書。	「失す」＋補助動詞「給ふ」
・内裏	天皇の住む御殿、皇居、御所。	
・失せ給ふ	お亡くなりになる。	

ワークシート③

▼助動詞の表を完成させよう！

なり

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

けり

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

たり

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

らむ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

る

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

む

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

ワークシート④

つ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

す

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

べし

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

ぬ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

けむ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

▼係助詞「や」・「やは」・「か」・「かは」について

係助詞「や」・「やは」・「か」・「かは」の意味は「　」と「　」であり、結びは　　になる。

▼接続助詞「ば」について

順接仮定条件…（もし～ならば）と訳す――　　につく。

順接確定条件…理由・原因（～なので、～から）と訳す、

偶然条件（～と、～ところ）と訳す、

一般的条件（～なときはいつも）と訳す――　　につく。

ワークシート⑤

▼何故、姫宮は武藤の国に行ったのか、考えてみよう！

▼それについて、自分はどう思うか書いてみよう！

ワークシート⑥

▼助動詞の表を完成させよう！

ず

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

き

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

らむ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

じ

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

ごとし

未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

意味……

▼係助詞「ぞ」、「なむ」の意味は「　　」で、結びは　　になる。
「こそ」の意味は「　　」で、結びは　　になる。
「は」はとりたてて指示し、「　　」する（…は、文末の場合「　　」―（…なあ）
「も」は同趣の事柄を挙げて他を類推させる（…もまた、「　　」（…も…も）、文末の場合は詠嘆（…よ、…まも）

ワークシート⑦

▼「竹芝寺」と「芥川」について

▼「芥川」と「竹芝寺」の共通点を考えてみよう！

例：両方とも恋愛の話

▼「芥川」と「竹芝寺」の違う点を考えてみよう！

▼何故、「芥川」と「竹芝寺」は正反対の結果になったか考えてみよう！
また、それについてどう思うか、自分の考えを書いてみよう！

第2節　「竹芝寺」授業実践の文字化資料

第1時　2月14日　　表記は右に従う【T1（江口），T2（森岡），S（生徒）】

T1　それじゃ、授業の方始めたいと思います。いいですか？

S　はぁい。

T1　ほいじゃ、まず始めに今何か妙な蛇ののたくったような字のプリントを配ったと思います。それじゃ、礼をしましょう。

S1　礼、お願いします。（S全員が起立し、礼をした）

T1　はい、えっと今日は前回言ったとおり更級日記の竹芝寺をやります。今日、さっき配ったこの紙（補助プリント①~②）、手元にありますか？みなさん。実はこれはみんなが勉強する更級日記の元々の原文を写したものです。昔の人はこれを読んで、これが元々の更級日記に近いものです。あのね、15ページのね、括弧の所からがみんなが勉強する本文にあたるところ。これを、何かちょっと分かりにくいけど括弧で書いてると思うんよね。括弧で書いてるよね。これ、読める？この括弧の所はね、「これはいにしへたけしばというさかなり」って書いてあるんだけど、みんなどう、読めます？

S2　読めない。

T1　読めないよね。これに比べたら教科書なんて読めるよね、すごい。昔の人はこれで読んでたの。それよりはみんな恵まれてるよね。普通に活字だから。それでは、次にワークシート（ワークシート①）の方を配ります。
（ここでいうワークシートとはワークシート①を指す）

S3　変体仮名だよね。

T1　そうだよね、変体仮名だよね。

T1　えっとね……えっと、それでは今日教科書のところをやるから、便覧の115ページ開いてください。便覧のない人は隣の人とかに見せてもらってね。

T1　えっと、それではワークシートの方見てください。更級日記って書いてあると思うんだけど、1番最初の所。更級日記、作者は誰ですか？その便覧を見て答えてください。どなたでしょうか、作者は。それを埋めてみて。1回それは「更級日記の作者は」のところ、「回想して書いた何々」のところまで埋めてみて。当てるけんね。便覧を見て埋めてください。
（適宜、板書を行った）

T1　はい、それではいきます。S4君。

S4　はい。

T1　更級日記の作者は誰でしょう？

S4　菅原孝標女？

T1　はい、そうです。じゃ、ジャンルは何でしょう。随筆とか、物語とか―

S4　物語、随筆……？

T1　何だろう？更級……？

S4　日記？

T1　そう、日記です。ジャンルは日記です。で、作者は菅原孝標女。もちろんね、これちょっとみんな変に思ったかもしれないけど、これね、彼女の本名ではありません。これはね、作者の人はね、菅原孝標って人の娘さんだから、あの、山田さん家の娘さん、って意味で、菅原孝標女で。ほんとは別に名前があったんだと思うんだけど、でも、今の時代分かってないから、で、この名前が正式名称になってます。だから、本当はこの人の別の名前です。だけど、後世では名前が残っていないので、菅原孝標の娘ということで菅原孝標女ということになってます。作者が菅原孝標女で、この人がそこに書いてある通り13歳から52歳までの約40年間を回想して書いた日記です。

S5　回想って？

T1　回想ね。うーんと、例えば昔の事を思い出したりしないかな、みんな。「あー、昔、小学1年生の時こんな事あったなぁー」とかー、思い出したりしませんか、みなさん。そういう風に昔の事を思い出したりすること、「こんな事あったなぁー」とか、そういう事を思い出しながら、思い出し、思い出しながら書いたのが更級日記なのね。この40年間を、「あーこんな事をあったよー」と思い出しながら書いた日記なのね。だから、今日、みんなが思ってるような「日記」とはちょっと違うかもしれない。それじゃ、えっと、教科書の方移りましょう。えっとね、教科書の248ページ、開いてください。えっと、まず最初にね、えっとね、プリントのね、プリント②って書いてある所の裏側？にね、語句リストっていうのが書いてあるよね。プリントのそこ、プリント①－1って書いてあるとこ、何か妙な表みたいなのがあるよね。えっと、それではね、あの今から私が読みますので、分からない読みがあるところは読み方を書いて、それプラスそこの語句に載ってない分からない単語あればチェックしておいて下さい。いいですか？はい。いきまーす。

（ここでいうプリント②とはワークシート②を指す）

T1　（「これは、いにしへ竹芝といふさかなり～それより後、火焚屋に女は居るなり。」までを机間巡視をしながらゆっくりと音読した。）

（音読を終えて）実はこの話は2段に分けられます。えっとね、250ページの「帝、后」の前まで、「武蔵の国に行き着きにけり。」で、1回そこでお話は切れます。だから2つに分けられてます。じゃ、今ちょっと分からない単語と意味が分からない単語についてもチェックしてと言ったんだけど、ありますか？この語句リストに載ってないやつで。あったら、手を挙げなくてもいいので、挙げてみて、くれる？もしあれば、分からない単語。ないかな。それでは、ないようなので、みんな辞書持って来てますか？辞書使うよ、次。

えっとね、それではあてます、次。この語句リストの所、実は完璧ではありません。空いてる所があります。まず、そこだけチェックしてね。番号がついてないところも空いてるからね。えっとね、「奉り」という所、「いみじう」、「かしづか」、「際」、「御覧ずる」、「あはれに」、「ゆかしく」、「率る」、えっとね、この率ね。「論なく」、えっと、2枚目はこっちです。もう1つの方ね。はい。「率る」、この字とで、次に「論なく」、「論なく」の所、次。その「奉り」の下。そこ、「論なく」かな。「こほち」、「おぼしまどひ」、で、最後が「言ふかひなし」、えっとその次のページね。そこ今からちょっと辞書で調べてもらいます。当てます。誰がどこに当たるか分かんないから、ちゃんと調べておくこと。じゃ、今からちょうど46分まで、調べてもらいます。

（机間指導を行いながら、途中で時間配分のミスに気づく）

T1　ごめん、45分は間違いでした。47分まで！ごめんなさい。

S6・7　変わらねー。

T1　変わらなかった？ごめん、みんなの様子を見ながら時間を延ばします。

S8　「いみじう」の基本形は？

T1　「いみじう」っていうのは「いみじ」ね。本当は「いみじ」は「いみじく」なんだけど、ウ音便になって「ク」が「ウ」になってるのね。

（机間指導を戻り、しばらくして教壇に戻る）

T1　（時計を見て）じゃぁ、そろそろ。ちょっとまだ終わってないかもしれないんだけど、あてられた時に「まだ終わってない」と言ってくだされば、いいと思います。じゃ、いきまーす。じゃ、S9君、「奉る」はどんな意味だった？「奉り」、1番、①の所ね。

S9　差し上げる。

T1　差し上げる、はいそうです。差し上げるとか、献上するとか、謙譲語だよね。じゃ、次S10さん。「いみじう」。

S10　……。（小声で聞き取れない）

T1　ごめん、もう一回お願いします。

S10　並々しい、激しい……。

T1　並々しい、激しい……他にはないかな？

S2　素晴らしいとかー。

T1　そうだね。並々でないとか、素晴らしいとか……そういう事ね。はい、それでは次、S11君、「かしづか」、「かしづく」。

S11　大切に育てる。

T1　大切に育てる、はいそうです。じゃS12さん。「際」。

S12　端、へり？

T1　はい、今回は端、へりです。じゃ、次にS13さん。「御覧ずる」。

S13　まだ終わってません。
T1　はい、じゃあ、S14さん。
S14　御覧になる。
T1　はい、そうです。じゃあ、「あはれに」、S15さん
S15　調べてません。
T1　はい、じゃあ、S16君、「あはれに」は？
S16　いとしい。
T1　いとしい……なるほど。
S17　しみじみと。
T1　しみじみと、はい。色々と「あはれに」、「あはれなり」には意味があるのね。じゃ、他の「あはれに」の意味、調べた人。じゃ、S17君。
S17　さっきも言ったけど―。
T1　さっきも言ってくれたね。だけど、もう1度。
S17　しみじみと心打たれる。
T1　しみじみと心打たれる、はい。じゃ、次、S18君。「ゆかし」。
S18　興味が持たれる。
T1　興味が持たれる、そこに何とかしたい、何とかしたい、何とかしたいって書いてない？あのね、見たい、聞きたい、知りたいっていうのがあって、「ゆかし」っていう意味には。で、文章によってそれが見たいなのか、聞きたいなのか、知りたいなのか、自分で選んで入れるのね。じゃ、次、「率る」はS19さん。
S19　引き連れる、持って行く。
T1　引き連れる、持って行く、はいそうです。じゃ、次。みんなついて来てる？分からない所は後でもう1度言うから。じゃ、次、「論なく」の所をS20さん。
S20　言うまでもなく。
T1　言うまでもなく、はい、そうです。聞き逃した単語については後で説明するから。今は発表に集中して埋めてね。次は「こほち」、「こほち」の所をS21さん。
S21　調べてません。
T1　じゃ、S22君。
S22　打ち壊す。
T1　打ち壊す、はい。「こほち」の次は「おぼしまどふ」、「おぼしまどひ」、S3君。
S3　心配なさる
T1　心配なさる、はい。これは尊敬語、謙譲語？

S3　謙譲語？

T1　んー、ちょっと尊敬語だね。じゃ、後でその尊敬語と謙譲語について説明するから、ちゃんと答えられるようになってね。じゃ、最後かな、はい。じゃ、ラスト、「言ふかひなし」をS14さん。

S14　情けない。

T1　情けない、もう1つ意味がなかったかな？

S14　どうしようもない。

T1　そう、今回はどうしようもないです。じゃ、さっきちょっと聞き取れなかった所のある人、挙げてくれる。

S4　率る。

T1　率る、引き連れる。これは一緒に連れて行くって意味ね。じゃ、他には？聞き取れなかったもの、あるかな？じゃ、あともし聞き取れなかった所があったら、各自後で辞書でしっかり埋めて、後で使うから、後々のために、自分で埋めてください。じゃ、次いきます。えっとね、さっき本文を読んだと思います。本文読んだよね、さっき。一応、みんな本文は一度読んできた、かな？じゃ、ちょっとね、今からプリントの方やります。プリント①の所あるよね、これ。（プリント①を提示）これなんだけど―、『『をのこ』と『姫君』について考えてみよう」って所があると思います。で、この「をのこ」とっていう人がどんな人だったか、本文に書いてあるよね。どういう人だったか、ちょっと本文から説明を抜き出してもらおうかな。それでは、あの「をのこ」ってこんな人だよっていう説明がしてあります。それを抜き出してもらいましょう。じゃあね、S21さん。「をのこ」はどういう役職の人でしたか？本文に書いてあるよね。（ここでいうプリント①とはワークシート①をさす）

S21　火焚屋の火焚く衛士。

T1　うん、そうそう、火焚屋の火焚く衛士だったよね。そうです、火焚屋の火焚く衛士。じゃ、次。他に男の説明あったら言ってみて。じゃ、「姫君」、実は姫君が出てくるよね？「姫君」はどんな立場の人でしょうか？じゃ、えっとね、S13さん。「姫君」はどんな立場の人でしたか？

S13　……

T1　「姫君」は誰の娘だった、かな？誰の娘だったかな？あ、「姫君」って書いてあるところは、「御むすめ」って書いてある所ね。ごめんね、ちょっと分かりにくかったね。この姫君ってのは、「御むすめ」、「皇女」って呼ばれている人の事です。この人は誰の娘ですか。

S13　帝。

T1　そうです。帝の「御むすめ」です。ちょっと、みんな注目。（板書に注目させる）いい、この2人さ、この火焚屋の火焚く衛士というのは、（姫君のと

ころを指し）この人と比べて、使用人と主人みたいな関係なのね。天皇、この火焚屋の火焚く衛士というのは、天皇に仕えている人で、低いよね、天皇にっていうか、下っ端の家来。で、この帝の御むすめってのはそれなりに身分の高い女性よね。で、この２人には身分の差があります。すごい身分の差があるのね。ひどい身分の差があるわけよ。で、この文章には結構尊敬語、謙譲語というのが使われています。で、みんな、１番最後のページで「『尊敬語』、『謙譲語』、『丁寧語』について」っていう所があると思います。あっ、これね、裏ね。裏についてちょっと説明します。あのね、こういう「をのこ」と「姫君」とか身分の差があるから、今回は敬語というものがいっぱい使われています。で、尊敬語って言うのは、たとえば、んーとね、物語とか話の中の世界があるよね。で、ここから、ここに、これは話し手が、もしくは書き手が「こうであったよ」って喋ってるんよ、話してるんよ。「こうだったよ」って話したり、書いたりしてるんよ。で、たとえば、尊敬語の場合は、たとえばＡさんという人がいます。Ａさんはあるものを見てます。見てるのね。Ａさんがあるものを見てます。これやったら、Ａさんは普通の人ね。そうね、たとえば話し手が「Ａさんは何かを見ていました」と話したと物語の中で。で、この人がたとえばＡさんがどこかの国の王様だったとか、どこかの身分の高い人だったから、この話し手はＡさんに対して敬意を払いたいわけよ。敬意を払うんだったらどうするかっていうと、Ａさんが今見るっていう行動をしてるよね、この見るって行動を「御覧ず」ってすることによって、さっきさ、「御覧ず」っていうのは御覧になるっていう尊敬語になったよね。「御覧ず」ってすることによって、Ａさんの行動にプラスして、ちょっとＡさんを高い位置におくわけよ。たとえば、よく「先生がご飯を食べる」って言わないよね、あの尊敬の時には。「お食べになる」、「召し上がる」って言わない？あのね、たとえば、これ書いてある通り、話し手が動作主に敬意を示す表現っていうことで、この見るって行動をしているのはＡさんだよね。見るって行動をしているＡさんに対して、話し手は敬意を払っているわけよ。だから、Ａさんの行動を「御覧ず」ってすることによって、Ａさんに対して敬意を払ってるわけよ、OK?

（ここでT1が焦っている事に気づいたT2からT1はアドバイスを受けた。）

T1　はい。これが尊敬語の仕組みね。たとえば、Ａさん、この話し手はＡさんに対してね、尊敬の意を抱いてるわけよ。たとえば、Ａさんにとって、学校の先生かもしれない、Ａさんは。とにかく自分より格の高い人、身分とがが上の人、で、たとえば、普通にＡさんがたとえば、Ａは犬を見る、これじゃ普通の文だよね。Ａが犬を見る、たとえば、え？Ａというのが分かりにくいから、たとえば—

T1　S4君が犬を見るっていうのは、普通に友達同士とかでも使うよね。たとえば、誰々ちゃんが映画を見てるとか—、じゃそこがいきなりT2先生になったとする。T2先生が、S4君から変わったとする。さぁ、犬を見るだったら、どうなる？普通の言葉になっちゃうよね。みんなが面接とかであの、先生が見るとか言わないよね？面接とかでは—。

S　（板書で）T2先生の先生が抜けてる。

T1　ああ、ごめんね。こういう事があるから。T2先生が犬を、見るじゃなくて、あのさ—。

S2　御覧になる。

T1　ではなくて、御覧になるだよね。だから、御覧になる。することに—。御覧になるになるよね。だから、この見るって行為を御覧にするってことにグレードアップさせて敬意を、敬意を表すってことね。だから、さっきのここの、たとえばこのAさんという立場があってAさんが見るだったらAさんは普通の人、で、このAさんの行動をグレードアップさせる事によって、見るを御覧ずとか、言うを仰す、仰るって言葉に変えるとか、とにかくその行動をグレードアップさせる事によって、敬意を示すのね、それが尊敬語。で、次に—、ちょっと（板書を）消すね。また後でもう一回、ごめんね。じゃ、次に謙譲語ってのがどんな言葉か。

（チャイムが鳴った）

T1　謙譲語ってのがどういう言葉かというと、たとえば私がS23さんに言うというと普通の言葉よね。で、じゃ次の私が—。

S　申す、もの申す。

T1　そう申すだよ。あってる。T2先生にものを言う時に、T2先生に申すってする事で、で、T2先生に敬意を払いたいから、動作、言うっていう動作を受けたのはT2先生、言うって動作をしたのは私だよね。で、私の行為を低める事によって、先生を高めるという意味で謙譲語、です。さっきこれ（板書）であったとしたら、たとえば、AとBって人が居て、この人に、まぁ同じ立場にいたとして、言うってするんだけど、同じ立場だったらよ。もしこのBさんが偉い人だったらAさんの立場を、Aさんの行動を低めて申すにします。だから、動作を受ける人に対して敬意を払いたいから、その動作をしてる人を低める、低めてその人に敬意を表すのが謙譲語です。で、丁寧語ってのは、まぁ、話し手が聞き手、だから私が今みなさんに話してて、みなさんに「～ですよね」とか何とか言ってるのが丁寧語。みんな先生とかと話す時に、ため口はきかないよね、そんなに—？

S　きく。

T1　きく？きくかな。じゃ、改まった場所で「～ですよね」とかそういう風のが

丁寧語。出来れば、ちょっと説明が不備だったんだけど、尊敬語と謙譲語、丁寧語との違いと、あと更級日記の作者とジャンルについては覚えといてください。これで終わりです。ごめんなさい。

S　はい。

（授業終了）

第２時　２月 15 日

（授業前に補助プリント③④とワークシート③～⑤を配布）

S1　気をつけ、礼。

T1　はい、こんにちは。えっと、昨日に続いて、今回も、今日も更級日記をやります。えっと、じゃ、昨日の復習事項です。

（ここで前回の復習として、「更級日記」の作者の名前、登場人物である「をのこ」と「姫君」についてＳに訊ねた。）

T1　（前時の復習を終え）はい、その通りです。みんなよく昨日の内容覚えてます。じゃ、まず最初にちょっと変ちくりんな絵が書いてあるプリント（補助プリント③指す）を出してください。昨日ちょっと失敗したけんね、そのプリントの、尊敬語って、半分切れてるけど、富士山って書いてあるやつがあると思うんやけど、まず最初にそっちの方見てくれる、一番上の所、文章、文例があるよね。「社長が富士山を見る」と「社長が富士山を御覧ず」っていう二文が書いてあります。えっとね、この「社長が富士山を見る」っていう言葉の「見る」って行為を「御覧ず」に言葉に変えるとね、「御覧ず」って言葉に変えると、社長が 見てる行動に対して敬意を払ってるって事になるのね、社長の行動に対する敬意を払ってるって事は、結局誰に敬意を払っているか？S12 さん、答えてください。誰に敬意を払ってる、社長の行動に敬意を払ってるんだから、誰に意を払ってる？

S12　社長に。

T1　そう、正解です。そういう風に動作をしてる人、その動作をしてる人、「食べる」なら「召し上がる」とか、そういう行動をしている人に対して敬意を払うのが尊敬語です。で、逆に、この謙譲語の方見て下さい。これはね、あの、例文が「先輩に後輩が文句を言う」、「先輩が後輩に文句を申す」とあります。ね、これは、文句を言われた先輩に対しての敬意を示しています。言うを申すに変える事によって、文句を言われた先輩に対する敬意を示します。これはどういう事かといいますと、この図を見てもらえば分かるのね。えっとね、「ダメじゃん、先輩」って言われてるやん、この場合はあの対等な、言う、後輩が先輩に文句を言うだから、対等な関係だけれども、申すという言葉にすると、この後輩の段がぐぐぐーっと下に下がって、ちょっと先輩の方が高い位置にいるようになるよね。要するに、行動をした方の身分を低くすることによって、行動を受けた人に対して敬意を払うのが謙譲語です。でね、この今回の古典の場合は、これはその人、行動している人自身がそういう風に自分が相手よりへりくだろうへりくだろうとしているんじゃなくて、この古典の地の文では、作者自身が、たとえば、帝がいて、家来がいます、この人（帝）に家来が何か言いました。行動としては家来は帝に「言う」なんよ、だけどこの世界を見てい

た話し手、書き手、作者は、この言うって行動を、家来は帝に言うって行動をしてるんよ、だけど作者はこの人（帝）に敬意を払いたいんよ、だからこの行動を申すって変える事によって、この人（家来）の位を、行動をへりくださせて、帝に敬意を払おうとするんよ。だから、行動を受ける方を、たとえば、うーん、挨拶……じゃない。たとえば、物を、貰うじゃない。たとえば、プレゼントを貰うとき、「結構な物を頂きました」って言うよね。物を頂くっていうよね、何か目上の人から物を貰う時、頂きましたって。ホントは貰うなんだけど頂くにするよね。それと一緒で、たとえば帝がこの家来に何かをあげたから家来は貰ったとする。家来はこれを頂くとは言わない、貰ったという事実がある。帝が家来に、家来が帝からお金を貰った、給料を貰ったって事は、給料を貰ったっていう事実があります。この事実を作者が見て、この貰っただと、帝と家来は対等な位置になっちゃうよね。友達同士だったら、「貰った」とか普通に言うけど、この2人には身分差があるわけじゃん。帝は上で、家来は下でしょう？上下関係があります。作者はこの上下関係を示したいから、この「貰った」って言葉を「頂く」って言葉に変える事によって、この人（家来）の位置を下げて、帝を高い位置に置こうとするのね。それがこの図で言いたかった事なんですね。で、次に丁寧語に関してなんだけど、これはみんなもう多分経験済みかもしれない。たとえば、友達同士だったらね、「昨日何時に寝た？」って言われて、「昨日9時に寝た」って言うよね。まぁ、早すぎるけど9時は。まぁ、12時とかそれぐらいなら分かるんだけど。「9時に寝た」って言うよね、友達同士だったら。じゃ、もし面接官とか自分より目上の人だったらどうする？「昨日9時に寝た」って言う？言わないよね。「昨日9時に寝ました」って、ちゃんと「～ました」って言うよね。それが丁寧語なのね。で、古語に関しても、そういう丁寧語が存在してます。でね、その丁寧語の例に関しては、えっと昨日配ったプリント①（ワークシート①）の最後の方に載ってるので、確認をしておいてください。何か他に分からない事がありますか？もし分からないような事があれば、（文法書を取り出し）、ここの第4章で後で確認してみてください。それでは、いいでしょうか？じゃ、授業の方始めたいと思います。えっとね、それじゃ、今日はまず最初に、昨日「竹芝寺」読んでもらったよね、第1段と第2段、じゃ、読んでもらったので、ちょっとこれ、次は読んでもらおうかなと思います。じゃ、いきます、S16君。第1段、「竹芝寺」読んでください。みんなに聞こえるように。えっとね、教科書の方ね。教科書の248ページ。

S16　（「これは、いにしへ竹芝といふさかなり～武蔵の国に行き着きにけり。」までを音読、T1は適宜指導を行った）

T1　はい、ありがとう。じゃ、えっと、それではプリントの方、プリント②の方見

て下さい。えっとね、ここね、もう現代語訳書いてます、プリント②の話。
（ここでいうプリント②とは補助プリント④をさす）
で、その裏に助動詞があります。助動詞の活用表とか、今日みんなこれ（文法書）持ってきてるよね、みんなだいたい、助動詞の表。これを使ってみんなにこの助動詞の表を完成させてもらいます。じゃあね、ちょっと割り当てをします。S21さんの列は「なり」と「けり」の所を埋めて完成させてください。S7君の所は、「たり」と「らむ」の所を完成させて下さい、S10さんの所は「る」と「む」S12さんの所が「つ」と「す」、S13さんの所が「べし」と「ぬ」、S19さんの所が「けむ」と係助詞、接続助詞の所を完成させてください。じゃ、今から48分まで、5分間どこが早いか、1番先にもう両方とも終わった所から、どこが1番早いか見ておきます。
（ここでいうプリント②とはワークシート③と④をさす）
（机間指導を行う）

T1　じゃ、48分になりましたので、発表してもらおうかな。じゃ、えっとね、S5君。えっと、「なり」の活用形をお願いします。大きな声でね、みんなに聞こえるように。「なり」の活用形。

S5　終止形。

T1　あのね、活用形じゃなくて活用表ね。

S5　なら、なり、に、なり、なる、なれ、なれ

T1　もう少しゆっくりお願い。

S5　なら、なり、に、なり、なる、なれ、なれ。

T1　えっとね、それで「に」は終止形じゃないよ。連用形だよ、終止形じゃないよ。なら、なり、に……ね？えっとね、未然形がなら、連用形がなり、に、終止形がなり、連体形がなる、已然形がなれ、命令形がなれ。じゃ、S5君、意味は？

S5　断定。

T1　断定です、あってます。今回の「なり」の意味は断定です。
（この後、「なり」と同様、「けり」・「たり」・「らむ」・「る」・「む」・「つ」・「す」・「べし」・「ぬ」・「けむ」の助動詞の活用表・意味を確認し、適宜説明を行った。）

T1　じゃ、最後に係助詞、「や、やは、か、かは」とのがあります。じゃ、その所をS20さん、係助詞、「や、やは、か、かは」の意味は何だったでしょう？

S20　～か、いや～ない。

T1　えっと、日本語訳ではなくて。

S20　疑問と反語。

T1　はい、そうです。疑問と反語です。さっき、S20さんが言ってくれたから、みんな日本語訳のほうはわかったよね。～か、～か、いや～ないってのはしっ

かり覚えてください。ちょうど、それについては296と297があります、もし聞き取れなかったら確認してね。じゃ、結びは何になりますか。

S20　連体形。

T1　はい、連体形です、結びは。じゃ、次に接続助詞「ば」についてやります。順接仮定条件、これは、もし～ならばって訳すんだけど、これは何形につきますか、S19さん。

S19　未然形。

T1　はい、その通りです。はい、じゃ、順接確定条件、原因・理由、～なので、～から、偶然条件、～と、～したところ、一般条件、～な時はいつも、という時には何形につくでしょう？S19さん、もう1度。

S19　已然形。

T1　はい、その通りです。じゃあね、みんな、それではその活用表を見たまんま、教科書の方に移ってください。じゃあね、今から助動詞をこの助動詞は何形か聞くので、答えてね。いい？「これは、いにしへ竹芝といふさかなり。」は助動詞の断定なんだけど、何形でしょうか、S14さん。何形かな？

S14　終止形。

T1　終止形です、正解です。じゃ、次に、だから、終止形だから、この日本文の意味が～であったと書いてあるのね。～であった、ね。じゃ、いきます。じゃ、「国の人のありけるを、」の「ける」のところを、けるは何だったか、S15さん。「ける」は何形でしょうか？連体形、終止形？

S15　終止形。

T1　終止形？「ありける」よ、「ける」は何形だったかな。

S15　連用形。

T1　連用形、だったかな？

S15　連体形。

T1　連体形、はい、連体形です。次に「さし奉りたりける」の「たり」は何形でしょうか、S10さん。

S10　……連用形。

T1　はい、連用形です。次に、「などや苦しきめを見るらむ」の所なんだけれども、「や」は係助詞だよね、「や」の結びはどこでしょうか、S19さん。

S19　……。

T1　「や」の結びは連体形になるんだけども、この助動詞の中で、係り結びの法則ってのがあるよね。その係結びの法則で、本当は終止形の形なんだけれども、連体形の形になってるのは何かな？

S19　……。

T1　「らむ」は何形かな？

S19　連体形。

T1　連体形です、そう。だから、「や」と「苦しきめを見るらむ」は係り結びの法則で、変わってます。でも、ちょっと、あの、○、○、らむ、らむ、らめ、○、「らむ」が終止形と一緒だから、混乱しやすいから、見逃しやすいんだけど、「や」があるから、「らむ」が連体形と言えます。終止形としないように。あの、ちゃんと、ここに係助詞の「や」があるからね。気をつけてください。じゃ、もう1つ「や」があります。250ページのね、「さるべきにやありけむ」、えっとね、ちょうど4行目、「かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ」の所の「や」の結びは何でしょうか。えっと、S2君。

S2　む？

T1　む、惜しい。もう1つ落下してる。何か、むだけじゃない。「さるべきにやあり、けむ」。

S2　「けむ」。

T1　そう、「けむ」です。「けむ」は何形ですか？今回、「や」があるから―。

S2　連体形。

T1　そう、連体です。これも係り結びの法則ね。○、○、けむ、けむ、けめ、○だから、これ終止形に間違えやすいけど、これ連体形の「けむ」ね。これ、「や」があるから。じゃ、さっきの所に戻ります。えっとね。「造り据ゑ、たる酒壷」、ごめん248ページの「造り据ゑたる酒壷に」の「据ゑたる」の「たる」は何形でしょうか？これは存続の助動詞なんだけど、何形でしょうか。S16君。

S16　……。

T1　次に名詞が来てるから、酒壷っていう―。

S16　……。

T1　さっきの表見て、「たり」の「たる」の所は何形になってる？

S16　終止形。

T1　終止形ではないね、惜しいけど。

S16　連体形。

T1　連体形です、その通り。じゃ、次の「さし渡したる」なんだけど、これも連体形です。じゃ、次。この「つぶやきける」も連体形、じゃ「いみじうかしづかれ給ふ」の「れ」は何形。これは受身の助動詞の「る」なんだけど、何形でしょうか、S11君。

S11　連用形。

T1　連用形、はい、その通りです。じゃ、次―。「かしづかれ給ふ」の「れ」は助動詞です。

（チャイムが鳴った）

T1　ごめんなさいね、助動詞の説明、途中で終わってしまったんですが、みなさん、ここ（プリント②）の4時間目にいるので、この現代文をしっかり読んでおいてください、いいですね。それから、もう一つ、プリントで今日ちょっと間に合わなかったんだけど、明日、「何故姫宮は武蔵の国に行ったのか」という事を最初に聞きます。だから、ここはちゃんときちんとやってきてください。いいですか？これを読んで。これを読めば分かりますので—

（授業終了）

（プリント②とは補助プリント④、プリントはワークシート⑤をさす）

第3時　2月17日

S　起立、礼、お願いします。

T1　こんにちは、えっと、今日はT2先生はお休みなんですが、授業はやります。だから、しっかりやって下さいね。

S　はい。

T1　おとついやった事、みなさん覚えてますか。はい、係助詞と一

S3　表作りました。

（ここで前時の復習として、係助詞とその結びを文から指摘させた。）

T1　じゃ、今日の授業の方に移ります。

（補助プリント⑤を配布）

T1　えっと、今配ったプリントは実は「助動詞」と「係助詞」についてピックアップしたもので、あの、横に点々がついてるのが助動詞です。あっ、足りない？

T1　横に点々がついてるのが助動詞、太くなってるのが係助詞です。今日はこの第2段のこの本文を使って、助動詞をみなさんに探してもらいたいと思います、この前ちょっと時間かかったけんね。で、今回は表が、一応用意してあるんだけど、今日はその表を作るんじゃなくて、表を見て、活用形と意味を答えてもらいます。教科書の294ページを開いてください。いいでしょうか？

S1　はい、248ですか？

T1　294です、ごめんなさい。294です。

（プリント③を配布、これは補助プリント⑥とワークシート⑥を指す）

T1　それじゃ、早速もう移ります。いいでしょうか？じゃ、「ず」、そこね（プリント③）その裏のこれ、ここに載っているのは現代語訳なんだけど、プリント③って書いてある表の方は、これは後で使いますので、今はその裏のこの助動詞の表の方を見て下さい。よろしいでしょうか。じゃ、早速あてます。よろしいでしょうか。（プリント③の裏はワークシート⑥をさす）

S5　よろしくない。

T1　よろしくない？でもあてなきゃいけないのよ。誰があてられるかは分かりません、私の気分次第です。じゃ、S15さん。

S15　「ず」？

T1　「ず」。

S15　え、これ言えばいいの？

T1　うん、言えばいいよ。活用形を。

S15　ず、ぬ、ん？

T1　えっとね、ず、ざら、ず、ざり、って一。

S15　ず、ざら、ず、ざり、ず、ぬ、ざる、ね、ざれ、ざれ。

T1　そうです。じゃ、意味は？

S15　打消。

T1　そうです、打消です。ず、ざら、ず、ざり、ず、○、ぬ、ざる、ね、ざれ、○、ざれです。で、意味は打消です。じゃ、完成させるのは後でいいので、またあてますね。

（この後、「ず」と同様に「き」・「らる」・「じ」・「ごとし」の助動詞の活用表と意味を確認させ、適宜説明を行った。）

T1　じゃ、次、係助詞についていきます。これ前もやったんだけど、297を見て下さい。これ、「ぞ・なむ」の意味は何で、結びは何になるのか空欄を埋めてもらいます。S8君。「ぞ・なむ」の意味は何？んとね、297の係助詞って書いてあるところ。

S17　強意。

T1　強意だね、じゃ結びは？

S17　連体形。

T1　連体形だね。じゃ、次、「こそ」の意味は～で、結びは～になるって所を、S10さん。

S10　強意、已然形。

T1　強意、結びは已然形ね。その通りです。じゃあね、次はちょっと長いんだけど、「は」、はとりたてて指示し、～する、文末の場合は～という所を埋めてください。んとね、だったら、S11君。297ページね。

S11　強調する。

T1　強調です、はい。文末に来ると何になるの？

S11　詠嘆？

T1　詠嘆です、はい。で、～なぁと訳します。じゃ、次に、「も」、いきます。「も」を誰にあてようかな、んと、S13さん、「も」は何かな？～もまたって訳する。「も」。

S13　並列。

T1　はい、並列。同趣の事柄を挙げて他を類推させる、～もまた、並列、～も～も、文末の場合は詠嘆。「も」の意味は並列、詠嘆、類推です。ちゃんと覚えてくださいね。それでは、じゃ、さっき配った大きなプリントがあったと思います、みなさん。よろしいでしょうか？ちょっと眠そうな人がいるんで、またあてましょう。じゃあね、この大きな点々が横についてる、さっき説明したプリントの方（補助プリント⑤）出してください。裏が白いやつね。じゃ、ちょっと今日は出てきた今さっきみんなに埋めてもらった「ず」、「き」、「らる」、「じ」、「ごとし」の所の活用形、この文の中にちゃんと出てくるの

で、その文章ではどのような形になっているか答えてもらいます。じゃ、んとね「率て行けと言ひしかば」ってあるよね。えっとね、姫君の言葉の所で、第2段のここね。実は「しか」はさっき答えてもらった助動詞の活用形です。さて、これは何の活用形で、何の活用形なのかを答えてもらいます。いい？えっとね、じゃS22君。もしちょっと分かんないなと思ったら、294の所を見直して、「しか」ってのがないかな調べてみて。

S22　已然形。

T1　何の已然形？

S22　「き」。

T1　「き」の已然形、はいそうです。正解です。じゃあ、次、何形でしょうか？（おほやけ事もなさせじの「じ」）をS12さん。これ、まるで終わってるよね、文末で。何かな？

S12　終止形。

T1　終止形ね。終止形で、ここは元々は何？

S12　「じ」。

T1　「じ」だね。「じ」の終止形です。じゃ、次、とね、S18君、「ず」。

S18　終止形。

T1　はい、その通りです。はい、じゃ、次、「ごとく」、S14さん。

S14　終止形。

T1　終止形……か？これ、「造りて」って書いてあるよね。「造りて」ってのは動詞で、用言って言ったよね。だから、用言が下に来る場合は、ここは何になるかな？

S14　……。

T1　あのね、下に動詞が来る場合は、連用形になります。連用形になる時は下に動詞があると思ってください。これは連用形ってのは分かったけど、これは何の連用形？

S14　「ごとく」？

T1　「ごとし」です。じゃ、次、最後に「らる」の所をやりましょうか。じゃ、この「られ」は「らる」の何形であるかを答えてもらいます、S9君。「らる」の何形？

S9　連用形。

T1　連用形、本当に連用形かい？

S19　未然形。

T1　はい、未然形。られ、られ、らる、らるる、らるれ、られよ、ね。で、未然形です。で、みんな、一瞬何で「ば」がつくのに、已然形なのかなと思った人もいるんじゃないかな、もしかしたら。この「ば」は接続助詞の所

を見てみよっか。えっと、この前のプリント（ワークシート①）の所にも載せとったかな。未然形につくと、もし～ならばって書いてあるよね、だから、掠ぜられれば、掠ずっていうのがどんな意味だったか、この前のプリントに書いたよね。えっと、語句リスト（ワークシート②）持ってきとる。第１回目の時に配った所に、「掠ず」ってのの言葉の意味があるんだけど、この言葉の意味は何だった。ちょっと痛めつけるって意味です、痛めつけるのね。で、未然形プラス「ば」は、もし～ならば、だから、掠ぜられればだから、もし痛めつけられたならば、となります。これは覚えておいてね、重要だよ、日本語に訳すときにね。じゃ、文法事項はこれでおしまい。じゃ、えっと、みなさん、２時間目の授業で配った、プリント②（ワークシート⑤）を出してください。この前、宿題を出したと思うのですが、みんな読んだ、あれ、日本語訳。もし、ちょっと、ないよっていう人がいれば、少しあまりがあるんであげますよ。いい？大丈夫？で、何かちょっとここを考えて言ったよね。「何故、姫宮は武蔵の国に行ったのか考えてみよう」って所があったと思うんだけれども、これは、今日考えましょう。今日この本文を読んで考えたいと思います。じゃ、この日本語訳の所、少し太字になってる所じゃなくて、細字になってる所を読んでもらおうと思います。じゃ、誰に読んでもらおうかな、この日本語訳。じゃ、S16君。

S16　（補助プリント④の現代語訳を音読）

T1　今第１段を読んでもらったと思うんだけど、登場人物は誰がいたかな。じゃ、S15さん。登場人物は誰がいたかな？

S15　帝のむすめ。

T1　帝のむすめ。もう１人いたよね、誰がいたか覚えてる？

S15　土地の人。

T1　そう、土地の人ね。つまり、これは、火焚く衛士だった「をのこ」ね。この話、みんな、どんな話か分かったかな、意味的に。どう？実はこれ、駆け落ちの話に近いんですよ。駆け落ちなの。あの、お姫様と身分の低い男との恋物語なのよ。で、男の人がね、ある意味、「お前ちょっと働いて来い」と国から奉公に出されたわけよ、「お前、ちょっと帝の所で働いて来い」と追い出されたわけよ。やっぱ、ホームシックにかかるわけよ、みんな。で、帝の所で働きながら、「ああ、故郷の風景が懐かしいな」と思ってたわけ、そしたらそれを天皇の娘さん、姫君がそれを聞いとって、「どんな光景なんだろう？」と思って、そこで男を近くに呼び寄せて、「ちょっとあんた、どんな光景なのか、私をあんたの国に連れてって見せなさいよ」って命令をしたのよ。男は天皇の娘なんて勝手に連れ出したら、どうなる？どう、S22君。勝手に天皇のお姫様を連れ出したら、男はどうなる？

S22　斬られる。

T1　ああ、うん、可能性によっては殺されるね、確かに。とにかく、男は身分が低いやろ、身分の低い男がお姫様を半ば誘拐した形になるわけよ。だから、本当は罰せられる事なのね。だけど、男はお姫様が「どうしても連れてってくれ」って言うから、「もうそこまで言うならー」って思って、お姫様を連れて自分の国に帰ったのね。で、その過程で、すごいのは、お姫様がいるのは京都です。で、男の国は武蔵の国、今の東京都です。京都から東京都って今はどのくらいかかるかな？

S　飛行機で2時間。

T1　飛行機で2時間、なるほど。でも、昔は新幹線とかなかったよね。じゃ、大体の人は、お金を持ってる人は牛車に乗って、ほら、今、深キョンなんかがCMで乗ってるやん、牛の引く車に、あーいうのに乗ってた人もいたけど、大体の人はてくてく自分の足で歩きよったのね。で、自分の足でその京都から武蔵の国に行くまで、どの位かかると思う？

S17　1日。

T1　1日？

S1　半年

T1　半年はかからんやろう……どんくらいかかると思う？

S17　1ヶ月。

T1　1ヶ月？

S3　2週間？

T1　2週間、それちょっと惜しい、半分正解。そうです、約2週間かかりました、当時は。2週間くらいてくてく歩かんな、着かんがったんだけど、この男の場合は7日間で、あの京都から武蔵の国に行きました。という事は、普通の人より2倍早く走ったわけよ。

S4　娘を背負って？

T1　そう、娘を背負って。たったかたーって。実際、天皇のお姫様なんて大切に育てられるけん、そう長く歩けるわけないやん。だから、背負ってたったかたーと走りおったんよ。まぁ、たったかたーかどうかは分からんけど。で、男は勿論、ここでちょっと賢いなと思うのは、この橋があるよね、橋があって、こっちが京都、こっちが武蔵の国の間に勢多の橋ってのがあります。そこに書いてある、勢田川に掛かる、勢多橋、滋賀県の大津市にあるって書いてあるんだけど、教科書には。京都と東京の間に大きな橋があったの、勢多橋っていう。で、男はこっからお姫様を背負って走って、こっからこっちに移動したんだけど、そこで男は思ったわけよ。お姫様を連れ去ったってバレたら、どうする？もし自分がみ

んなが将来娘を持って、娘がどっかの馬の骨に連れ去られたらどうする？迎え、あの、探しに行ったりする？追っかける、男を？

S5　放っておく

T1　放っておく？どうする？どうする？まぁ、そうだよね、捜索願とか出すよね。で、男も同じような事を思って、この天皇が捜索隊を出すと、娘の。そうなると、追っかけてくるわけよ、自分の事を、自分たちの事を、これは面倒だなと思いまして、一旦お姫様をこっちにたったかたーと渡って、ここに残しまして、お姫様を残して、男は再びここまで来て、ここの橋の一間分、橋桁の間をぶっ壊して、渡れなくなるよね、壊したら。で、ここをぴょーいっと飛び越えて姫君の所へ帰ってきたわけよ。だから、ある意味、ここで走り幅跳びをしたわけよ、やつは。

S9　何で戻って橋を壊したん？

T1　んー、ただお姫様を背負っては壊せないよね。真ん中で壊せばいいんだけど、もしかしたら端っこじゃないかもしれない、真ん中を壊したのかもしれない。あえて、これイメージだから、もしかしたら男はここで壊したかもしれんし、ここで壊したかもしれん。でも、とにかく飛び越えたの、やつは。で、橋を渡ってる途中で壊したら、お姫様もろとも川に落ちちゃう可能性があるから、お姫様を一旦安全な場所に確保してから、橋を壊したわけね。相手が追ってこれないように。男はそれによって武蔵の国までどうにかお姫様を連れ去る事が出来たの。で、この第1段はそういうお話です。で、そこでちょっとこの前のプリント出してください、いいですか。何故、姫宮は自分から男に武蔵の国に連れてけって言ったよね。「私を連れて行きなさい」って、日本語訳で、あの現代語訳のとこを見てもらうと分かるんだけど、あの、「連れて行きなさい」って言ってるよね。それは何でだったと思う？あの、ちょっとそれを答えてもらおうかな。はい、じゃ、S20さん。

S20　……。

T1　んー、何かお姫様は見たいと思ったんよね。何を見たいと思って、「連れて行け」って言ったの？何かを見たいと思って、男に連れて行ってもらったのよ。何を見たいと思ったのかな。あの、姫君が男に言った言葉の所を抜き出してみて。あの、姫君が男の独り言、「ああ、故郷に帰りてーなぁ」って言ってるのを聞いて、お姫様はどう思ったのかな？

S20　……。

T1　あのね、お姫様が武蔵の国に行った理由、それは男がね、私の故郷、男の故郷では酒壷があります、そこにひたえのひしゃく、ひしゃくが浮いとるんだけど、ぷかぷかと。ひしゃくっていうのはね、何かこんな感じの、こ

の中に水を入れたりするんだけど、こういう形のね、ひしゃく、お玉、こういう形の、お玉はこんな形でしょ。お玉があるよね、お玉はこうなってるんだけど、そこが平らになってるやる。お鍋のミニサイズ、お鍋みたいな形をしていると思ってください。そういうものが酒壷の上でぷかぷか浮いとって、それが風になびいて、くるっと向きが変わったりするんだけど、そういう様子を見ずに私はこんな所で働かされているよって男が嘆いていたから、こういう風に、どんな形のひしゃくがどんな風にこう揺れるのかを知りたくて、あの、姫君は武蔵の国に行ったんです。だから、姫君が武蔵の国に行った理由は、男の国のひしゃくがどのようなひしゃくでどんな風で風に揺れるのか見たいと思ったからなんです、いいでしょうか。で、みなさん、お願いなんだけど、今日配った本文（補助プリント）には一回でいいので目を通しといてください。それでは、次回は「芥川」を読みます。T2先生から聞いているんですけど、「芥川」の事は前回やったとの事で、その時配布されたプリントの方、持ってきてください、それでは終わりです。

（授業終了）

第4時　2月18日

（補助プリント⑦とワークシート⑦を配布）

（適宜板書を行う）

T1　プリント足りない人、いませんよね。まず最初に前回配ったプリント②と③を出しといて下さいね。今日はね、まず最初に昨日第一段の内容をちょっと説明をしたんだけど、一体どんな内容だったかを聞いてみようと思うのね。（プリント②③は補助プリント②⑥をさす）

（ここで前回の内容の復習として、「何故姫君が武蔵の国に行ったのか」という事について発問を行った）

T1　駆け落ちした後どうなったか、この2人が、どうなったかという事をちょっと今日は日本語訳を聞きますんで、2人がどうなったのかなって事に注目して聞いてください。これ、駆け落ちしてから後の話ね。

（ここで、「竹芝寺」第2段の内容を補助プリント⑥を利用して説明した。柱としては、姫君と天皇の使者のやり取り、それを受けた天皇の行動などを中心に説明を行った。）

T1　えっとね、はい、それでは結局今回はハッピーエンドでした。ハッピーエンドだよね？まぁ、男と女は、衛士と姫君は結ばれて幸せに暮らしたわけよね、武蔵の国で、子どもも生まれとるけん、幸せに暮らしました。じゃ、ちょっとこれと似たような話を経験したと思うんよ。男女の駆け落ちの話。覚えとる？何だったかな？

S1　「芥川」。

T1　そう、「芥川」です。じゃ、「芥川」の所の、ちょうど今日配りましたよね、「芥川」のプリント、プリント④（補助プリント⑦）、の「芥川」の所、みんな内容多分覚えてると思うんで、ちょっと聞いてみようかな、「芥川」ってどんな話だったかS4君、答えて。駆け落ちの話だったんだけど―。結果はどうなったか、誰が出てきたか。誰が出てきた、「芥川」？

S4　女と男。

T1　そうです、まさしくその通り。女と男が出てきます。名前はないんだけど，男と女が出てきます。この二人は同じく駆け落ちしましたが、結果はどうなりましたか。S6君。

S6　鬼に食べられた。

T1　どっちが？

S6　女が、鬼に食われて死んだ。

T1　そうだね、女が鬼に食われて死んじゃったと。駆け落ちは成功したの、失敗したの？

S6　失敗した。

T1　そう、その通り、失敗しちゃったよね。で、鬼に食われたって所、さっき誰か、何か連れて行かれたって言ったよね、どういう意味で言ったのかな？

S6　駆け落ちしたけど、どこかに連れ込んでいたら、連れ去られた。

T1　そうそう、その通り。鬼に食われて失敗っていうのは、明らかに物語の中の話。物語では喰われて、実際には鬼ってのは、親です。これ、鬼に食われて失敗って、もちろん「芥川」の話では鬼に食われて、でも、これはもう一つ読み方があって、鬼に食われてしまって失敗って言うのは、鬼っていうのは親で、親に連れ戻されて失敗とも読めるのね。「芥川」の鬼に食われてっていうのに、「鬼」っていうのに二つの解釈があって、本当に鬼に食われて失敗しちゃったって読む人もいるし、逆に鬼が親の事を指していると読んで、親に女が連れ戻されて失敗しちゃったんだと読む人もいるのね。今回は、この親に連れ戻されて失敗っていう方で「芥川」を読んで欲しいのね。よろしいでしょうか？でね、ちょっとそこの所に書いてあるよね。えっと、プリント④を見て下さい。（プリント④は補助プリント⑦をさす）
そこに日本語訳が書いてあると思うので、各自で読んでください。あの、下の所に黒い逆三角マークがあるよね。じゃ、「竹芝寺」と「芥川」の共通、ここは同じところだなと思う所を挙げてくれないかな？例としては、「どちらも恋愛の話」って挙げてあるんだけど、S11君、「竹芝寺」と「芥川」でこれは共通だなぁって思う点はある？（ワークシート⑦をさす）

S11　男の方が身分が低い

T1　そう、男の方が身分が低い。その通りです。同じ所は、同じ。確かにそうだよね、男の方が身分が低い。じゃ、次、S16君、共通の所、同じ所？

S16　考え中です。

T1　じゃ、他の人に。また後で聞くけんね。じゃ、S7君。同じ所は？

S7　……。

T1　2人ともある事をしとるよ。

S7　駆け落ち。

T1　そう、駆け落ちしてます。他にはどうかな、S12さん。何かある？

S12　登場人物が2人しかいない。

T1　登場人物がじゃなくて主人公がね。帝も出て来るから。主人公が2人。はい、じゃ、他には、S22君。

S22　男が連れ出した。

T1　男が連れ出した、そうだね。そうだね、結果的には連れ出してるもんね、二人とも。じゃ、S15さん、何かあるかな？

S15　……。

T1　もう思い浮かばん？他には思い浮かぶ事がある人、手は挙げなくていいか

ら、言ってみて。これだけ共通点が出ました、4つ。男の方が身分が低い、2人は駆け落ちをした、主人公は2人、男が結果的に連れ出している。で、同じ所もあれば違う所もあります。じゃ、違う所を挙げてもらおうかな。S10さん、違う所。ちょっとした事でもいいよ、何かある？結果の違いでもいいよ。

S10　……。

T1　S10さん、何かありますか？

S10　失敗した方と成功した方。

T1　そう、失敗した方と成功した方、結果が違います。これ、ハッピーエンドかバッドエンドかって事で、結果が違う、結末が違います。「竹芝寺」の方はハッピーエンドだったけど、「芥川」の方は悲劇だよね。結末、違います。じゃ、S16君、さっき同じ所を聞いたとき考え中だったんだけど、違う所で何か思い浮かばない？何かある、違う所？

S16　……。

T1　じゃ、違う所、他の人にもあててみようかな。じゃ、S14さん。違う所、何かある？

S14　……男の行動が違う。

T1　「竹芝寺」の男は7日間ずっと走ってました、もちろん途中で休んでたと思うけど。京都から武蔵の国までだいたい15日くらい、約2週間かかるって言いましたよね。ってことは、計算したら300キロを7日間で走ると、毎日42.195キロくらい、フルマラソンで、走ってます。お姫様を背負って。逆に「芥川」は天候の不順もあるけど、休んでるよね。男の行動が違います。もちろん、男の行動、休憩をとるか、とらないかという事ね。本文を見る限りは「竹芝寺」の男は休憩してないよね。休憩とかしてないよね。じゃ、他に？S19さん、何かある？

S19　……。

T1　……じゃ、みんなに言ってみて。

S19　女の方が……積極的。

T1　そうです、女の方が積極的です。「竹芝寺」では「私を武蔵に連れてって」と女の方が言ってます。で、「竹芝寺」の姫様は連れ戻しに来た人に、「アタシ、これ運命なんだから、放っておいてよ」と言ってます。でもこの「芥川」は鬼に食われて「ああ」と悲鳴をあげるだけ……つまり、女が積極的、態度が違いますよね。女の態度が違います。「芥川」の方は男に連れ去られるままに連れ去られて、鬼に食われてる時に悲鳴をあげて、それで終わり。女についてはそんなに書かれとらんよね。「竹芝寺」の方は使者に文句を言ってみたり、使者に「これは運命なんだから」って言って、

「私をここに置いておいて下さい」とぎっぱり主張したり、「私を武蔵の国に連れて行きなさい」と命令する強さがあるよね。女の態度、「芥川」の女は受身だよね。もう、あの連れ去られてしまう、食べられてしまう女性として描かれているけど、「竹芝寺」は自分で行きたいって言って、自分でそこに住む事選んでるから、積極的に生きとるよね、自分で。そういう違いがあるよね、だから、女の態度が違うよね。それじゃ、こんだけ同じ所と違う所が出たよね。同じ所、男の方が身分が低い、駆け落ちした、主人公が2人、で、男が女を連れ出してます。で、違うのが、結末が違います、で、「芥川」の方は雨が降ってきたからって言って休憩したりしてますが、「竹芝寺」ではそういう休憩した場面がありません、そして女の態度が違います。これだけ違うんよね。さっき言ってもらった所なんだけども、結末が違うって事に注目して欲しいのね。「竹芝寺」はハッピーエンド、「芥川」は哀しい、悲劇、何でそうなったんかなってのをみんなに今から考えて欲しいのね。今から時間を取ります。この何故「芥川」と「竹芝寺」は正反対の結果になったのか考えてみようという事で、その結果について、私はこう思うんだけどいう意見を書いて欲しいの。でね、これは答えはありません。みなさんの想像力に任せます。今から時間を取ります。だったら、35分まで、取ります。

（机間指導を行う）

T1　じゃ、そろそろ時間です。あのね、今見てまわったんだけど、みんなそれぞれすごいいい答えが出てるんよね。発表してもらいます。同じだったとしてもそれはそれ、みんながそういう風に考えたからであって、同じ考えの人も、「え？そういう風に思うんだ」って思う考えの人もいるかもしれない。そういうので、ちょっと聞こうかな。1人ずつ。S14さん。

S14　読むの。

T1　うん、読んで。

S14　「竹芝寺」の女は積極的だったけど「芥川」の方は消極的で、男も消極的だった。「竹芝寺」の男は積極的だった。

T1　「竹芝寺」の女は積極的だったけど、「芥川」の方は消極的で、男が消極的でした。で、「竹芝寺」の方は男が必死でした。だよね、必死だよね、橋を壊したり、走ったり。じゃ、S15さん。

S15　「芥川」の女の方は親に対してものをはっきり言えるタイプで、「竹芝寺」の女の方は親に何か逆らえないタイプ……あ、逆だった。

T1　そうです。「竹芝寺」の女は親にずけずけ自分の意見を親に主張できる女性でした。「竹芝寺」女は親に言いたい事を言ったのね。

（授業終了）

第3節　授業実践を通して得られた知見と反省

(1) 指導者について

今回、授業時の反省、その文字化資料の振り返りを通して、指導者が学んだことが3つある。

1)十分な知識及び説明能力の必要性

授業時に何度か生徒に助動詞の活用を答えさせる機会があった。その際、指導者は生徒の答えた活用が本当に正確なものなのかを即座には確認できず、文法書を開いて確認するという行動をとってしまった。本来ならば、助動詞の活用は暗記しておかなければならないことであり、古典文法の知識が不足していたことは反省すべき点である。また、「敬語表現」の説明でも、自分自身では「敬語表現というものはこういうものである」という概念もしくは理解が感覚的に構築されていたために、それに基づいた説明しか出来なかった。こうした説明では古典の敬語表現に馴染みが薄い生徒たちにとっては非常に理解しにくいものであったに違いない。このことから、やはり指導者は国語に関する知識や説明能力の面で不備を抱えていてはいけない。仮にそれを放置したままの授業では、生徒たちも全くついてこなくなるだろう。だからこそ、指導者は十分な知識と説明能力を身につける必要性があると感じた。

2)落ち着いた授業進行の必要性

1）の項目でも触れたとおり、授業時、指導者には十分な知識及び説明能力が欠如していた。そのため、落ち着きを失い、冷静な授業進行が行えないことがあった。本来ならば、指導者はどのような状況下に置かれようとも、冷静沈着であるべきである。しかし、今回は冷静沈着であることを保つことが出来なかった。それは、指導者の古典文法の知識の不備ということに起因するように思われる。十分な知識、説明の仕方をもっていないがために、生徒の理解も十分ではなく、授業をしていて生徒が理解していないことが分かると、焦ってしまうことがあった。これでは授業を進めていくどころの問題ではない。だからこそ、やはり指導者は落ち着いて授業進行を行うべきであると感じた。

3)授業以外の生徒との関わりの重要性

1）と2）の項目で述べたように、今回、指導者の不十分な知識や説明能力の欠如、そしてそれに伴う落ち着きのなさという非常に望ましくない現象が発生した。しかし、その度に多くの生徒たちに助けられた。「敬語表現」の説明の補助として第2時に生徒たちに配布した補助プリント③は授業以外で交流のあった2年生の生徒のアドバイスなどを元に作成したものである。また、指導者が焦り、本来ならば計画通りに進むはずのない今回の授業であったが、授業を受けていた生徒たちのあたたかい励ましや発言によって救われ、何とか授業を終えることが出来た。このことで感じたのは授業時以外の活動での生徒たちとの関わりが1）や2）で挙げた不備を抱えた指導者にとってどれほど助けになったかということであった。この経験から、やはり授業以外での生徒との関わりは非常に重要であると感じた。

(2) 指導法について

今回、授業時の反省、その文字化資料の振り返りを通し、指導法について3つ学んだ。

1)古文を教える上での現代語訳の重要性

今回は古文ということもあり、助動詞や接続助詞、「敬語表現」といった文法事項に触れながらも、内容理解を主な目的とした授業案を作成していた。何故なら、古文は現代文などとは異なり、それらの理解がなければ内容理解まで到達できないと考えたからである。だが、実際には1で前述した通り、指導者の知識、説明能力不足もあり、生徒たちが文法事項を理解するまでには到らなかった。しかし、ここで指導者はたとえ文法事項に躓いても、内容だけでも理解させたいと考えた。そのため、途中からは授業の方針を変更し、現代語訳を元に授業を行った。この時、痛切に感じたのが現代語訳の持つ重要性である。たとえ、ある文の文法事項を指導者がどんなに分かりやすく説明しようとも、その文の意味が分からなければ生徒たちにとっては非常に退屈な説明となりかねない。だからこそ、文の意味を現代語訳で示すこと、ひいては古文の授業における現代語訳が重要なのだと感じた。

2)生徒主体の授業形式の重要性

1）で述べた通り、今回は最初に現代語訳を配り、それを解説して内容理解をするという授業形式をとった。だが、それが結果的に現代語訳を元に教材の内容を指導者がほとんど解説してしまった。そのために授業の大半の時間、生徒たちが指導者の説明を聞くという、明らかに指導者主体の単調な時間に終わってしまった。この単調な時間こそが、生徒たちの教材への興味を少なからず削いでしまったのではないかと今になって反省される。もしもここで、生徒たちに「どんな話だった？」「これはどんなことを指しているのだろう」等と説明ではなく、内容に関しての発問を行っていれば、多少刺激のある生徒主体の授業となり、生徒たちが教材について考える時間に重きをおくことが出来たのではないだろうか。また、授業の大半が生徒主体の刺激的で有意義な時間となり、生徒の教材への興味が削がれることはなかったのではないだろうかと考えた。このことから、指導者の発問と生徒の応答で構成された、生徒主体の授業形式がどれほど重要であるかを感じた。

3)板書やワークシートでの構成の工夫の必要性

板書についても、説明することに集中しすぎたために白一色という、非常に分かりにくいものになってしまい、本来の目的を見失ったものになってしまった。ここで、何色かの色を利用した板書を行っていれば、生徒の教材理解を深める上で助けとなったのではないかと思われる。また、単に単に内容の理解をするために書くのではなく、出来れば生徒が楽しんで書けるような構成の工夫が必要ではなかったかと感じた。

(3) おわりに

今回の授業実践で学んだことは、授業が有意義な時間となるためには、指導者の専門知識と説明能力が必要であるともに、生徒が喜んで取り組むような板書やワークシートの構成の工夫の必要性、生徒主体の発問―応答という授業形式を大切にしなければならないということであり、今後に活かしたいと考える。

第２章　第１学年中堅２クラス『更級日記』授業実践の研究

吉永麻紀子

第１節　「竹芝寺」学習指導案

1、日時：平成17年2月14日～18日

2、場所：1年2組教室

3、学校、学年、学級：広島県立賀茂北高等学校、1年次生、中堅2クラス

4、教科、科目、単位数：国語、国語総合、4単位

5、教材、単元：新編国語総合（東京書籍）、「竹芝寺」

6、本課について

①教材観：　本教材のスピーディーな物語展開は読み手を引き付ける。姫と男の身分を越えた愛、子を思う親の気持ち、これらは現在にも通じる非常に人間的なテーマであり、高校生にとって関心の高い内容である。自らの経験と照らし合わせて考えることによって、古典をより身近に感じることのできる教材であろう。

②生徒観：　全体的に音読は追従読みであれば問題なくできる。また、古語独特のことばの抑揚や語感に敏感な面がある。内容理解・文法理解はともに個人差が大きい。発言については、積極的に発言する生徒がいる一方、問いかけに対して十分な反応ができない生徒、答えにつまる生徒もいる。

③指導観：　文法事項の指導の取り扱いは、以前学習した係り結びの法則、「已然形＋ば」の復習・確認程度にし、内容理解に重点を置く。現代語訳を付けたプリントを用いて、話の内容が十分に理解できるように工夫する。登場人物の行動を中心に話の流れをつかみ、登場人物、特に姫、男、帝の行動からそれぞれの気持ちを読み取らせる。

7、本課の目標

登場人物の行動からそれぞれの気持ちを読み取り、理解する。係り結びの法則、「已然形＋ば」を復習・確認して身に付ける。

第１時

(1) 本時の目標

①登場人物を把握する。

②男の境遇を理解する。

③係り結びの法則を正しく理解する。

(2) 本時の評価の観点

①登場人物を把握できたか。

②男の境遇について理解できたか。

③係り結びの法則について正しく理解できたか。

(3) 本時の指導課過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
『更級日記』の文学史的位置を確認	1　補助プリント③を利用しワークシート①に『更級日記』の基礎知識を書き込み確認する。	1　ワークシート①、補助プリント①②③を配布する。	5
本文の範読を聞く	1　教師の範読を聞きながら登場人物に印を付ける。	1　登場人物に印を付けるよう指示する。後で確認することを伝える。	10
登場人物の確認	1　登場人物を挙げる。 2　ワークシート①に書き込む。	1　挙げられた登場人物を黒板にまとめる。	15
「これは～つぶやきけるを」までの内容確認	1　補助プリント①を見ながら、「これは～つぶやきけるを」までの現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　適宜文法事項（助動詞）を確認させる。	25
男の境遇の理解	1　男が御殿の前の庭を掃いている状況を理解する。 2　ワークシート①に書き込む。	1　男は何をしているのかを問う。 2　衛士の説明をし、黒板にまとめる。	35
男の独り言の読解	1　男の独り言の内容を理解する。 2　ワークシート①に書き込む。	1　「などや苦しきめを見るらむ」について係り結びの法則を説明し、黒板にまとめる。（内容については次時学習する。）	50

第2時

(1) 本時の目標

①男の気持ちを理解する。

②順接確定条件「已然形＋ば」を確認する。

(2) 本時の評価の観点

①男の具体的な気持ち（さみしい、かなしい、帰りたいなど）を理解できたか。

②順接確定条件「已然形＋ば」の表現について理解し、正しく現代語訳ができたか。

(3) 本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の復習	1　ワークシート①を見直し前時の学習内容を想起する。	1　男の境遇・独り言の内容を思い出させる。	5
「これは～着きにけり」（前半部分）の音読	1　追従読みをする。	1　文語のリズムを意識させながら、適切なところで区切って読ませる。	10
語句調べ	1　教科書 p.298 の「古文重要語句」を利用して意味を調べる。 2　ワークシート②に書き込む。	1　重要語句について調べさせ、理解させる。	15
「かくてあるよ」の読解	1　「かくてあるよ」の具体的な内容を考えて理解する。 2　ワークシート①に書き込む。	1　前時に説明した男の状況・独り言の内容を再度確認させる。	20
男の気持ちの考察	1　男の境遇や独り言から男の気持ちを考えて発表する。 2　ワークシート①に書き込む。	1　生徒の意見を黒板に書く。 2　望郷の念、不遇な状況に対する嘆きであることを理解させる。	30
「その時～着きにけり」までの内容確認	1　補助プリント①を見ながら、「その時～着きにけり」までの現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　助動詞、係り結びの法則、「已然形＋ば」を理解させる。 2　読みの難しい漢字に注意させる。 3　御簾、高欄の説明をする。	40

姫の境遇の理解	1　姫はどのように育てられているかを読み取り発表する。 2　ワークシート②に書き込む。	1　本文中に「姫」と書かれている前後に注目させる。	45
「率て行きて見せよ」の読解	1　姫が「率て行きて見せよ」と言った理由を考えて発表する。 2　ワークシート②に書き込む。	1　男の独り言の内容に注目させる。 2　挙げられた内容を黒板にまとめる。	50

第３時

(1) 本時の目標

①姫の気持ちを読み取る。

②姫を背負って逃げる男の様子を読み取る。

③姫を探す人々の様子を読み取る。

(2) 本時の評価の観点

①姫が「率て行きて見せよ」と言った理由が読み取れたか。

②逃げる男の心情・行動を読み取れたか。

③帝・后の気持ち、使いの者たちの動きを読み取れたか。

(3) 本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の復習	1　これまでの話をまとめて発表する。	1　男と姫の行動に注目させてまとめさせる。	5
「率て行きて見せよ」の読解（前時の続き）	1　「率て行きて見せよ」と言った理由を考える。 2　ワークシート②に書き込む。	1　前時に出た「ひさごを見たいと思ったから」という理由を想起させる。 2　「さ言うようあり」の部分に注目させる。	10
敬語の確認	1　「仰す」「申す」の敬語について理解する。	1　「仰す」「申す」の相互関係を押さえて意味を理解させる。	15
「さるべきにやありけむ」の読解	1　「さるべきにやありけむ」の現代語訳を確認する。	1　品詞に区切りながら文法・意味に注意して現代語訳を確認させる。	20
姫を背負って逃げる男の様子の読み取り	1　逃げる男の心情を読み取る。 2　男の行動を読み取る。	1　男が逃げる部分に注目させ、心情・行動を読み取らせる。 2　都と武蔵との距離を説明する（教科書 p.334 地図参照）。	25
「帝～居るなり」（後半部分）の音読	1　追従読みをする。	1　文語のリズムを意識させながら、適切なところで区切って読ませる。 2　ワークシート③を配る。	30

「帝～居るなり」（後半部分）の内容確認	1　補助プリント①②を見ながら、「帝～居るなり」の現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　助動詞、係り結びの法則、「え…ず」を押さえる。	40
姫を探す人々の様子の理解	1　「いと香ばしき物」とは何かを考える。 2　武蔵の国に着くまでの過程を考える。 3　1、2をふまえた上で、姫を探す人々の様子を理解する。	1　帝と后の心情を読み取らせる。 2　男の行動が姫を探す人々の行く手を阻んだことを理解させる。	50

第４時

(1) 本時の目標

①姫が武蔵の国に来た理由を理解する。

②「奏す」「申す」「仰す」、順接仮定条件「未然形＋ば」の意味・用法を理解する。

(2) 本時の評価の観点

①姫が武蔵の国に来た理由を理解できたか。

②「奏す」「申す」「仰す」、順接仮定条件「未然形＋ば」の意味・用法について理解し、正しく現代語訳ができたか。

(3) 本時の指導過程

学習内容	学習者の活動	指導上の留意点	時間
「帝～居るなり」（後半部分）の音読	1　追従読みをする。	1　文語のリズムを意識させながら、適切なところで区切って読ませる。	5
前時の復習	1　ワークシート①②③を参照しながら、前時の学習内容を想起し、教師の発問に答える。	1　男は姫を連れて武蔵の国に着いたこと、帝は姫を探し求め、使いを武蔵の国に送ったことを想起させる。	10
「このをのこ～仰せられければ」までの内容確認	1　補助プリント②を見ながら、「このをのこ～仰せられければ」の現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　助動詞、係り結びの法則、「已然形＋ば」、「未然形＋ば」、「奏す」「申す」「仰す」（敬語）の説明をする。	15
姫が武蔵の国に来た理由の理解	1　姫が武蔵の国に来た理由を考えて発表する。 2　ワークシート③に書き込む。	1　姫の言葉に注目させる。 2　「さ言うやうあり」「さるべきにやありけむ」は「宿世」につながることを説明する。	25
「言わむかたなくて～宣旨下りにければ」までの内容確認	1　補助プリント②を見ながら、「言わむかたなくて～宣旨下りにければ」の現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　助動詞、係り結びの法則、「已然形＋ば」について確認する。	30
姫と男に対する帝の処置の整理	1　姫と男に対する帝の処置を読み取る。 2　ワークシート③に書き込む。	1　帝の心情を理解させる。	35

「この家を～居るなり」の内容確認	1　補助プリント②を見ながら、「この家を～居るなり」の現代語訳を確認する。 2　適宜、文法を確認する。	1　助動詞、係り結びの法則、「已然形＋ば」を確認する。 2　内裏の説明。	40
火焚屋に女が詰めるようになった理由の理解	1　なぜ火焚屋には女が詰めるようになったのかを考え発表する。 2　ワークシート③に書き込む。	1　物語中に描かれている事件について確認する。	45
補助プリント④	1　補助プリント④を見る。	1　補助プリント④を配布する。 2　今後の復習に使うよう指示する。	50

ワークシート①

竹芝寺①

❀出典について

「　　」

作者・・・（　　）

成立・・・平安中期

内容・・・作者が自分の生涯を思い起こして書きつづったもの。

① 上総から京までの旅（十三歳頃）

② 京での生活（三十歳頃まで）

③ 結婚と宮仕え（五十歳過ぎまで）

❀「竹芝寺」の登場人物

❀語句

・いにしへ　過去。昔。

・衛士　諸国から徴発された兵士。

・奉る　㊀「与ふ」の謙譲語。さし上げる。㊁ 謙譲の意を表す。お…申し上げる。

・など　どうして。なぜ。

・かく　このように。

文法チェック

係り結びの法則

ぞ・なむ	――	強意	連体形
や・か	――	疑問	連体形
こそ	――	強意	已然形

（意味）　（結び）

❀火焚屋の衛士の境遇

男は何をしているか。

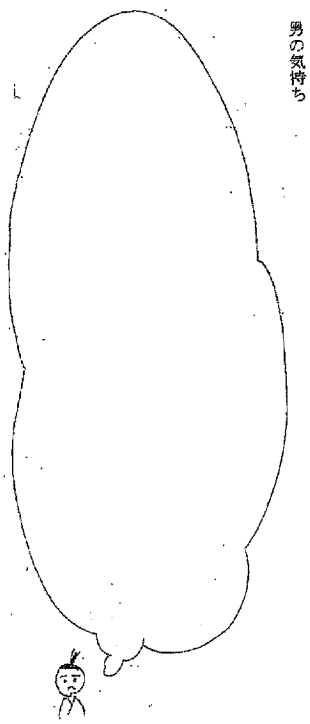
男の独り言

などや苦しきめを見るらむ。＝（　　）

わが国に～なびくを見で＝（　　）

かくてあるよ。＝「かく（このように）」とは現在の状況を指す。

男の気持ち



ワークシート②

竹芝寺②

◎語句

・いみじ　（　　）
・かしづく　（　　）
・給ふ　尊敬の意を表す。お…になる。お…なさる。
・御覧ず　「見る」の尊敬語。ごらんになる。
・ゆかし　（　　）
・をのこ　奉公する男。下男。
・あはれなり　（　　）
・おぼす　「思ふ」の尊敬語。お思いになる。
・召す　「呼ぶ」「招く」の尊敬語。お呼びになる。
・参る　「行く」の謙譲語。参上する。
・仰す　「言ふ」の尊敬語。おっしゃる。
・申す　「言ふ」「告ぐ」の謙譲語。申し上げる。
・こほつ　こわす。
・奉る　㊀「与ふ」の謙譲語。さし上げる。㊁謙譲の意を表す。お…申し上げる。

文法チェック

・已然形＋ば
順接の確定条件
① 原因・理由（…ノデ、…カラ）
② 偶然条件（…ト、…トコロ）

・係り結びの法則

ぞ・なむ	――	強意（係り）	連体形（結び）
や・か	――	疑問	連体形
こそ	――	強意	已然形

◎宮姫の気持ち

宮姫の境遇

姫宮は、なぜ「率て行きて見せよ。」といったのか？

◎逃げる男の様子

論なく人追ひて来らむ～勢多の橋を一間ばかりこわす

⇐

こわした部分を飛び越える

⇐

姫を背負って七日七夜で武蔵の国に到着

※都（京都）・武蔵（東京）間を七日で移動するのは驚異の技。

ワークシート③

竹芝寺③

◎語句。

・え　（下に打ち消の表現を伴って）不可能の意を表す。とても…でき（ない）。
・奏す　「言ふ」の謙譲語。天皇または院に申し上げる。
・言ふかひなし　言っても効果がない。言ってもはじまらない。
・よし　趣向。旨。
・内裏　天皇の住む御殿。皇居。

文法チェック

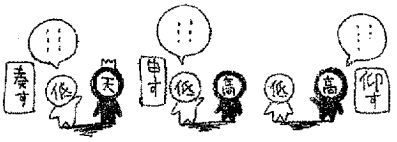
・未然形＋ば
　順接の仮定条件（モシ…ナラバ）

・已然形＋ば
　順接の確定条件
　　① 原因・理由（…ノデ、…カラ）
　　② 偶然条件（…ト、…トコロ）

・係り結びの法則
　ぞ・なむ（意味）―― 強意（係り結び）―― 連体形
　や・か ―― 疑問 ―― 連体形
　こそ ―― 強意 ―― 已然形

・敬語

「言ふ」
　仰す（おほす）―― おっしゃる ⟶ 尊敬語
　申す（まうす）―― 申し上げる ⟶ 謙譲語
　奏す（そうす）―― 天皇に申し上げる ⟶ 謙譲語



◎姫宮探し

「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしきものを首にひきかけて飛ぶように逃げける。」との申し出
→みつけられず
⟸
輪なくもとの国に行くらめ→使者を武蔵の国へ
勢多の橋×→三月かかった
※男は七日七晩

◎姫宮が武蔵の国に来た理由

◎帝の処置

◎なぜそれより後は火焚屋に女が詰めるようになったのか？

補助プリント①

〈本文現代語訳対応版〉

これは、黄、竹芝といった話である。

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。

この国の人で（ここに）住んでいた男を、火焚屋の火を焚く衛士に（国司が）指名し献上したところ、

国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、

（この男は）御殿の前の庭を掃きながら、「どうしてこんなつらいめをみるのだろうか。

御前の庭を掃くとて、「なぞ苦しきめを見るらむ。

私の故郷で、あっちに七つ（こっちに）三つと酒を仕込み置いてある酒壺に置いてある直柄のひさごが、

わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、

南風が吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、

南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、

西風が吹くと東になびき、東風が吹くと西になびく光景を見ないで、こうしていることだなあ」と、

西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」と、

独り言を言い、ぶつぶつ言ったところ、その時、帝の御娘でたいそう大切にされていらっしゃる（御娘が）

独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、

ただひとり、御簾のそばにおでましになって、柱に寄りかかって（外を）一度ご覧になると、

ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧ずるに、

この男がこのように独り言を言うのを（お聞きになり）、非常に心を動かされ、

このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、

どのようなひさごが、どのようになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので、

いかなるひさごの、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、

御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちらへ参れ。」とお召しになったので、

御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちら寄れ。」と召しければ、

男は、かしこまって、高欄のそばに参上したところ、

かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、

「今言ったことをもう一度、私に聞って聞かせよ。」と仰せになったので、

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、

酒壺のことをもう一度申し上げたところ、

酒壺のことを、いま一かへり申しければ、

「私を連れて行って（それを）見せよ。そういう理由があるのだ。」と仰せになったので、

「我率て行きて見せよ。さ言うやうあり。」と仰せられければ、

おそれ多く恐ろしいと思ったが、そうなるはずの因縁であったのだろうか、（勅言を）背負い申し上げて国に下る時に、

かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、

きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、その夜、勢多の橋のたもとに、

論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、

この郷宮を宿を申し上げて、勢多の橋を一間ばかりこわして、それを飛び越えて、

この宮を掘る奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、

この郷宮を背負い申し上げて、七日七夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。

この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

帝、后、皇太子は、姫が姿を消しなさってしまったとひどく心配し、お嘆しになると、

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、

「武蔵の国の衛士の男が、大そうよい香りのするものを首にひっかけて飛ぶように逃げていった。」

「武蔵の国の衛士のをのこ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。」

と（ある者が）申し出て（来たので）、この男を捜してみるといなかった。

と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。

まもなくいなく故郷の国に帰って行っているだろうと、朝廷から使者がでって、追いかけてみるのだが、

論なくもとの国に行くらむと、おほやけより使ひ下りて追ふに、

補助プリント②

勢田の橋がこわれて行きつづけることができない。

勢多の橋こぼれて、内行きやらず。

三か月という日数で武蔵の国に到着して、この男を探すと、この姫宮は朝廷からの使者をお呼びになって、

三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをのこ尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、

「私はそうなるはずの因縁であったのだろうか、この男の家が見たくて、

「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、

進れて行けと言ったので（男は者を）連れてきてしまったのだ。たいそうここは住みやすく思われる。

率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。

もしこの男が辱められ、ひどいめにあわせられるならば、私はどうしていろというのか。

このをのこ罪じ辱められば、我はいかがであれと。

これも前世でこの国に住みつくはずの因縁があったのであろう。

これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世にぞありける。

早く都に帰って朝廷にこのことを奏上しなさい」とおっしゃったので、

はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」と仰せられければ、

（使者は）言いようもなくて、（都に）上って、帝に、このようであったと奏上したところ、

言わむ方なくて、上りて、帝に、かくかくありつると奏しければ、

（帝は）「（ただ）かたない。もし、その男を処罰したとしても、今となってはこの姫宮を取り返して、

「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、

都に返し申し上げることもできない。竹芝の男に、生きているかぎり無事、

都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、

武蔵の国を預け与えて、租税や労役なども賦課することはやらせまい。

武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせじ。

ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばせ」宮の宣旨がくだったので、

ただ、宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よしの宣旨下りにければ、

（男が）この家を内裏のように造って住まわせ申し上げた家を、

この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、

姫宮などがおなくなりになったので、寺としたのを、竹芝寺というのである。

宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。

その姫宮が生みなさった子どもたちは、（親の領国の名を）そのままとって武蔵という姓を得て、ここに住んだ（ということ）。

その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。

それより後、火焚屋には（男はおかず）女が居ているそうだ。

それより後、火焚屋に女は居るなり。

さらしなにっき 更級日記

作者は菅原孝標女（藤原道綱母の姪）。一〇六〇年ごろ成立。約四十年間の回想録。物語愛好。夢の記述。

アンコール 源氏を一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうち伏して引き出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ。

『源氏物語』を最初の巻から始めて、ほかの人もまじらず、几帳の奥にうち伏して草子を引き出しては読む気持ちは、后の位もこの喜びに比べるとものの数ではない。

『更級日記』は、紫式部と同時代の読者が残した最初の享受記録である。『源氏物語』が完成したころに生まれた彼女が、当時の話題作であったこの物語全巻を手に入れるのは、物語が書写によってしか複製できない当時としては容易なことではなく、それだけ深く記憶に刻まれた出来事だったろう。この物語愛好家は、自らも『夜半の寝覚』などの物語を書いたとみられるが、自分の一生を回想して日記にまとめるのも、長編物語の構想を練る作業と通ずるところがある。

『更級日記』書頭

孝標女（佐多芳郎筆「更級日記」）

書名 更級日記。日記中の歌「月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ」が、『古今集』『大和物語』の有名な歌「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」をふまえているのによる。

作者 菅原孝標女（一〇〇八―一〇五四以後）。父は上総・常陸の受領である。その家系は菅原道真に始まる学者の血統。母は藤原倫寧の娘で、『蜻蛉日記』の作者道綱母は、伯母にあたる。『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』などの作者であると伝えられている。

成立 夫の橘俊通の死後、二、三年を経た一〇六〇年（康平三）ごろの成立。

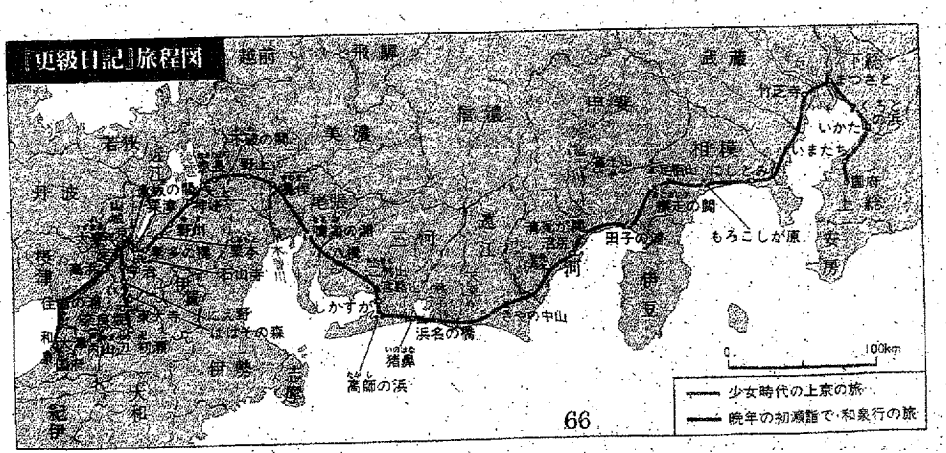
内容・構成 作者が十三歳の年から四十年におよぶ自分の人生を、回想的に年を追って綴ったもの。父が上総介の任を終えて上京するときの旅から始まり、物語に魅せられた少女時代、祐子内親王（後朱雀天皇皇女）のもとへの宮仕えを経て、三十二歳で俊通と結婚、一子仲俊をもうけてからは、子の将来に期待をかける。さらに、夫との死別ののち、ひたすら仏の夢を信じた晩年までが描かれている。物語を耽読した少女時代には『源氏物語』の世界にひきこまれ、夕顔・浮舟など薄幸の女性にあこがれている。また、日記中に数多くの夢を記しているのも特色である。

史的評価 現実の自己とその生涯を対象化し、少女時代から晩年に至る一つの「女の一生」を描こうとする意識は、私小説的な性格を備えた『蜻蛉日記』の系列をひく。定家に見いだされて『新古今集』以後の勅撰集に歌がとられ、堀辰雄は「この作品を愛読して『姨捨』を書いた。平凡な人生の記録であるが、歌人・作家の詩心を揺さぶる不思議な魅力をもつ。

孝標女関連年譜

西暦	年	事項
1008	0	孝標女誕生。
1012	12	父、上総介の任を終え一家帰京。
1013	13	叔母から『源氏物語』をもらう。
1016	16	姉死去。
1024	24	父、常陸介。
1028	28	父帰京。
1029	31	祐子内親王のもとに出仕。
1032	32	橘俊通と結婚。
1037	37	このころ長男仲俊誕生。石山寺参詣。
1045	38	初瀬詣で。以後、毎年のように鞍馬、石山寺、太秦寺などへ物詣で。弥陀来迎の夢をみる。
1054	47	信濃守俊通帰京し、十月、死去。
1059	50	

『更級日記』旅程図



まんが竹芝寺

①
もの悲しげな雰囲気がとてもすてきあの人のふるさとはどんなところかしらって…知りたい!!知りたい!!知りたい!!
ドキン
ひたえのなまごえ…
②
私を連れてって♥
ビビビ
はい
③
それは身分を越えた運命の恋であった!!
④
追っ手が来ちゃいけねえ
人目を逃避行
ドッカーン
←KYOTO
MUSASHI→
男は駿河の橋をこわし七日七夜で武蔵の国に行き着いたのであった!!
⑤
一方、安倍では…
姫がいないなりー
めた
かた
こんなの見ました…
⑥
行けー武蔵へ
まぁ、連れてってないの…
ガビーン
武蔵
ごくろうさま!!
3か月かかりました。
⑦
ようやく武蔵の国についたのの…
運命なんしょうがないやん
うちらを引き裂くんと!!て
はあ…
⑧
武蔵の国、宿入り道具に持っていたらいいやんの!!
うちの子は言うてもきかんきかい…
⑨
そして、姫たちは幸せに暮らし姫の住まいは後に竹芝寺となったのであった!!
男子禁制
ちなみに、この事件のせいで火焚屋は男子禁制となったのであった!!
～THE END～

板書計画（第1時）

竹芝寺

○ 出典

『更級日記』　菅原孝標女

○ 登場人物

・男＝国の人、火焚屋の火焚く衛士、をのこ
・姫＝帝の御むすめ、宮、皇女
・帝
・后
・申し出た者
・使

○ 男は何をしているか？

強制的にふるさとから都へ働きに出されている。低い身分。

↓

武蔵の国から火焚屋の火焚く衛士に任命され、御殿の前の庭を掃いている。

○ 男の独り言

係り結びの法則

係助詞　連体形　原因推量

なぜ　ぞ　む

なぜ　や苦しき目を見るら　む＝（どうしてこんなつらいめを見るのだろう）

わが国に〜なびくを見で＝（なつかしいふるさとの情景）

板書計画（第2時）

竹芝寺

○　男は何をしているか？

強制的にふるさとから都く働きに出されている。低い身分。

↓

武蔵の国から火焚屋の火焚く衛士（ゑじ）に任命され、御殿の前の庭を掃いている。

○　男の独り言

などや苦しきめを見るらむ＝（どうしてこんなつらいめを見るのだろう）

→（嘆き）

わが国にゝなびくを見で＝（なつかしいふるさとの情景）

→（望郷の念）

かくのごとくであるよ。＝現在の状況を指す。

○　男の気持ち

さびしい
つらい
帰りたい　　なつかしい

已然形＋ば

① 原因・理由

② 偶然条件

いまーかくり申しければ（已然形・理由）（已然形・偶然条件）

○　姫の境遇

帝のむすめで、たいそう大切に育てられている。

御簾（みすだれ）

高欄（こうらん）

板書計画（第3時）

竹芝寺

○ なぜ「率て行きて見せよ。」と言ったのか？

・ どのようなひさごがどのようになびくのであろうと非常に見たいと思ったから。

↓

男の独り言を興深く感じたから

（そのようなひさご　そのこと）

さ言ふやうあり

・ そういう理由があるのだ。→どういう理由かはまだ謎。

○ 敬語

「言ふ」 ── 「仰す」（おっしゃる）…姫が言う…尊敬語

── 「申す」（申し上げる）…男が言う…謙譲語（けんじょうご）

（さるべき　当然）（係助詞）（係り結びの法則）（連体・連用）

さるべきにや あり けむ　　そのようになるべき因縁でもあったのだろうか

○ 逃げる男の様子

「論なく（言葉でもなく）人追ひて来らむと思ひて」

↓

橋を一間ばかり壊す

↓

七日七夜で武蔵の国に到着　　都（京都）－武蔵の国（東京）

○ 姫を探す人々の様子

（ずっと）辺行きやら（行き消し）す

「いと香ばしき物」＝姫

数多の橋×→三月かかった

板書計画（第4時）

竹芝寺

男 → 七日七夜
おほやけの使 → 三月

このをのこ罪し捺ぜ（未然形・命令）ら（未然形・命令）れ（未然形・命令）ば（仮定条件）

未然形＋ば・・・仮定条件（モシ…ナラバ）

「言ふ」
- 「仰す」（おっしゃる）…尊敬語
- 「申す」（申し上げる）…謙譲語
- 「奏す」（天皇に申し上げる）…謙譲語

○ 姫が武蔵の国に来た理由
前世でこの国に住みつくはずの因縁があったから

p.250 l.4 さ言ふやうあり
p.250 l.5 さるべきにやありけむ
p.251 l.7 さるべきにやありけむ

おほやけ事・・・租税・労役など

内裏（だいり）

○ 帝の処置

- 男を罰しない。姫を取り返さない。
- 男に武蔵の国を預けとらせる。
- 租税・労役などを免除する。

○ なぜ火焚屋に女が詰めるようになったのか？
火焚屋に女が詰めると、今回のように姫を連れて行ってしまうかもしれない。
それを防ぐため。

第2節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料

第1時（2005年2月14日月曜日6時間目）

T	それでは、実習生の吉永麻紀子です。今から授業させていただきます。よろしくお願いします。
S全員	おねがいします。
T	では今日読むところは教科書の248ページの「竹芝寺」というところです。この竹芝寺というお話は、まず出典が『更級日記』というものが出典となっています。まず『更級日記』の説明をするまえに、プリントを配るのを忘れていたので配ります。（ワークシート①、補助プリント①②③を配る）では竹芝寺①と書いてあるワークシートを出してください。
S1	1ページ目のプリント？
T	このなんか吹き出しが書いてある。では改めて『更級日記』の説明をします。この竹芝寺という話は『更級日記』の中の1つの話なんですけれども、まずこの読み方を覚えてください。「さらしなにっき」漢字の読み方がちょっと特殊なので覚えておいてください。そして次にこの『更級日記』を書いた作者を誰か言ってもらおうと思います。わからなかったら資料集を見てもらいたいんですけど、資料集は持ってきてますか？
S多数	持ってきてません。
T	そしたら、ちゃんと私は気を回してプリントを配った中に、資料集のコピーが入っているのでそれを見て『更級日記』の作者を言ってください。ではS2君、『更級日記』の作者は誰でしょう？
S2	菅原孝標女。
T	はい、そうです菅原孝標女という人が書きました。これも読み方がちょっと読みにくいので覚えてください。女と書いて「むすめ」と読みます。ワークシートに書き込むところがあるので、書き込んでください。更級日記の内容はこの菅原孝標女という人が自分の人生をだいたい13歳から50歳くらいまでのことを回想的に書いた日記です。そしてこの竹芝寺という話は、作者が13歳の頃に字自分の生まれ故郷の上総というところから京都まで旅をする途中で聞いた話をここに書いたものです。そしたらそのワークシートにこの「更級日記」というのと「菅原孝標女」というのを入れておいてください。 では次に教科書の本文を読みます。みなさん教科書を見てください。教科書の本文を私が読むのでこの物語に出てくる登場人物と思われる人が出てきたら、全部丸をつけて目で追っていってください。では読みます。 （教科書本文範読。）

と読み終わりました。今読んだところで、登場人物が誰が出てきたか確認したいと思います。登場人物でまず誰が出てきたかまず1人だけ教えてください。

S3　帝。

T　はい。帝。帝が出てきました。そしたらS4君。また誰が出てきたか教えてください。

S4　后。

T　はい、后も出てきました。そしたら、S5さん、また誰が出てきたか教えてください。

S5　男。

T　男。はい、「をのこ」、この人も出てきました。でもまだいるんですね。S6君、誰が出てきたでしょうか？

S6　高欄。

T　あ、残念。高欄は人物ではありませんでした。

S6　武蔵。

T　武蔵、ああ残念。これも人っぽいけどこれは国の名前です。結構重要な人物がまだ出てきてないのですが。

S6　分かりません。

T　分かりませんか。じゃあS7君誰が出てきたでしょうか？

S7　帝の娘。

T　お、そうです。帝の娘。大体主要な人物はこの男と、帝の娘と、后と帝なんですけど。あともうちょっと脇役で出てくるのが、使いと、男が逃げていくのを見ましたよと申し出た人がいます。出てくるのはだいたいこの6人ぐらいなんですけれど、一番重要なこの男と、帝の娘はいろんな言い方をされてこの物語の中に出てきています。同じ人物なんですけど、言い方が1人の人に対していろんな言い方で書かれています。まずこの男は他の言い方では物語の中でなんと書いてあるでしょうか？　まず最初のほうの文章で結構違う言い方がされています。ではS8さんこの男の違う言い方は他に何があるでしょうか？

S9　かんば…

T　かんば？　どのへんに書いてあるかな？

S10　かんば？

S1　あたしが「がんば！」って言ったんよ。そしたらこの娘が聞き間違えて…

T　なるほど。この文章の1行目から2行目の間に書いてある。

S9　いにしへ。

T　いにしへ。ああ、これは違うな。（前の席の生徒を示しながら）この辺から何かすごくいいヒントが出てきてたけどな。

S12　国の人。

T　お、国の人。ピンポン。国の人です。それともうひとつあるのは、国の人って書いてある下に火焚屋の衛士というのが書いてありますがこれも男のことを書いてあります。（黒板を書きながら）ちょっと見にくいけれど、国の人、火焚屋の衛士と書いてあります。では次に重要人物のもう1人、帝の娘のほかの言い方を誰か教えてください。

S13　皇女？

T　じゃあ、何か正解が聞こえたので、S13君お願いします。

S13　皇女。

T　当たりです。皇女。まだ他に言い方がありますが、他は宮っていう言い方も多く文章の中に出てきています。そしたら登場人物をワークシートのところに書いておいてください。

それではまた教科書に戻ります。ではこの物語は男がまず出てきて、そしてお姫様が出てくるというふうに話が進んでいくんですけど、今回は男が出ているところまでを勉強していきます。姫はまだ出てきません。本文を現代語訳していきます。皆さんはこの本文の現代語訳が載っているこのプリントを、見ながら聞いていってください。

「これは、いにしへ竹芝といふさかなり」これは昔竹芝といった坂である。断定の「なり」があるので、「である」という言い切りになります。そして「国の人のありけるを」「ける」は過去の助動詞「ける」で、この国の人でここに住んでいた男を「火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに」火焚屋の火を焚く衛士に指名し献上したところ「御前の庭を掃くとて」御前というのは御殿のことで、御殿の前の庭を掃いているときに、「などや苦しきめを見るらむ。」どうしてこんなつらい目をみるのだろうか。「わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に」私の故郷であっちに7つ、こっちに3つと酒を仕込み据えてある酒壺に「さし渡したる直柄のひさごの」据えおいてある直柄のひさごが「南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で」見での「で」というのは打消しを表しているので「みないで」と訳します。そして「かくてあるよ」こうしていることだなあと「独りごち、つぶやきけるを」独り言を言いぶつぶつ言っているところを、「そのとき帝の御むすめ」ここから姫が出てきたので、姫が出てくる手前までを勉強します。

ワークシート①を、竹芝寺①と書いてあるプリントを見てください。今読んだところにはまだ男しか出てきてないんですけど、この男がどういう状況にいるのかというのを見ていきます。まずこの男は何をしているのでしょう？　今、説明しながら読んだところに男がなにをしているのか、ということが書いてあります。では男がなにをしているのか、聞いてみます。ではS14さん。男は何をしているでしょうか？

S14　庭掃除？

T　そうです。「御前の庭を掃くとて」ということで庭掃除をしています。男は今御殿の前の庭を掃いていますが、なぜ男は御殿の前の庭を掃いているんでしょうか、なぜここにいるのか、分かる人いますか？　ではS15さん。

S15　……。

T　この男はボランティアで庭を掃いているわけじゃなくて。なぜここで庭を掃いているのでしょう？

S15　……。

T　ではS16君。なぜ男は庭を掃いているのでしょうか？

S16　仕事だから。

T　うん、仕事。どういう仕事かというと火焚屋の火焚く衛士という仕事です。火焚屋の火焚く衛士の仕事はこの教科書の下にも書いてありますけど、火焚屋という宮中の警護の衛士が庭火を焚いて見張りをする小屋の火を焚く仕事なのですが、今回はたまたま庭を掃いていました。そしてこの衛士という仕事は、この男の故郷は今働いている京都ではなくって、武蔵の国というのが故郷でした。その故郷から離れて京都で働きなさいといわれて働いています。無理やり連れてこられたようなかんじで働いています。そして当時身分の高い人は肉体労働などしていなかったので、この男は身分の低い人といえます。これが今の男の現状です。
次にこの男が庭を掃きながらつぶやいていた独り言を見ていきましょう。まず、「などや苦しきめを見るらむ」これはこの独り言を読むうえで重要な言葉なので文法的に読んでいきましょう。「などや苦しきめを見るらむ」まず「などや」の「など」は「どうして、なぜ」という疑問をあらわします。そして次にここにある法則があるんですけど、この法則の名前をみなさん知っていますか？　この「や」と「らむ」に関係する法則の名前…

S16　倒置法。係り結び。

T　お、係り結び。係り結びです。これが係り結びの法則ということは「などや」の「や」があり、結びの「らむ」は何形でしょうか？　この助動詞「らむ」の活用形が分かる人はいますか？

S17　終止形。

T　残念。違う。係り結びの法則だからここは…

S18　連用。未然連用終止連体…未然。

T　未然じゃない。

S18　ア然。使役。

T　違う。

S18　未然連用連体終止…已然。「らむ」ってことはあれよ、あれ形。終止形？　連体形じゃない？　係助詞？

T	係助詞は「や」。
S18	連体形でいい。連体形。
T	連体形。連体形です。「や」の結びは連体形、これが係り結びの法則です。そしてこの係り結びの法則によって何を意味しているのでしょうか？
S19	強調。
T	違う。ヒントは「など」に「どうして、なぜ」っていう意味があることです。
S20	疑問。
T	当たり。疑問です。疑問を表現しています。ちなみに「らむ」は原因推量の助動詞。こういうふうに文法でみることによって、「どうしてこんな苦しい目を見るのだろう」と疑問形で訳します。次に「わが国に～なびくを見で」この風景がどんな風景かわかるでしょうか？　この男が言っている直柄のひさごの風景というのは、(図を描きながら) これが直柄のひさごです。こっちから北風が吹いたならば、このひさごがこっちに向くと。南からだったらこっち向き。西の場合も東の場合も同様であるという、ほのぼのとした風景です。そんなほのぼのとした風景を男はつぶやいています。そしてなつかしいふるさとの情景が書かれているとワークシートのカッコに書いてください。係り結びの法則のところもちょっと狭いけど書き込んでおいてください。 そして独り言の最後のほう、「かくてあるよ」の「かく」というのは「このように」という意味なんですけど、「このように」とはどのようにしていることでしょう？ では S21 君。男はどうしてこんな苦しい目を見ているのだろうかと、懐かしいふるさとの情景も見ずに、どうしてこのようにしているのだろうのか、と言っているんですけど、「このように」とはどのようにでしょう？
S21	……。 （チャイム）
T	ではこの続きはまた明日。次の時間も竹芝寺①のワークシート使うので持って来てください。

第2時（2005年2月15日火曜日6時間目）

T	それでは昨日に引き続き竹芝寺をします。昨日は男の独り言をしている途中でチャイムが鳴って終わってしまったのですが、今回はその続きからします。 まずは音読をするので、わたしが読んだ後を続けて読んでください。それでは248ページです。
S1	48ページ？
T	248ページ。（現代語訳付きの）プリントの方を見てもいいよ。それでは読むので後に続いて読んでください。 （「これは～着きにけり」（前半部分）を追従読み。）
T	では今日はここまで読むことにします。みなさん、竹芝寺①と書かれたワークシートを持っていますか？　忘れた人はいませんか？ （忘れた生徒にワークシート①を配る。）
T	それと今日は①のプリントも使うのですが、新たに②のプリントも配ります。 （ワークシート②を配る。）
T	それでは今日はみなさんに、この竹芝寺②と書いてあるプリントの「語句」のところに語句の意味が書いてありますが、カッコして何も書いてないところがあります。そこを教科書の298ページに古文重要語句というのがあるので、それを引いて調べたのをこのカッコに書いてください。その間にわたしは黒板の方を書いておくので。 （作業）
T	もうみんな書けましたか？　それでは竹芝寺①というワークシートの方を出してください。前回の続きからしようと思います。
S1	どれ？
T	吹き出しの絵が描いてあるプリントです。（黒板を指して）ここに書いてあることは昨日みんな書いていると思うので、今日は写す必要はないです。男が独り言を言っていて…御殿の前の庭を掃きながら、男が独り言を言っていました。どうしてこんなつらいめを見るのだろう。なつかしいふるさとの情景を言い、かくてあるよと最後につぶやいています。この「かくてあるよ」というのは、こうしているよ、このようにしているよという意味ですが、「このように」とはどのようにしていることか、というところで昨日は切れたのですが、「このように」とは現在の状況を指しているので、このように御殿の前の庭を掃いて、武蔵の国から火焚屋の火焚く衛士として働きにでている、ということです。このプリントの「男は何をしているか」というところにグルーっと丸で囲んで、「かく」のところにこのように書き込んでください。この次にみなさん気なっていると思いますが、こうい

う吹き出しがあります。

S1　書き方がわからない。

T　あ、この書き方？　男が何をしているかということをプリントに書き込みましたよね。この書き込んだものをグルーと囲んで、そしてそこから矢印をビビビとのばしてください。

では、次にこの男のふきだしの中に独り言を言っている時の男の気持ちを書き込んでみましょう。この独り言を言っているときの男の気持ちというのはどんなものでしょう？　誰かに聞いてみましょう。では、S2 君。S2 君、この独り言を言っているときの男の気持ちとはどんな物でしょう？

S2　寂しい気持ち。

T　はい、寂しい気持ち。他にもいろいろな複雑な感情が絡まって出てきた言葉なので、寂しい気持ちの他にもどんな気持ちがあるのでしょう。では、S3 さんお願いします。

S3　こわい。

T　こわい？　こわいというのは何がこわい？

S3　……。

T　わからない？　このように、ふるさとから離れて知っている人もいない京都で、衛士の仕事が辛いのかもしれないし、早く仕事を終えてふるさとに帰りたい、そういう気持ちがあって独り言を言っているのかもしれません。そうですね、この「苦しきめを見るらむ」というところに辛い気持ちが表れています。この独り言に代表される気持ちとして、1 つめはどうしてこのような辛いめを見るのだろうという嘆き。それとふるさとが懐かしくて寂しいなあ、帰りたいなあという望郷の念、この 2 つの気持ちが大きく表れている言葉だと思います。これで昨日途中までになっていた男の独り言の部分が終わりました。

では、次はお姫様が登場する場面を読んでいきます。このお姫様が登場する場面を現代語訳していくので、現代語訳の書いてあるプリントを見ながら聞いていってください。「その時、帝の御むすめ」と書いてあるところからやります。

「その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ」その時、帝の娘さんでたいそう大切に育てられていらっしゃる方で、「ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて」ただひとり御簾の側にお立ちになって、「柱によりかかりてご覧ずるに」柱に寄りかかって外をご覧になっていると「このをのこのかくひとりごつを」この男がこのように独り言を言うのを、「いとあはれに」非常にこころうごかされ、「いかなるひさごの」どのようなひさごが、「いかになびくならむと」どのようになびくのであろうかと、「いみじうゆかしくおぼされければ」非常に見たいとお思いになったので、「御簾を押し上げて、『あのをのこ、こち寄れ。』」そこの男よ、こちらに参れ。「と召しければ」とお召しになったので、「かしこまりて高欄のつらに参り

たりければ」男は畏まって高欄の側に参上したところ、「『言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。』」今言ったことをもう1度私に言って聞かせよ。「と仰せられければ」と仰せになったので、「酒壺のことを、いま一かへり申しければ」酒壺のことをもう1度申し上げたところ、「『我率て行きて見せよ。』」私を連れて行って見せなさい。「『さ言ふやうあり。』」そういう理由があるのだ。「と仰せられければ」と仰せになったので、「かしこくおそろしと思ひけれど」畏れ多くおそろしいと思ったが、「さるべきにやありけむ」こうなるはずの因縁であったのだろうか、「負ひ奉りて下るに」姫様を背負い申し上げて国に下るときに、「論なく人追ひて来らむと思ひて」この「来らむ」の「らむ」は推量の助動詞なので、「〜だろう」と訳します。きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、「その夜、勢多の橋のもとに、この宮を据ゑ奉りて」この姫様を置き申しあげて、「勢多の橋を一間ばかりこほちて」「こほちて」というのは壊してという意味です。勢多の橋を一間ほど壊して、「それを飛び越えて、この宮をかき負ひ奉りて」この姫様を背負い申し上げて、「七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。」武蔵の国に行き着いたのであった。

という話なのですが、ここで重要な文法が出てきます。「已然形＋ば」という文法があります。「已然形＋ば」というのには原因・理由を指す場合と偶然条件を指す場合があります。原因・理由というのは、「〜ので・〜だから」というふうに使う「〜から」そして偶然条件というのは、「〜すると・〜したところ」というふうに、こういう使い方があるのですが、では、この文章の中から「已然形＋ば」が使われている部分を探してみましょう。それでは、S4君、どこからでもいいのでどれかひとつ言ってみてください。

S4　……。

T　それでは、S5君どうですか？

S5　「ければ」

T　「ければ」、お、そうです。「ければ」もいろいろありますけど、どの「ければ」にしましょう？

S5　「申しければ」

T　はい、「酒壺のことを、いま一かへり申しければ」の箇所ですね。では、この「申しければ」を使って説明していきます。みなさんはこの部分を見つけられたでしょうか？まず、この「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形です。そしてこの已然形と「ば」がくっつくと原因・理由か偶然条件を表しますが、ここの文章の場合はどちらになるでしょうか？これは文脈で判断するしかないのですが、原因・理由か偶然条件、どちらの意味を表しているか誰かに聞いてみます。S6君わかりますか？

S6　……。

T　現代語訳のほうを見てみると、この「もうしければ」はどういうふうに訳してあるでしょう？

S6　……。

T　「申し上げたところ」とあるので偶然条件の方があてはまります。なのでこの「已然形＋ば」は偶然条件を表しているといえます。今まで読んだところの、このほかの「已然形＋ば」について、原因・理由か偶然条件か言っていくので、現代語訳のプリントに書き込んでください。「その時」から、このプリントの上の部分、後ろから２行目からです。「その時…いみじうゆかしくおぼされければ」ここに「已然形＋ば」の「ければ」があります。これは「非常に見たいとお思いになったので」とあるので原因・理由を表しています。次に「御簾を押し上げて…と召しければ」この「已然形＋ば」は訳を見ると「お召しになったので」とあるので原因・理由を表しています。次に「かしこまりて…参りたりければ」この「ければ」は「高欄のそばに参上したところ」となっているので、偶然条件を表しています。次に「言ひつること…と仰せられければ」ここにもまた「ければ」が出てきます。これは「仰せになったので」となるので原因・理由を表しています。次に「酒壷のことを…申しければ」この「ければ」は前に説明したように「申し上げたところ」とあるように偶然条件を表しています。そして「『我率て行きて…仰せられければ」これは「仰せになったので」となっているので原因・理由を表しています。今回読んだところでは以上が「已然形＋ば」の登場する部分です。それでは、文法の説明はここで終わりにして、内容の方を見ていくことにします。

今日からお姫様が登場します。まず、お姫様がどういう人なのかというのを読んでいきます。「その時…御簾を押し上げて」というふうにしてお姫様が登場しますが、まず、お姫様はどんなふうに育てられているのでしょうか？　文章中に書いてあります。わかる人はいますか？　ではS7さん。お姫様はどのように育てられているのか、教えてください。

S7　……。

T　「その時、帝の御娘いみじうかしづかれ給ふ」という文が、そういうふうに育てられましたよ言っているのですが。この文章の意味はわかりますか？　プリント？　プリントは上の方の後ろから５行目から。「その時、帝の御娘…」。

S7　いみじうかしづかれ給う？

T　そうそう。そう、お姫様でたいそう大切に育てられている、そういう人です。そして、お姫様ということは、帝の娘です。とても身分が高い。これが今のお姫様の境遇です。

たいそう大切に育てられてられているお姫様が「御簾の際に立ち出て給ひて、柱に寄りかかりて御覧ずるに」。「御簾」っていうのはみなさんわかりますか？　この文章に「御簾」「高欄」という不思議な言葉が出てきているのですが、ちょっと

説明します。教科書を見てください。249ページに「御簾」と「高欄」の絵が載っています。まず、「御簾」というのは教科書にもありますが、簾ですね、カーテンみたいな。簾のことを「御簾」といいます。そして「高欄」というのは、このまるでベランダみたいなところの手すりの部分を「高欄」といいます。その御簾のそばにお姫様が立っていて近くにある柱に寄りかかって、外を見ていらっしゃる。外を見ていたら男が独り言を言っていて、お姫様はとても深く感動されて、どんなひさごがどのようになびくのだろうととても見たいとお思いになった。なので、このカーテンみたいな御簾を押し上げて「そこの男よ、ちょっとおいで」とお呼びになって、高欄というベランダみたいなものの手すりの近くまで男を呼び寄せたということです。この光景はみんなわかるでしょうか？　（黒板に図を書き）こういうふうなところに2人は立っていて、男を呼び寄せたお姫様は、「言っていたことをもう1度わたしに聞かせなさい」と仰って、男はさっきつぶやいていた酒壺のいことをもう1度お姫様に申したら、「わたしを連れて行きなさい」とお姫様は言いました。「そういう理由があるのです」と言いました。そして男は、お姫様を連れて行くなんてとてもおそれおおいことだと思ったけれども、そういう因縁でもあったんだろうと背中に背負って自分の国に連れて帰りました。という話の流れです。

ではなぜお姫様は「わたしを連れて行きなさい」といったのか、その理由がわかる人はいますか？　S8君起きてください。S7さんも。お姫様は「わたしを連れて行きなさい」と言いました。なぜ「連れて行け」といったのでしょうか？　S9君。なぜお姫様は「わたしをあなたの国に連れて行け」といったのでしょうか？

S9　見たかったから。

T　そうです。男の独り言を聞いて見てみたくなったから。

（チャイム）

T　では、ここまでをワークシート（②）に書いておいてください。それではまた明後日、お姫様の気持ちをやります。

第3時（2005年2月17日木曜日5時間目）

T　それでは一昨日に引き続いて竹芝寺を読みます。教科書の248ページを開いてください。それでは今竹芝寺を読んでいますけど、ちょっと1日あいたのでどこまで話が進んでいるかわからないかもしれないので、誰かに今までの話の内容を教えてもらいます。では、S1さん今までの竹芝寺の話がどこまで進んでいたか？

S1　今は武蔵の国に行って…わからん。

T　最初から順を追って、まず最初に誰が出てきたでしょうか？

S1　最初に宮…帝？　違ったあの人、火焚屋の火焚く衛士？

T　そうです火焚屋の火焚く衛士が出てきました。そして火焚屋の火焚く衛士がまず独り言を言いました。そしてそれを誰が聞いていたのでしょうか？

S1　宮？

T　そうです宮、帝の娘。宮とか皇女とか書いてありますけど。その帝の娘が御殿の中から男の独り言を聞いていて、そして男に「ちょっとこっちへ来なさい」と呼びつけて、「もう一度その独り言を言いなさい」といったところまでを一昨日やりました。前回はワークシート②の竹芝寺②とかいてあるプリントの宮の気持ちお姫様はなぜ「率て行きてみせよ」と言ったのかというところの途中までやっていました。竹芝寺②と書いてあるワークシートのない人…？　他に忘れた人はいませんか？　続きに書くところから今日はやっていきます。
姫はなぜ「率て行きてみせよ」と言ったのか？　ではその続きからやりますよ。前回途中までこの答えが出ていてどのように、どのようなひさごが、どのようになびくのか、お姫様が見たいと思ったからこれが1つの理由として前回出ていました。さらにまた今日は続きを考えるんですけど、お姫様がこんな風にどのようなひさごがどのようになびくのだろうと思ったのは男の独り言が原因でしたよね？　男の独り言がそういう内容を言っていたので、この男の独り言に大変心を動かされたからと言えます。そしてまた教科書250ページの2行目のところを見てください。男がいま一かえり申しければ、「我率て行きてみせよ。さ言ふやうあり」と姫がおっしゃいました。ここの文にあるように「さ言ふやうあり」というのも理由の1つです。「さ言ふやうあり」の「さ」というのは「そのように」とか「そう」という意味なので、これを訳すると「そのように言うわけがあるのだ」という訳になります。と、姫様自身が「そのように言う理由があるのだ」と言っています。でも、その理由っていうのは、まだこの時点では明らかにされていません。ここまでが何故姫様が「私を連れて行け」といったのかというその理由の説明になります。ワークシートのほうにここの部分を写しておいて下さい。

S2　書く欄が狭いんだけど…

T　ちょっと狭いけど工夫して、がんばって写してください。

それではまた教科書のほうに戻ります。250ページの1行目をまたちょっと見ていくので、みなさんも見てください。「『言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ』と仰せられければ、酒壺のことを、いま一かへり申しければ、『我率て行きてみせよ。さ言ふやうあり』と仰せられければ」という部分があってここはお姫様と男の会話が書かれている部分です。

そこでひとつ皆さん気付いたかどうかはわからないんですが、「申す」と「仰す」という言葉が出てきます。これにはちょっと使い分けがしてあって、どういう使い分けがされているかわかりますか？　どういうときに「申す」というのが使われて、どういうときに「仰す」というのが使われているのか、それをちょっと聞きます。それでは、S3さん。S3さん、この「申す」と「仰す」がどういう使い分けをされているのか分かりますか？　教科書の250ページの1行目から3行目までの間に「申す」が1回と「仰す」が2回出てきているんだけど、どういうときに「申す」というのが使われてどういうときに「仰す」というのが使われているか？

S3　……。

T　わかりませんか？　そしたらわかる人はいるかな？　ではS4君。どういうときに「申す」が使われてどういうときに「仰す」が使われているか？

S4　身分が高い人が言うのと身分が低い人が言うのの違い。

T　あ、そうです。では、この話の中では誰が言っているときに「申す」が使われて、誰が言っているときに「仰す」が使われているか？

S4　「申す」は男で、「仰す」は姫。

T　そうです。ここのお話の中では「仰す」が使われるのはお姫様がものを言ったときに「仰す」が使われています。そして「申す」が使われるのは、男がものを言うときに「申す」が使われています。そして、これはさっきS4君が言ってくれたんですけど、「仰す」は身分が高い人がものを言うときに、「仰す」というのが使われます。そして「申す」は身分が低い人がものを言うときに「申す」という言葉が使われます。これは敬語表現のうちの1つなんですけど、敬語といのは3つの種類があるんですけど、3つの種類を総称して敬語と言っています。なのでこの「仰す」と「申す」は同じ敬語ではあるんですが種類がちょっと違います。こう、姫が言う、男が言うという違いがあるように、身分が高い人の行為に使われることばの敬語を尊敬語と言います。そして身分の低い人が行うことをあらわす言葉の言葉が、謙譲語という敬語の種類になります。ちょっと謙譲語って言う漢字は難しいんですけど、覚えておいてください。この謙譲語と尊敬語の違いは、また次回説明するので、今回はこれくらいにしておきます。

では次にまた教科書のほうに戻りましょう。では、250ページの4行目から、お姫様が「我率て行きてみせよ。さ言ふやうあり」と言った後から読んでいきます。「か

しこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに」というところがありますがお姫様に「私を連れて行きなさい」と言われた男がお姫様からいきなりそんなことを言われたので、とても恐れ多く思いました。なんでお姫様がこんな私なんかにつれていけなんて言うんだろうと驚きもし、恐れ多く思いもし、またさるべどうしようと怖くもなりました。でも「さるべきにやありけむ」、「さるべきにやありけむ」という言葉が入っています。これはさっきの「さ言ふやうあり」にも出てきた。あ、そのまえにこの「さるべきにやありけむ」の「さる」というのは 2 つの言葉が合体した言葉です。本当は「さあるべきにやありけむ」という言葉なんですが、それが短くなって「さる」というふうになっています。なのでこの「さる」の「さ」っていうのは、隣の「さ言ふやうあり」の「さ」と同じで「そのように」「そう」という意味になっています。ここの文章には「や」「けむ」というのができているので、係助詞の「や」が出てきて結びの助動詞がこのような形になっている文法を、その法則の名前を、前回も出てきましたが、法則の名前をなんというでしょうか？

S5　係り結び。

T　お、そうです、係り結びの法則です。しょっちゅう出てくるので注意して見ておいてください。係り結びの法則で、係助詞が「や」であれば結びの助動詞の形は何形になるでしょう？　活用の形は何形になるか？　誰かわかりますか？

S5　連体形。

T　そうです、連体形です。そのように押えたところで「あるべきにやありけむ」あ、ちなみにこれは意味は疑問ですね。「さあるべきにやありけむ」そのようにある「べき」というのは当然の助動詞です。なのでそのようにあるのが当然のこと。そのようにあるのが当然なのであろうか。ギクシャクした訳で訳せばこうなります。スムーズに訳すると、そのようになるべき因縁でもあったのだろうか。というふうになります。そのような因縁であったのだろうか。そういう運命だったのだろうかと思われ、そして、「負ひ奉りて下るに」お姫様を背中に背負って自分の国の方に逃げて行きました。そして「論なく人追ひて来らむと思ひて」論なくというのは「言うまでもなく」という意味で、言うまでもなく人が追ってくるだろうと思ってその夜男は勢多の橋というのを渡ろうとしたのですけど、きっと人が追ってくるだろうと思った男は、そのあとどうしたでしょうか？　それがわかる人はいますか？　橋の前まで来たんですけど、男はそこでちょっと考えて、きっと人が追ってくるので追って来られないようにしようと思いました。さてどのような行動に男はでたのでしょうか？　では S6 君。男は人に追われないようにどのような行動に出たでしょう？

S6　橋を壊した。

T　そうです。橋を壊してしまいました。勢多の橋を壊した人が、論なく人が追って

くるだろうと思った男は橋を壊しました。そしてその後に橋を壊した、どのくらい壊したか？　橋を壊したんですが、男はどれくらい橋を壊したんでしょう？ S7君、男はどのくらい橋を壊したんでしょう？

S7　1年ぶん。

T　違う。書いてありますよ、1年じゃない。

S7　1間ぶん。

T　そうそう、そこのところ。

S7　橋の脚と橋の脚の間。

T　そうです。この「一間ばかり壊した」と書いてありますね。でその「一間ばかり」っていうのは、橋の脚と脚の間というふうに書いてあるので、（黒板に図を書きながら）ここは陸地ですね、で橋の脚がこうあったとすると、ここは川です。とするとここをバキーンと壊してしまいました。そうするともう普通の人間だとウオーと追ってきてもボチャーンって落ちてこの橋が渡れません。男が橋を壊した手順というのを説明します。もしこっちが京の都側だとすると、こっちが武蔵の国の側ということになります。そして、こっちから男がお姫様を背負って逃げてきたんですけど、まずお姫様は危険がないようにここにポンとお姫様は武蔵の国側の岸において、そして自分は戻って人が追ってきたときにここから先通れないように一間ばかり橋を壊します。そして壊した部分を、なんと男は、普通の人だとボチャンと落ちてしまうような壊れ具合なんですけど、ピョーンて飛び越えて、そしてまたお姫様を背負って武蔵の国に逃げ帰りました、という話です。しかも七日七夜で武蔵の国にたどりつきました。武蔵の国と京都っていうのがどれくらい離れているか、みなさんわかりますか？　武蔵の国は今で言う、今の都道府県で言うとどこだとおもいますか？

S8　大阪。

T　大阪ではありません。

S9　東京。

T　お、答えが出た。ピンポーン。東京です。そして今まで男が火焚屋の衛士として働いていた都は？

S8　奈良。

T　奈良ではないです。

S9　京都。

T　京都。京都です。まあ、ぱっと考えただけでも結構離れているのがわかりますけど、実際に目で見て見るために、教科書の 334 ページを見てください。334 ページに日本地図が載っています。日本地図が載っていて、武蔵の国というのは今で言う東京の（教科書を指しながら）ここですね。

S10　無いよ日本地図なんか。

T　ありませんか？

S10　何ページや？

T　334ページ。

S10　334か。44かと思った。

T　はい。で、ここが武蔵の国で、今で言う東京。そして京都はどこかって言うと、この日本の真ん中あたり、ここが京都。黒い文字で丹波って書いてあるところですね。そこが京の都のある場所になります。それで、この日本地図の九州の下あたりに黒い線があって、そこにこの線のぶんだけが300Kmを表していますという印が載ってるんですけど、この長さを京都と東京のところにあわせてみると、ちょうどこの線と同じ長さ分だけ離れていることがわかります。大体直線距離で300Km離れていて、そしてもちろん、そう、むちゃくちゃ離れてるの。そうね、もちろんこれは直線距離だから、もう山を避けたり川を避けたりして走っていくともちろん300Km以上道のりはあるわけで、なかなか大変な道のりです。それを男は七日七夜かけて自分の国に行き着きました。

それでは、また教科書に戻ります。では姫と男が京都の都から逃げて武蔵の国にたどり着いた。で、その続きを新たに読んでいきます。では私が読むので、皆さんはその後に続いて読んでください。250ページの最後の行から読みます。

（「帝～居るなり。」（後半部分）まで追従読み。）

T　それでは、また新たにプリントを配ります。

それでは250ページの最後から1行目改めてみていきましょう。「帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ」、「ぬ」というのは完了の助動詞で「～てしまった」なので、帝と后は皇女がいなくなってしまった、とお思いになって、そして「求め給ふに」お探しになりました。「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。」武蔵の国に衛士の男がたいそうよい香のする物を首にかけて飛ぶように逃げていった。とある者が申し出て、「このをのこを尋ぬるになかりけり。」「けり」は過去の助動詞で「～た」というふうに訳すので、この男を探してみると「なかりけり」いなかった。「論なくもとの国にこそ行くらめと」ここにもまた係り結びの法則が「こそ行くらめ」とあります。で間違いなく故郷の国に帰っているだろうと「おほやけより使下りて追ふに」朝廷から使いが下って、「おほやけ」というのはここでは朝廷という意味です。朝廷から使いが下って追いかけてみたが、「勢多の橋こほれて」勢多の橋が壊れていて「え行きやらず。」さきほど説明したように男が人が追ってくるだろうと考えていて橋を壊したためにやっぱり追っ手の人たちは橋のところで男を追うことができなくなってしまいました。（黒板に書きながら）「勢多の橋こほれてえ行きやらず」この「行きやらず」というのは、この「え」っていうのは、最後に「ず」っていう打消しの助動詞が付いて「～することができない」という意味になります。この使い方

を後々出てくると思うので覚えていてください。このようにして、勢多の橋が壊れていたので。行くことができなかった。なので、いろいろ回り道をしていたら「三月といふに武蔵の国に行き着きて」3ヶ月という日数で武蔵の国に到着した、ということです。この帝や后が朝廷の役人を使ってどのようにお姫様を探したかというのは、みなさんその手順はわかったでしょうか？　まずは、帝とお后は自分たちの住んでいる朝廷の中で、お姫様はどこに行ったんだろうって近場を探してみたんですけど、いなかったと。それでこうお姫様がどこ行ったんだろうと探し求めていたら、「武蔵の国の衛士の男がいと香ばしき物を首にひっかけて飛ぶように逃げて行ったというのを見た」と申し出たものがいました。だからもう遠くに逃げてしまったんだなというのがここでわかったんですが、「いと香ばしき物」というのが教科書の251ページの1行目のところに出ていますが、ちょっとそこを見てください。「いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける」という情報が入りました。しかしこの「いと香ばしき物」というのは何なのでしょうか？「いと香ばしき物」が何を意味しているのか分かる人はいますか？　香ばしいというのは、いい香りのするものとか、そういうものですね。遠目に見たら匂いがわからないかもしれないので、とってもいい匂いのしそうな綺麗なものかもしれません。それはいったい何を意味しているのでしょう？　ではS11さん。この「いと香ばしき物」はいったい何だったんでしょうか？　男が首にひっかけていた「いと香ばしき物」これを首にひっかけたまま男はピューって逃げていったんですけど、いったい何を首に引っ掛けて男は逃げていったんでしょう？

S11　よい香りのするもの。

T　よい香りのするもの。それでそのよい香りのするものを…

S11　姫。

T　そうです。姫です。姫は香をたきしめていてすっごくいい匂いがする人です。だからこれは、この言葉は姫を表しています。つまりこの武蔵の国の衛士の男が、姫と思われる人を首に引っ掛けて、っていうのはおんぶしているのでお姫様の手が男の首の下に巻きついているのでそう見えていると思うんですけど、お姫様を首に引っ掛けて飛ぶように男が逃げていったのを見た人がいたわけです。そしてそういう情報を得たので、もちろん男がどこへ逃げていったというと、だいたい想像がついてやっぱり自分の故郷へ逃げていったんだろうなとみんなわかったので使いの人たちが武蔵の国に向かったわけです。そしてさっきのように、勢多の橋のところで男がもう橋を壊していたので渡れずに遠回りをしたためどのくらいかかって武蔵の国に着いた…

S12　1週間。

T　違うね。1週間は男がそのスムーズに一生懸命走っていた場合に…

S12　あ、3ヶ月じゃ。

T	そうです。
S12	「三月」って書いてあるやん。
T	だから使いの人たちは橋を壊されてしまったがために、3ヶ月もかかってしまいました。でも男は七日七夜でたどり着いたと。もう時間も近づいてきたので、今日はこのようにお姫様と男が京都から武蔵の国にいってしまってそれに気付いた帝が、自分の姫を探させてそれでやっとこ三月かかって使いの人がたどり着いた。というところまでをしました。次回はその使いの人たちが姫様に何であなたたち逃げたんですかって聞いたのでそれにお姫様が答えるシーンからやります。では明日も竹芝寺③というワークシートを忘れずに持ってきてください。ではこれで終わります。

第4時（2005年2月18日金曜日2時間目）

T　それでは、今日も竹芝寺を勉強します。ではみなさん、教科書250ページの後ろから1行目から読んでいくので、250ページを開けてください。では、今からいつものようにわたしが読むので、あとの続いて読んでください。250ページの最後の行からです。では読みますよ。
（「帝～居るなり。」（後半部分）まで追従読み。）

T　それでは前回の続きをします。昨日は男がお姫様を背負って武蔵の国に逃げて行った。そして、その姫がいないことに気がついた帝と后がおほやけの使を使って、あちらこちらを探したところ、もう、お姫様は男と一緒に武蔵の国に行ってしまったということがわかりました。それで、おほやけ使が武蔵の国に行くことになったんですが、問題は、男が橋を壊したということですね。男は橋を壊した後武蔵の国まで行ったんですけど、男は何日で武蔵の国に着いたんでしたっけ？　お姫様を背負って逃げた男は何日で武蔵の国に帰りましたか？

S1　3日。じゃない3ヶ月。

T　違う。

S1　7日。

T　そう。七日七夜。そうです。男は七日七夜で武蔵の国にたどり着き、そして帝が送ったおほやけの使いたちは勢多の橋を渡ろうとしたときに、もう男がその勢多の橋を壊していたので回り道をしなければなりませんでした。なので大変時間がかかったんです。どのくらい時間がかかったでしょう？

S2　3日。じゃない3ヶ月。

T　そうです。使いたちは三月かかりました。というのが昨日までの話でした。で、今日からは、とうとう使いたちも武蔵の国に入ってお姫様とお話をしました。そうしたところお姫様がなぜ自分は武蔵の国に来ているかと説明をしてくれるんですけど、そこのところを読んでいきます。ではこの現代語訳が載っているプリントを見てください。このプリントには小さくページがふってあるんですけど3ページ、3ページの最初から2行目のところから読んでいきます。それでは現代語訳のプリントを見てください。
「このをのこを尋ぬるに」この男を探すと、「この皇女おほやけ使を召して」この姫は朝廷の使いをお呼びになって「『我さるべきにやありけむ」また「さるべきにやありけむ」という言葉が出てきたことに注目してください。みなさんこの「さるべきにやありけむ」という言葉に聞き覚えはありませんか？　前回説明して出てきましたね。

S3　なんとかという…違う?

T　そうそう。「さ」っていうのは「さある」っていうのが短くなって「さる」にな

ったんですけど、この「さ」っていう意味は「そう」とか「そのように」という意味でした。もちろんここには係り結びの法則があって、「や」「けむ」意味は疑問。みなさんちゃんと覚えていたようにこの言葉は前回やったときも出てきました。どこにでてきていたかというと、この現代語訳のプリントでは、表の下の段の最初から5行目のところに、「かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ」と出ていました。ではまた現代語訳プリントの裏側のほうの 3 行目から続きを読んでいきます。「我さるべきにやありけむ」私はそうなるはずの因縁であったのだろうか。「このをのこの家ゆかしくて」この男の家が見たくて、「率て行けと言いしかば率て来たり」ここに「言いしかば」というふうに「已然形＋ば」というのが出てきていますね。これは原因・理由を表しています。なので「率て行けと言いしかば率て来たり」連れて行けと言ったので連れてきてしまったのだと訳します。そして「いみじくここありよくおぼゆ」たいそうここは住みやすく思われます。「このをのこ罪し掠ぜられば」またここに「ば」という接続助詞が出てきましたが、今度は已然形ではないということにみなさん気付きましたか？接続助詞の「ば」は、今までずっと「已然形＋ば」で出てきたんですけど、この「られ」というのは未然形です。受身の助動詞「らる」の未然形「られ」。活用の仕方はわかりますか？　られ・られ・らる・らるる・らるれ・られよ。それの未然形ということです。なので今までのように「已然形＋ば」だったら理由原因を表したり、偶然条件を表したりといいましたが、未然形と「ば」が引っ付くと仮定条件というものを表しています。「もし～ならば」という仮定条件を表しています。なのでここは、「もしこの男が罰せられてひどい目にあわせられてしまうのであれば」という仮定の条件として訳します。そして「我はいかであれと」私はどうしろというのですか。「これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ」「べき」というのは当然の助動詞で、「こそありけめ」と係り結びの法則があります。ここの場合の意味は強調ですね。これも前世でこの国に住み着く因縁でもあったのだろう「はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」早く都に帰って帝にこのことを奏上しなさい、申し上げなさいと「仰せられければ」仰ったので、ここで「奏す」という動詞が出てきました。意味は物を「言う」という意味なんですけどこれは敬語表現です。「言ふ」の敬語表現は昨日も説明したとおり他にも「申す」「仰す」がありました。それで、「仰す」はおっしゃる、言うという意味でも尊敬語なので「おっしゃる」と訳します。「申す」も言うという意味ですが謙譲語なので申し上げると訳します。「奏す」はこれは「申す」と同じように謙譲語、だから「申し上げる」と訳してもいいんですけど、ただこの「奏す」は使う人が限られています。天皇に何か言うときだけこの「奏す」を使います。このことを覚えておいてください。「奏す」は「申す」と同じような働きであるけれども、使うのは天皇にだけ使う、それを覚えておいてください。

それでは、お姫様が何故自分は武蔵の国にいるのかということを今説明してくれたので、その内容を確認していきます。今から竹芝寺③というワークシートを使うんですけどワークシート③を持ってない人はいますか？　みんなワークシート持っていますか？　教科書の 251 ページの後ろから 2 行目を見てください。教科書の 251 ページの後ろから 2 行目に「我さるべきにやありけむ～このよしを奏せよ」とこの部分が姫自身が何故自分はここにいるのかということを説明している言葉になっているんですけれども、ここの姫の言葉から、どうして姫が武蔵の国にきたのか誰か説明してください。それでは誰かに当てましょうかね。それでは S4 君。すごく目が合いやすい位置にいるから当ててしまう。

S4　150 ページ？

T　251 ページ。お姫様がどうして自分が武蔵の国に来ているのかとこの 251 ページの最後から 2 行目あたりから説明してくれているんですけど、そこを S4 君に言ってもらおうかなと思っています。

S4　里帰り。

T　お姫様の実家はここではないですよ。お姫様の実家は京の都。

S4　男の。

T　そうそう男の実家がここであるからそれはそうなんですけど。ここが男の実家であるからそうなんですけど、そうですね、男の実家を見たかったからここに、男に連れて行けって言ったからここにいると言っていますね。それもひとつですね。つまり男の家が見たかったということですね。そして男の家が見たかったから男に連れて行けと言ったら連れてきてもらったんだと。そしてその後また理由をいっています。では S5 さん。どうしてお姫様は武蔵の国に行ったんでしょうか？

S5　わかりません。

T　そうですか。S6 さんわかりますか？　お姫様がなぜここに来たのかっていうのを。

S6　じゃけえ、男の人が独り言を言いよって、それがどんなんかなって見たかったから。

T　そうですね。それはここに書いてあることなんですけど、確かにそれはあります。で、そもそもなぜそんなふうに男の独り言が気になってここに来たのか、そもそもの原因というのをここで初めてお姫様は明らかにしているんですけど、そこが分かる人はいませんか？　そもそもの原因があったのです。それは何でしょう？では S7 君わかりますか？

S7　……。

T　252 ページの 2 行目あたりに書いてある。

S7　質問の意味は？

T　質問の意味はこのお姫様が何故武蔵の国に来たのか、その理由をお姫様自身がしゃべってくれているんですが、そこのところを説明してください。お姫様はなん

と説明してくれているんでしょうか？

S7　前世でこの国に住むはずの因縁があった。

T　そうです、そこのところです。前世でこの国に住むはずの因縁があった。そこですね。

お姫様自身、これがそもそもの理由だと言っています。これは今までの謎めいた表現の全ての答えになっているんです。それは今まで「さるべきにやありけむ」というのが 2 回出てきて、そして最初のほうでもお姫様が私を連れて行けと言った時に、「さ言ふやうあり」そういう理由があるのだ、という何かちょっとよくわからないけど、そういう理由があるんだという謎めいた言葉を残していました。それらすべては、こういう理由っていうのはどういう理由があったかっていうと、この国に住み着く因縁があったということです。教科書の 250 ページの 3 行目に「さ言ふやうあり」。同じく 250 ページの 4 行目にも「さるべきにやありけむ」。そして 251 ページの 7 行目「さるべきにやありけむ」。これらの、「さ」「そのような」というのが何かと言うと、今その謎が解けました。これをワークシートの「姫が武蔵の国に来た理由」っていうところに書き込んでください。

それではまた続きを読んで行きましょう。それではこの現代語訳のプリントの裏側のお姫様の言葉の続きからまた読んでいきましょう。「はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ』と仰せられければ、言はむかたなくて」姫様にそんなふうに言われたので使者はもう言いようもなくて「上りて、帝に、かくなむありつると奏しければ」、「かく」というのは「このような」という意味です。「なむありつる」とまた係り結びの法則があり、これは強調を意味しています。「奏す」はさっき説明した天皇に申し上げるという意味です。「ければ」はまた「已然形＋ば」で今度は偶然条件を表しています。都に上って天皇にこのようであったと申し上げたところ、「言ふかひなし」言ってもしょうがない。しかたがない。「そのをのこを罪しても」その男を罰しても「今はこの宮を取り返し、都に返し奉るべきにもあらず」今となってはこの姫様を取り返して、「ず」は打ち消しの助動詞です、都に返し申し上げることもできない。「竹芝のをのこに」竹芝の男に「生らむ世のかぎり」「ら」は存続の助動詞、「む」は婉曲、生きている世のかぎり「武蔵の国を預けとらせて」武蔵の国を預け与えて「おほやけ事もなさせじ」おほやけ事もさせないでやろう。「おほやけ事」というのは教科書にも書いてあるように、租税を納めたり、労役をしたり、それを「おほやけ事」といいます。それはもう男はしなくてよいと、衛士として働かなくてもいいよと言ってくれました。「ただ、宮にその国を預けたて奉らせ給ふ。』」ただ姫にその国を預け申し上げよう。「よしの宣旨下りにければ」そういった内容の宣旨が下ったので、ここはまた「已然形＋ば」で原因・理由を表しています。そして「宣旨」というのは教科書の下にも書いてありますが、天皇が仰ったことを伝える文章です。このように帝からお姫様たちにこ

のような処置が下されたわけですが、どのような処置が下されたのかそれを今からまとめてみましょう。では帝はこの姫と男に対してどんな処置を下したのか、それをいまから誰かに言ってもらいましょう。じゃあ
S8君。帝はどのような処置を姫と男に対してしたでしょう。

S8　帝は村を救いました。

T　ううん？　そういうことはかいてありませんよ。

S8　また造り、立て直した。

T　ああ、この後に書いてあることは、男が家を作り直したんですね。だから天皇ではないですよ。

S8　立てろと言った。

T　ううん、言ってはいない。

S8　取り返した。家を。

T　ううん、取り返してもいない。天皇が言っていることをよく読んでください。「言うかひなし～預け奉らせ給ふ」と言っています。

S8　宮に国を預けろと。

T　そうです。宮に国を預ける。宮というのは姫のことなので、姫に武蔵の国を預ける。そして他にも男に対しても何か言っていますが、それは何でしょう？S9君。帝は男に対してどういう処置をしたでしょう？

S9　わかりません。

T　そうですか。ではS10さんわかりますか？　帝は男に対してどういう処置をしたか、ヒントこれ（黒板の「おほやけ事」を指しながら）。

S9　租税や労役などをさせない。

T　そうです。租税や労役をもうしなくてもいいと言ってくれました。男には租税労役は課さないと言いました。また「そのをのこ～べきにもあらず」もしこの男を罰して、お姫様から引き離し、姫は都に帰してもらうぞってそんなことをやったとしても、お姫様は悲しむばかりだろうから、もう男も罰さないし、お姫様は武蔵の国にいていいよと2人を許しました。男は罰さない、そして姫は都に帰ってこなくてもいいと、そういう処置を帝はしました。それでは「帝の処置」のところをワークシートに書いておいてください。
それでは最後の部分を読んでいきましょう。現代語訳の書いてあるプリントのうしろの最後のほうを読んでいきます。「この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を」さきほど帝からこのように許され、お姫様も自分も武蔵の国に住むことになったので、男は今まで自分が住んでいた家を内裏のように造ってお姫様を住まわせ申しあげた家。「内裏」はまず読み方を覚えておいてください。「うちうら」と書いて内裏と読みます。内裏というのは天皇が住んでいる御殿のことです。つまり男は自分の国にまるで天皇の御殿のような立派な家を姫のために造っ

たのです。そして姫も亡くなり主のいなくなってしまったこの家を「寺になしたるを」寺にしました。「竹芝寺といふなり」竹芝寺というのである。つまり、竹芝寺というのは昔お姫様が住んでいた家のことだったのです。そして、「その宮の生み給へる子どもは」そのお姫様が生みなっさった子どもたちは「やがて武蔵といふ姓を得てなむありける」「なむありける」というのは係り結びの法則があって、強調を意味しています。武蔵という国の名前をそのままとって、武蔵という名字をもらってそこに住んだということです。「それより後、火焚屋に女は居るなり。」火焚屋にはもう男はおかず女が詰めているそうである。というふうにしてこの物語は終わりました。

では最後に「それより後、火焚屋に女は居るなり。」というのが最後の文章なんですけど、なぜ火焚屋に女が詰めるようになったのでしょうか？　では S10 くん。どうして火焚屋には男じゃなくて女が詰めるようになったのでしょうか？

S10　こういう事件が起こらないようにするため。

T　そうです。やっぱりこんな事件は 2 度と起こって欲しくないというのが本音なので、どうして火焚屋に女しか詰めなくなったのかというのは、もう 2 度とこのような事件が起こらないようにするためです。このような事件っていうのはもちろんお姫様と男が都を飛び出して武蔵の国へ行ってしまったという事件です。帝にしてみれば娘がどこか行ってしまうということは大変さびしいことですし、2 人を許したものの、2 度と起こって欲しくない事件なので、このように対策をとりました。これで無事に竹芝寺のお話が終わりました。最後に、まとめのプリントを作ってきたので、これを見てどんなお話だったかというのを思い出してください。

（補助プリント④を配る。）

（チャイム）

T　それではみなさん、4 時間お付き合いいただいてありがとうございました。

S 全員　ありがとうございました。

第3節　授業実践を通して得られた知見と反省

(1)　指導者について

1) 柔軟で適切な授業進行を行う姿勢

1時間目の授業を終えた時点で、計画が全く予定通り進まないことがわかった。2時間目以降の授業案は大幅に変更され、当初 4 時間目に計画していた内容は削除しなければならなかった。そのような状況で、どうやって「竹芝寺」を 4 時間で完結させられるか、焦った。せっかく予定した内容を無駄にしたくないという思いもあり、思い切りよく内容を簡略化する判断力を失っていた。そのため1人でしゃべってしまう部分が多くなってしまい、生徒たちに退屈な思いをさせてしまった。今後は余裕のある授業計画を目指し、柔軟にことを切り抜ける判断力を身につけたい。

(2)　指導法について

1) 文法事項の説明は必要最小限に

本来ならば、内容理解を重視し、生徒と共に古典の話の流れを楽しみながら読むべきであった。しかし、文法事項の説明を中途半端にしてしまったために、内容理解の時間が十分に取れなかった。文法事項の説明をするにしても、現段階で生徒がどこまで理解しているかを正確に把握し、余計な説明は省くべきだったと反省する。

2) 生徒を信頼し、対話する

あからさまに答え当ての授業であった。生徒から期待している答えが返らず、授業が進まなくなることを恐れ、発問の回数も少なかった。もっと生徒を信頼し、生徒と対話しながら授業を進めるべきであった。教師として教壇に立つ時には、生徒との間に信頼関係を作り、対話できるようにならなければならない。それが十分にはできなかったのではないかと悔やまれる。

3) 生徒が持つ答えを引き出す

時間がないからと、1問1答式の発展性のない発問をして、足りないところは自分ですべて説明してしまった。生徒がどれだけ理解できたか不安である。何よりも今回の授業では生徒とのやりとりの機会が少なすぎた。あれもこれも説明しなくてはと、時間と見合わない無理な計画をこなすことに執着してしまい、結果的に大半の時間を 1 人でしゃべってしまった。あらかじめ教師側で答えを用意しておくことは安心なようで実に恐ろしいことだ。つい、その答えに頼って、1問1答式にしてしまったり、自分で説明してしまったりしがちであった。答えは教師が持っているのではない。生徒が持っていて、それを引き出さなければ授業は先へ進めない。そう思っていなければ、ひとりよがりな授業になってしまうと痛感した。

4)ハイライトを作り、メリハリのある授業に

また、1から 10 までこと細かに答えを用意した結果、教材の最も重要な部分はどこかと

いうことが、かえって分からなくなってしまった。姫の行動も、男の行動もすべて一本調子で説明してしまったため、授業にハイライトを作ることができなかった。次回からは、教材の軸を明確に把握し、ハイライトを作り、メリハリのある授業にしなければならない。

5) ワークシートとの対応

今回の授業は、ワークシートを用い、重要事項はすべてワークシートに書き込ませた。板書はできるだけワークシートと対応できるようにし、ワークシートに書き込むべき箇所はその都度指示した。ワークシートの内容は教材の内容理解を重視し、書き込む欄はすべて内容理解に関するものにした。文法事項の扱いについては、口頭では必要以上に説明しているにもかかわらず、ワークシートではおおまかにしか扱っていないというアンバランスさが気になる。生徒もワークシートに書き込まなくていいとなると集中力がなくなる。文法事項の説明は、学習内容を吟味し、絞り、ワークシートにも対応させるべきであった。

(3) おわりに

授業中の生徒の反応からは、どのくらい理解したのか、今回の授業をどう思ったのかよくわからなかったが、放課後などに授業の感想を言ってくれる生徒もいた。肯定的な感想は大変励みになった。しかし、肯定的な感想だけが生徒たちの評価ではないことはわかっている。他にも悪かった点など知りたかった。次回授業する場合には、生徒の感想を聞く機会を設けたい。今回はそれを行わなかったため、主観的な反省にならざるをえなかった。他者からの目を意識しなければならない。授業は自分のためではなく、生徒のためにするものだからだ。今の私に必要なことは客観的な目で見られ、客観的な目で見ることができるようになることだ。文字化資料はその要請に答えるものである。

このような授業計画は大学の授業で何度か作ってきた。それらは頭の中で組み立て、紙に書き、吟味し、それで終わりだった。それを今回、実際に授業の形にさせていただき、机上ではわからなかったこと、予想できなかったこと（計画は思うように進まないこと、1人でしゃべりすぎてしまうことなど）を体験することができた。大変ありがたい経験であった。賀茂北高校の先生方、生徒のみなさんには本当に感謝している。この経験を活かして次の授業につなげていけるよう、今回の反省をもとに努力することがこれからの私のつとめである。

第３章　第１学年発展クラス『更級日記』授業実践の研究

濱田和幸

第１節　「竹芝寺」学習指導案

１　日時、場所：　平成１６年２月１４日～２月１８日、会議室

２　学年、学級：　１年生発展クラス

３　教科、科目、単位数：　国語、国語総合、四単位

４　教材、単元：　新編国語総合(東京書籍)、「竹芝寺」

５　本課について

① 教材観：　この教材は身分の高い女性とそうでない男性の恋愛を描き、それによって子を想う親の気持ちを表現している。そして、人の生活は多様な他者に支えられているということを描いている。また、平安朝の貴族階級の女性にはあまり見られない未知への好奇心と強い実行力が見てとれる。

② 生徒観：　発展クラスの１年生の３学期末ということで、一通りの文法事項の確認は終わっているが、体系的な理解には至っていない可能性がある。今後の学習活動を円滑に行うためにも、一度文法の体系的なまとめを行う機会が必要である。

③ 指導観：　「竹芝寺」を読むことを通じて文法、特に助動詞を体系的に理解し、今後の学習活動に役立てることができるようにする。また、子を想う親の気持ちを理解し、平安時代と現代の恋愛について比較し、その違いを理解する。

６　本科の目標：　文法を識別法などの観点から理解し直すことを通じて「竹芝寺」だけでなく、他の古典作品を読む力をつける。１年次の締めくくりとして助動詞、助詞を総復習し２年次に備える。また、男女の恋愛の在り様、またそれを見守る親の気持ちというものを考える。

7　学習活動の展開

第１時間目

(1)本時の目標

① 正確な音読ができるようになる。

② 本文を助動詞に注意しながら正確に口語訳できるようになる。

③ 本文を助詞に注意しながら正確に口語訳できるようになる。

(2)本時の評価の観点

①本文を、意味のまとまりに注意しながら読めたか。

②助動詞について、正確に理解できたか。

③助詞について、正確に理解できたか。

(3)本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
単語テスト	1　単語テストを行う。	1　時間をとり過ぎないように生徒の状況に注意する。	5
『更級日記』文学史的位置について確認	1　便覧を用いて作者、成立などについてワークシート①にまとめる。	1　あくまでも導入なので、時間を取り過ぎないように注意する。	8
範読を聞く	1　教師の第１段の範読を聞く。	1　次に行う斉読に備えて、範読を聞くように指導する。	１３
第１段の音読	1　第１段を音読する。(斉読)	1　教師が先導して読むことによってばらばらにならないように注意する。 2　わからない単語、句切れのわかりにくいところに注意して読むように指導する。	２０
第一段の口語訳	1　助動詞、助詞「ば」についてワークシート①②⑦⑧⑨⑩を用いて確認する。	1　助動詞、助詞について、識別や口語訳の仕方を整理しながら確認し、知識が無い場合は便覧を用いて確認させる。 2　単語の知識が無い場合は、辞書を引いて調べるように指導する。	５０

・以下、識別表という記述はワークシート⑦⑧⑨⑩を指す。

第２時間目

（1）本時の目標

①助動詞、助詞を正しく識別できるようになる。

②第１段の全体構造を、正しく理解できるようになる。

③「皇女」、「をのこ」の行動について、様々な視点から考察し理解できるようになる。

（2）本時の評価の観点

①文法事項を正確に理解できたか。

②全体構造の理解ができたか。

③「皇女」、「をのこ」の行動について様々な視点から考察し理解できたか。

（3）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
単語テスト	1　単語テストを行う。	1　時間をとり過ぎないように生徒の状況に注意する。	5
前時の想起	1　助動詞の識別表の使い方を確認する。	1　例を出しながら識別表がきちんと使えるように指導する。	7
助動詞「らむ」の学習	1　助動詞「らむ」について識別表を用いて確認する。	1　識別表の使い方を指導する最後の機会なので、しっかりと使い方を理解させる。	１５
第１段の内容の確認及びまとめ ワークシート⑪	1　「皇女」「をのこ」の立場について確認する。	1　「皇女」が天皇の娘であり身分が高いこと、一方「をのこ」の身分が低いことを確認する。	１９
	2　「をのこ」の独り言について考える。	1　自分だったらどうだろう、という視点から「をのこ」の想いについて考えさせる。	２５
	3　「皇女」の「我率て行きて見せよ」に込められた思いについて考える。	1　「皇女」の立場というものに留意して、登場人物の視点に立って考えるようにさせる。	３２
	4　「をのこ」が「さるべきにやありけむ」と思った理由を考える。	1　「かしこく恐ろし」と思っている点に注目させて考えるようにさせる。	４２

	5　「をのこ」の行動について確認する。	1　「皇女」を守るためにどのような行動をとっているかを、順を追って確認する。	47
ワークシート⑪を確認	1　ワークシート⑪を用いて確認する。	1　ワークシート⑪を用いて、順を追って説明する。 2　ぬいぐるみを用いることによって、視覚的に理解させ、内容を把握させる。	50

第３時間目

（1）本時の目標

①第１段の内容を把握する。

②第１段の登場人物の気持ちを考え、理解を深める。

③第２段の本文を正しく音読することができる。

（2）本時の評価の観点

①第１段の内容理解ができたか。

②登場人物の心情把握ができたか。

③本文を意味のまとまりに注意しながら読めたか。

（3）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
単語テスト	1　単語テストを行う。	1　時間をとり過ぎないように生徒の状況に注意する。	5
前時の想起	1　ワークシート⑪を参照して、第１段の大まかな流れを思い出す。	1　ワークシート⑪の表を用いて大まかに流れの確認を行う。 2　ぬいぐるみを使い、視覚的に確認することによって、より鮮明に想起することができるように配慮する。	8
「皇女」と「をのこ」の立場の違いを考える 以下、ワークシート⑫を使用	1　本文を読んでそれぞれの立場の違いについて確認する。	1　「皇女」は身分が高いこと、「をのこ」は衛士として労役中で身分が低いことに注意して確認する。	１５
「をのこ」の独り言の意味を考える	1　本文を読んで「をのこ」の心情を読み取る。	1　寂しさを感じている様子を「などや…かくてあるよ」の言葉から読み取らせる。	２２
「皇女」の「我率て行きて見せよ」に込められた想いを考える	1　「我率て行きて見せよ」と言った理由を考える。	1　皇女の視点に立って考えるようにさせる。	２６
	2　「皇女」の「をのこ」に対する思いを読み取る。	1　身分の差という点に着目させて、「皇女」の好意を読み取らせる。	２９

	3　『枕草子』を用いて「をのこ」の立場を確認する。 ・ワークシート⑭を使用	1　火焚屋の衛士の身分について確認し、より深く理解した上で「皇女」の決断について考えさせる。	35
	4　言葉の内に秘めた愛情表現について理解する。	1　感情を表に出さない愛情表現について理解させる。	40
「をのこ」の行動について、「皇女」への愛という視点から考える	1　本文を読んで互いの行動の確認を行う。	1　「皇女」の愛に対する「をのこ」の行動を確認させる。 2　互いの愛の深さについて考える。	49
次時の予告	1　次時に、「さるべきにやありけむ」について考えることを伝える。	1　予告なので手早く伝える。	50

第４時間目

（1）本時の目標

①第２段の本文を正しく音読することができる。

②第２段の内容を理解する。

③「さるべきにやありけむ」について考える。

（2）本時の評価の観点

①本文を意味のまとまりに注意して読めたか。

②本文について正確に理解できたか。

③「さるべきにやありけむ」について、２度使われている点に着目して考えられたか。

（3）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
単語テスト	1　単語テストを行う。	1　時間をとり過ぎないように生徒の状況に注意する。	5
前時の想起	1　ワークシート⑪を用いて第１段の内容の確認を行う。	1　ワークシート⑪を用いて前時の内容を確認する。 2　ぬいぐるみを用いて視覚的に確認する。	7
「さるべきにやありけむ」について考える	1　ワークシート⑪を使って、「皇女」が「さるべきにやありけむ」と思った理由について考える。	1　「皇女」の身分に留意して「皇女」の視点に立って考えさせる。	１０
第２段の音読	1　第２段を音読する。	1　数箇所に区切りながら、数人の生徒に音読させる。	１７
第２段の文法事項の確認	1　ワークシート⑮⑯を用いて助動詞の確認を行う。	1　第１時間目に表の使い方を確認しているので、簡単にすませる。	２３
第２段の本文の流れをつかむ	1　ワークシート⑰を用いて本文の流れをまとめる。	1　ワークシート⑰に書き込みながら本文の流れを確認させる。 2　ぬいぐるみを使って視覚的に理解させる。	３３

「さるべきにやありけむ」について考える	1　本文を読んでワークシート⑰に書き込みながら考える。	1　「さるべきにやありけむ」について、第１段の「をのこ」、第２段の「皇女」の心情について比較させながら考えさせる。	３９
「言ふかひなし」について考える	1　本文を読み、考える。	1　「言ふかひなし」という言葉は、帝のどのような気持ちから出たものなのかを考えさせる。	４７
話の全体の流れを確認する	1　ワークシート⑪⑰を用いて確認する。	1　ワークシート⑪⑰を用いて本文全体の流れを確認する。 2　ぬいぐるみによって視覚的に説明し理解を深めさせる。	５０

・どの授業もワークシートに書き込む形式のため、板書計画は記載しない。

1

「竹芝寺」

『　　』からの出典
作者・・・
成立・・・

A本文V
（第一段）

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。

国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、

御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。

わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、

南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、

西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよ。」と、

独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、

ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧ずるに、

このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、いかなるひさごの、

いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、

2

御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち寄れ。」と召しければ、

かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、

酒壺のことを、いま一かへり申しければ、

「我率て行きて見せよ。さ言うやうあり。」と仰せられければ、

かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、

論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、

この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、

この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

（第一段）

これは、昔、竹芝といった坂である。

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。

この国の人で（ここに）住んでいた男を、火焚屋の火を焚く衛士に（国司が）指名し献上したところ、

国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、

（この男は）御厨の前の庭を掃きながら、「どうしてこんなつらいめをみるのだろうか。

御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。

私の故郷で、（あっちにこっち（こっちに）三つと酒を仕込み据えてある酒壺に置いてある直柄のひさご）が、

わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、

南風が吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、

南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、

西風が吹くと東になびき、東風が吹くと西になびくを見ないで、こうしていることだなあ。」と、

西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」と、

独り言を言い、ぶつぶつ言ったところ、その時、帝の御娘でたいそう大切にされていらっしゃる（御娘が）

独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、

ただひとり、御簾のそばにおでましになって、柱に寄りかかって（外を）ご覧になると、

ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧ずるに、

この男がこのように独り言を言うのを（お聞きになり）、非常に心を動かされ、

このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、

どのようなひさごが、どのようになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので、

いかなるひさごの、いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、

御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちらへ参れ。」とお召しになったので、

御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちらへ寄れ。」と召しければ、

男は、かしこまって、高欄のそばに参上したところ、

かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、

「今言ったことをもう一度、私に言って聞かせよ。」と仰せになったので、

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、

酒壺のことをもう一度申し上げたところ、

酒壺のことを、いま一かへり申しければ、

「私を連れて行って（それを）見せよ。そういう理由があるのだ。」と仰せになったので、

「我率て行きて見せよ。さ言うやうあり。」と仰せられければ、

おそれ多く恐ろしいと思ったが、そうなるはずの因縁であったのだろうか、（姫宮を）背負い申し上げて国に下る時に、

かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、

きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、その夜、勢多の橋のたもとに、

論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、

この姫宮を脱き申し上げて、勢多の橋を一間ほどこわして、それを飛び越えて、

この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、

この姫宮を背負い申し上げて、七日七夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。

この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

5

<単語のまとめ>

① ☆いにしへ・・・遠い昔。古い時代。94

② 衛士・・・衛門府に属する兵士。諸国の兵の中から選ばれて上京し、宮中の警護に当たった。904

③ ☆御前・・・神仏や高貴な人のそば。御前。191

④ ☆などや・・・どうして…か。なぜ…か。623

⑤ 据ゑ・・・置く。供える。据える。462

⑥ さし渡し・・・一方から向こうまでかけ渡す。さしかける。397

⑦ かくて・・・こうして。このままで。こんな風で。220

⑧ 御簾・・・貴人の屋敷などの簾。御殿の簾。777

⑨ ☆際・・・辺り。ほとり。そば。282

⑩ こち・・・こちら。こちら側。356

⑪ つら・・・そば。わき。573

⑫ 一かへり・・・一度。一回。

⑬ ☆率て・・・引き連れる。伴う。連れて行く。902

⑭ ☆さ・・・(すぐ前に述べた語句。内容を指示して)そう。そのように。380

⑮ おそろし・・・驚くべきだ。たいしたものだ。

⑯ ☆さる・・・そのような。そんな。422

⑰ ☆負ひ奉り・・・背中に乗せる。かつぐ。172

6

⑱ ☆下る・・・(都から地方へ)行く。302

⑲ かき・・・(動詞について)意味を強調したり、語調を整えたりする。215

⑳ ☆失せ・・・行方不明になる。姿を消す。

<文法のまとめ>

☆「なり」

「なり」
- 伝聞・推定の助動詞「なり」
- 断定の助動詞「なり」
- ナリ活用の形容動詞の活用語尾
- 動詞の「なる」

終止形 ＋ 「なり」 → 伝聞（…ダソウダ、…トイウコトダ）
ラ変の連体形 ＋ 「なり」 → 推定（…ヨウダ）
体言 ＋ 「なり」 → 断定（…ダ、…デアル）
連体形 ＋ 「なり」 → 存在（…ニアル、…ニイル）

☆ 過去の助動詞

「き」 → 体験過去
「けり」 → 伝聞過去

☆「たり」

「たり」
- 存続・完了の助動詞「たり」
- 断定の助動詞「たり」

連用形 ＋「たり」 → 存続完了
連体形・体言・助詞 ＋「たり」 → 断定

☆「ば」

未然形 ＋「ば」 → 仮定
已然形 ＋「ば」 → 原因・理由（…ノデ、…カラ）
偶然的なつながり（…ト、…タトコロ）
必然的なつながり（…ト必ズ、…トイツモ）

☆「む」

未然形 ＋「む」 → 推量・意思・適当・勧誘・仮定・婉曲

☆「れ」

「れ」
- 受身・自発・可能・尊敬の助動詞「る」の未然形・連用形
- 存続・完了の助動詞「り」の已然形・命令形
- 助動詞「る・らる」の一部
- 用言・助動詞の活用した形の一部

四段・ナ変・ラ変の未然形 ＋「れ」 → 完了・存続
「こそ」 … 「れ（已然形）」

☆「つる」

「つる」 → 連用形接続の完了・強意・並列の助動詞「つ」の連体形

9

☆「せよ」

未然形の助動詞「す」の命令形
未然形の助動詞「さす」の命令形の一部
↓ 使役・尊敬

☆「らむ」

「らむ」
- 現在推量の助動詞「らむ」
- 完了の助動詞「り」の未然形の「ざら」+推量の助動詞「む」
- 打消の「ず」の未然形の「ざら」+推量の助動詞「む」
- ラ行四段・ラ変動詞の未然形語尾+推量の助動詞「む」
- 形容詞・形容動詞の未然形の一部+推量の助動詞「む」

終止形・ラ変の連体形 + 「らむ」 ↓ 現在推量

サ変の未然形・四段の已然形 + 「ら」 + 「む」 ↓ 完了+推量

＊「む」は推量以外の意思・婉曲などのこともある

☆「ぬ」

「ぬ」
- 打消の助動詞「ず」の連体形
- 完了の助動詞「ぬ」
- 強意の助動詞「ぬ」
- ナ行動詞の終止形語尾

未然形 + 「ぬ」 + 体言・断定の「なり」（体言の省略 +）助詞 ↓打消

「ぞ・なむ・や・か」 … 「ぬ（連体形）」 ↓ 打消

連用形 + 「ぬ」。 ↓ 完了

連用形 + 「ぬ」 + 推量系の助動詞 ↓ 強意

10

☆「べし」

推量（…ダロウ、…ニチガイナイ）
意思（…ウ、…ヨウ、…スルツモリダ）
可能（…デキル）
当然（…シナケレバナラナイ、…スベキダ）
命令（…セヨ、…シロ）
適当・勧誘（…スルノガヨイ、…シタラドウカ）
予定（…スルコトニナッテイル）

11

「竹芝寺」ワークシート

12

「竹芝寺」ワークシート

☆「皇女」と「をのこ」の立場の違いを考えてみよう！

「皇女」

「をのこ」

☆「をのこ」が独り言を言っていたのはなぜだろう？

☆「皇女」の「我率て行きて見せよ。」に込められた思いを考えてみよう！

☆「をのこ」の行動のすごさを考えてみよう！

〈文法のまとめ〉

☆「つる」

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」

・「つる」 ← 連用形接続の完了・強意・並列の助動詞「つ」の連体形

←完了の助動詞「つる」の連体形

☆「らむ」

輪なく人追ひて来らむと思ひて、

現在推量の助動詞「らむ」

「らむ」

完了の助動詞「り」の未然形の「さら」＋推量の助動詞「む」

終止形・ラ変の連体形 ＋ 「らむ」 → 現在推量

サ変の未然形・四段の已然形 ＋ 「ら」 ＋ 「む」 → 完了＋推量

＊「む」は推量以外の意思・婉曲などのこともある

←現在推量の助動詞「らむ」の接続は終止形かラ変の連体形→「来」は「ク」と読む。

参考資料〈『枕草子』百四十二段〉

なほめでたきこと、臨時の祭ばかりのことにかあらむ。試楽もいとをかし。

春は、空のけしきのどかにうらうらとあるに、清涼殿の御前に、掃部司の、畳を敷きて、使は北向きに、舞人は御前の方に向きて、これらはひがおぼえにもあらん、所の衆どもの、衝重とりて、前どもに据ゑわたしたる。陪従も、その庭ばかりは御前にて出で入るぞかし。公卿・殿上人、かはりがはり盃とりて、はてには屋久貝といふ物して飲みて立つ、すなはち、とりばみといふもの、男などのせんだにいとうたてあるを、御前には、女ぞ出でてとりける。おもいかけず、人あらむとも知らぬ火焼屋より、にはかに出でて、おほくとらむとさわぐものは、なかなかうちこぼしあつかふほどに、軽らかにふととりて往ぬる者には、おとりて、かしこき納殿には火焼屋をして、とり入るこそいとをかしけれ。掃部司の者ども、畳とるやおそしと、主殿寮の官人、手ごとに箒とりてすなごゝ咏らす。

承香殿の前ほどに、笛吹き立て拍子うちて遊ぶを、とく出で来なんと待つに、有度浜うたひて、竹の籬のもとにあゆみ出でて、御琴うちたるほど、ただいかにせんとぞおぼゆるや。一の舞の、いとうるはしう袖をあはせて、半臂の緒つくろひ、冠、衣の領など、手もやまずつくろひて、「あやもなきこま山」などうたひて舞ひたるは、すべて、まことにいみじうめでたし。

大輪など舞ふは、日一日見るともあくまじきを、果てぬる、いとくちをしけれど、またあべしと思へば頼もしきを、御琴かきかへして、このたびは、やがて竹のうしろより舞ひ出でたるさまどもは、いみじうこそあれ。掾練のつや、下襲などのみだれあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いでさらに、いへば世のつねなり。

このたびは、・・・

火焼屋に勤めるものの身分の低さを表している。

竹芝寺→このように身分の低いもののもとへ行く皇女の愛の深さ！

身分を越えた恋愛を描いている！

「竹芝寺」ワークシート

本文現代語訳対応版（第二段）

帝と皇后は、姫が姿を消しなさってしまったとひどく心配し、お探しになると、

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、

「武蔵の国の衙士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げていった。」

「武蔵の国の衙士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひっかけて飛ぶように逃げていった。」

と（ある者が）申し出て（来たので）、この男を捜してみるといなかった。

と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。

まちがいなく故郷の国に帰って行っているだろうと、朝廷から使者が下って、追いかけてみるのだが、

論なくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、

勢田の橋がこわれて行きつづけることができない。

勢多の橋こほれて、え行きやらず。

三か月という日数で武蔵の国に到着して、この男を探すと、この姫宮は朝廷からの使者をお呼びになって、

三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをのこ尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、

「私はそうなるはずの因縁であったのだろうか、この男の家が見たくて、

「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、

連れて行けと言ったので（男は私を）連れて逃げてしまったのだ。たいそうここは住みやすく思われる。

率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。

もしこの男が罪せられ、ひどいめにあわせられるならば、私はどうしているというのか。

このをのこ罪し掠ぜられば、我はいかであれと。

これも前世でこの国に住みつくはずの因縁があったのであろう。

これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。

早く郷に帰って朝廷にこのことを奏上しなさい。」とおっしゃったので、

はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」と仰せられければ、

（使者は）言いようもなくて、（都に）上って、帝に、このようであったと奏上したところ、

言わむ方なくて、上りて、帝に、かくなむありつると奏しければ、

（帝は）「いたしかたない。もし、その男を処罰したとしても、今（となって）はこの姫宮を取り返して、

「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、

都に返し申し上げることもできない。竹芝の男に、生きているかぎり終身、

都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、

武蔵の国を預り与えて、租税や労役なども免除することはやらせまい。

武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせじ。

ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばす」旨の宮旨が下ったので、

ただ、宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よしの宣旨下りにければ、

（男が）この家を内裏のごとく造って住まわせ申し上げた家を、

この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、

姫宮などがおとくなりになったので、寺としたのを、竹芝寺というのである。

宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。

その姫宮が生みなさった子どもたちは、（親の領国の名を）そのままとって武蔵という姓を得て、ここに住んだ（ということだ）。

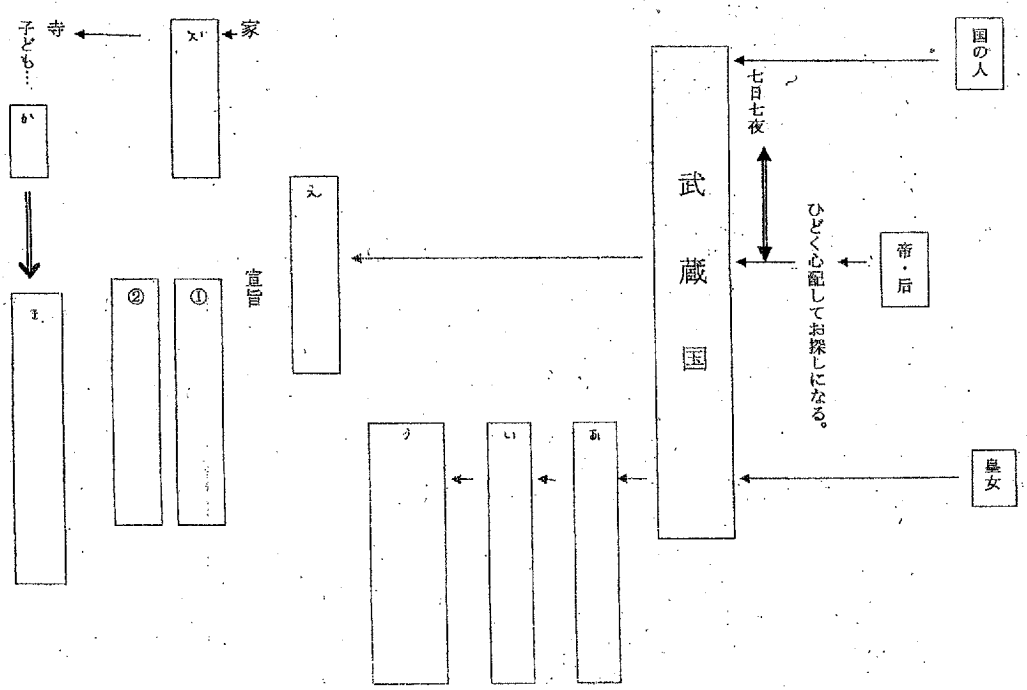
その宮の生み給へる子ども皆、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。

それより後、火焚屋には（男はおかず）女が詰めているそうだ。

それより後、火焚屋に女は居るなり。

17

「竹芝寺」ワークシート



18

〈文法のまとめ〉

① 帝・后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、

打消の助動詞「ず」の連体形

「ぬ」

完了の助動詞「ぬ」

未然形＋「ぬ」→打消　（「ぞ・なむ・や・か・こそ」の結びも打消）

連用形＋「ぬ」→完了

② 論なくもとの国にこそ行くらめと、

「こそ」・・・已然形 ——→ 「強意」を表す係り結び

A文法のチェック√

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。

国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、

御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。

わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、

南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、

西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」と、

独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、

ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧ずるに、

このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、いかなるひさごの、

いかになびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、

御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち帝れ。」と召しければ、

かしこまりて蔦櫚のつらに参りたりければ、

「言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、

酒壺のことを、いま一かへり申しければ、

「我率て行きて見せよ。さ言うやうあり。」と仰せられければ、

かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、負ひ奉りて下るに、

論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のもとに、

この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこぼちて、それを飛び越えて、

この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、

「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げける。」

と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。

論なくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、

勢多の橋こぼれて、え行きやらず。

三月といふに武蔵の国に行き着きて、このをのこ尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、

「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、

率て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。

このをのこ罪し掠ぜられば、我はいかであれど。

これも前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。

はや帰りておほやけにこのよしを奏せよ。」と仰せられければ、

言ねむ方なくて、上りて、帝に、かくなむありつると奏しければ、

「言ふかひなし。そのをのこを罪しても、今はこの宮を取り返し、

都に返し奉るべきにもあらず。竹芝のをのこに、生けちむ世のかぎり、

武蔵の国を預けとらせて、おほやけ事もなさせじ。

ただ、宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よしの宣旨下りにければ、

この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける家を、

宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふなり。

その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむありける。

それより後、火焚屋に女は居るなり。

以上、ワークシートについてはＢ４のものを縮小印刷。

第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料

第１時間目

Ｓ１	「礼。」
Ｔ	「じゃあ、事前学習プリントから集めてください。事前学習プリント。」(回収)
	「はい。じゃあ漢字テストから行きます。」(漢字テスト)
	「はい、じゃあそろそろ集めてください。」(回収)
Ｓ２	「古文の事前学習プリント集めんでいいんですか？」
Ｔ	「あ、古文のもあるの？じゃあ、古文の事前学習プリントも集めてください。」(回収)
	「はい、じゃあ次は古文の単語テストです。」(単語テスト)
	「まだ時間のいる人はいますか？」
	「じゃあ、いなかったら集めてください。」(回収)
	「はい。これ、次の事前学習プリントなんで配ります。」
Ｓ３	「先生、ここ２枚よ。」
Ｓ２	「竹芝寺。」
Ｔ	「はい。じゃあ教科書の２４８ページを開いてください。竹芝寺をこれから１週間やっていくんですが、これについて何か知っていることがあれば言ってください。Ｓ２くん。」
Ｓ２	「お寺である。」
Ｔ	「お寺である。ああ、お寺である。はい。これ、何物語の中に載ってあるか、あ、何物語じゃないや。」
Ｓ２	「竹取物語！」
Ｔ	「竹取物語じゃないや。じゃあ、どこに載っているかを便覧で調べてみてもらえますか。竹芝寺について。」
Ｓ２	「Ｓ４何ページ？」
Ｓ４	「待って待って、落ち着こう、落ち着こう！」
Ｓ２	「お前がはよ見つけんけぇ村上陽一郎が出てきたしまったやろうが！」
Ｔ	「竹芝寺は更級日記に載ってるんですよね。」
Ｓ４	「さが？」
Ｔ	「さらしなにっき。ら。」
Ｓ２	「更級日記じゃいよんよ。更科が書いた日記じゃい。」
Ｓ４	「どこに書いてあるん？１１５？」
Ｓ２	「そう１１５。おれんが速かった！」
Ｓ４	「あんた今言わんかったじゃん。」

Ｓ２　「ほら、１１５。俺もう開いとるもん。」
Ｓ４　「嘘いいな。」
Ｓ２　「ほんまよ。ぱっと開いたら土佐日記と蜻蛉日記がでた！」
Ｔ　「はい。１１５ページね。いいですか。じゃあ、えっと１１５ページを見て作者は誰でしょう？はいＳ２くん次の人。」
Ｓ２　「Ｓ４さん。」
Ｔ　「はい、じゃあＳ４さん。」
Ｓ４　「竹芝寺？作者は～菅原孝標女。え、これ女もいるん？」
Ｔ　「そうそう、女もいるよ。」
Ｓ４　「むすめさん？むすめさん？」
Ｔ　「そう、むすめさん。いいですか、それじゃあ成立はいつでしょう？次の人。」
Ｓ４　「じゃあＳ５さんで。」
Ｔ　「はい、じゃあＳ５さん。」
Ｓ５　「言わんといけんの？１０６０年。」
Ｔ　「はい。１０６０年ごろですね。」
Ｓ５　「次の人当てていいですか？」
Ｔ　「はい。じゃあ下のところに地図があるよね。その地図の中から竹芝寺を探して場所をみんなに教えてあげてください。じゃあ次の人当てて。」
Ｓ５　「Ｓ６さん！」
Ｔ　「はい、じゃＳ６さん。ありました？」
Ｓ４　「あすだ河のとこ。」
Ｓ２　「あすだ河ってどこですか？」
Ｓ４　「右上のほう。」
Ｓ６　「武蔵のところ。」
Ｔ　「みんなわかりましたか？右上のところ。じゃあ、竹芝寺っていうのはこの辺りにあったんだってことを覚えておいてください。後で使うので。はいじゃあ教科書に戻ってください。」
「教科書。はい。えっと今回は予告していた通り文法を中心にやっていこうと思います。それでですね、文法のプリントがさっき配った中に入っているので、それを使いながら文法を考えていきましょう。」
「えー意味のほうはプリントを配ったものの２枚目のほうに訳を書いたものが入っているので、それを使って読んで言ってください。で、１枚目のほうに説明した文法を書き込んでいくようにしてください。いいか。はい、じゃあえっとね、まず全体を読むので聞いてください。第１段を読むので。」
(範読)
「じゃあ、次に全員で読んでいきます。せーので読みますよ。はい、せーの。」

（斉読→ばらばらにならないように教師も大きい声で読み、ペースを作る）

S７　「ちょっと長いですよ。」

T　「ちょっと長いかな。」

S７　「これの３分の１でいいですよ。」

S４　「なぬか？」

T　「そう、なぬか。もうちょっと短いほうがいい？」

S７　「うん。短いほうがいい。意味を考えながら読むどころじゃない。」

T　「意味考えられんかな。今回は意味が考えられるように文法を中心にどういう意味で読んでいくかをやっていくから。今回の文法が終わったあとで、本文訳が書いてあるプリントがあるよね。それを読んで全体の流れは１度つかんでおいてください。」

「じゃあ、えっと「これはいにしへ竹芝のさかなり」っていうところがあるよね。これ練習ね。文法のまとめの最初のところを見ると「なり」についてまとめている、わかりますか？はい、じゃあそれを見てこの「なり」って言うのがどういう「なり」か、どういう意味の「なり」かって言うのを説明してみてください。じゃ次の人をあててください。」

S６　「Ｓ７さん。」

T　「はい、じゃあＳ７さん。」

S７　「これの口語訳でございますか？」

T　「うん、さかなりの「なり」。」

S７　「である。」

T　「そう、である。なんだけど、文法的な意味があるよね。伝聞推定とか、断定とか、存在とか、そういうのがあるよね。そういうのはどういう意味になるかな。」

S７　「ああ、えっと断定。」

T　「うん。断定。それはどうやって判断した？」

S７　「あの、前後の文章で。」

T　「ん、んっとね・・・」

S７　「どうやって答えればいいんですか？」

T　「この文法のまとめのプリントを見てもらうとわかるんだけど、「なり」の中で助動詞のものは終止形かラ変の連体形につくときは伝聞か推定になるって書いてるでしょ。体言か連体形につくと断定か存在になるのね。じゃあ「さか」っていうのは何かな？」

S７　「さかですね。」

T　「坂ですよね。」

S２　「坂って上り坂よ。」

T　「そう。その坂ね。」

S７	「体言。」
S４	「なんでひらがななん？」
S２	「漢字がなかったの。」
T	「体言だから。「なり」は・・・」
S７	「体言だから、断定か存在だけれど・・・」
T	「はい。体言だから断定か存在だけれど？はい、断定か存在になるよね。」
S４	「この連体形はなんなん？」
T	「だから連体形は、ここが連体形のときも断定か存在になるの。一緒でしょ。」 「っていう風にこの文法のプリントを使ってこれから判別をしていきましょう。はい。いいですか。」
S４	「これ１枚目に書き込むん？」
T	「そうそう。１枚目に書き込んで。２枚目は後で読むやつ。はい。じゃあね、ワークシートのほうで言うよ。」
S４	「ワークシート？」
T	「うん。ワークシートのね、本文があるでしょ。その３行目「などや苦しき目をみるらむ」っていうのがありますね。「などや苦しき目をみるらむ」ってやつは、えっと今までに習ったことのある文法事項がひとつ入っています。それはなんでしょう？じゃ次の人を当ててください。」
S７	「１回あたった人は？」
T	「別にかまわないけどできるだけ違う人を当てて。」
S７	「じゃあ、Ｓ５さん。」
S５	「なんでまたあてるんよ。」
S７	「まぁまぁ、読んでください。」
T	「Ｓ５さん、Ｓ５さん。なんでしょう？」
S５	「え、「や」が答えなんじゃないん？」(板書に「や」を赤線で示して誘導していたため)
T	「「や」がくるとどういうことが起きますか。」
S５	「質問の意味がわかりません。」
T	「質問の意味がわからん？」
S７	「けんか腰じゃね。」(Ｓ５に対して)
S５	「だってわからんのんじゃもん。」
T	「「などや」のね、「や」とか「ぞ」とか、「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」っていうのがね、くると係り結びって言うのが起きますよね。覚えてますか。」
S５	「ああ、前回のやつじゃなくってね。」
S７	「けんか腰にせんのよ。」
S５	「わかったって。」

T	「「や」と「か」って言うのは、「や」「か」は疑問と反語を表す係助詞になります。」
S５	「「や」「か」か。」
T	「いいですか。疑問、反語を表す、うん、係り結び。ここが、「らむ」は終止形じゃないよね。「らむ」、「らむ」は終止形じゃないよね。係り結びで「ぞ」「なむ」「や」「か」っていうのがきた時は、結びが連体形になりますよね。それが係り結びです。で。」
S５	「「や」がきたら「らむ」が連体形なん？」
S２	「「らむ」は連体形じゃん！」
S５	「そうなん。「らむ」だけ？どっちになるん？」
S７	「あとはならんらしい。その２つのどっちからしい。」
S５	「わからんのん？」
S７	「今からチョイスするらしい。」
T	「はい。」
S５	「チョイスは違うじゃろ。」
S７	「チョイス！」
T	「特に「や」と「など」がくっつくと疑問。疑問の意味になります。」 （ざわつく）
T	「はい。いいですか。疑問の意味になります。はい。じゃ、で、このときの「らむ」またこれは助動詞なんですけど。」
S４	「「や」「か」は疑問と反語なんじゃろ？「など」と「や」がついたら疑問なん？」
S１	「「など」と「や」がついたら疑問なんよ。」
S４	「２つでひとつ？」
S１	「２つでひとつ。」
S４	「え、じゃあ「など」と「か」がついたらどうなるん？」
T	「「などか」？」
S４	「うん。」
S４	「え、ていうか「など」たす「や」は疑問なんじゃろ。「か」たす「など」だったらなんなん？」
T	「「か」たす「など」？」
S２	「「か」はカズキの「か」じゃ！」 （笑い）
S４	「「など」はなんなん？」
T	「「など」は副詞でしょ。で、「や」は係助詞。で、２つをあわせて「などや」になると疑問の意味になるんね。」
S４	「「か」は？」
T	「「か」は別の使われ方するから、これは、このときに疑問になるだけで、「や」が

普通に別の使われ方をすると反語の意味になったりもする。はい、じゃ「らむ」これも助動詞なんですがこの「らむ」はどういう意味でしょう？じゃあ、Ｓ５さん次の人を当ててください。」

Ｓ５　「・・・」(誰に当てるか悩んでいる様子)

Ｔ　「Ｓ５さん。」

Ｓ５　「Ｓ６さん。」

Ｓ７　「戻った！」

Ｓ６　「「らむ」？」

Ｔ　「「らむ」はプリントの、えっとね、次のページの上に書いてます。」

Ｓ７　「次のページ？」

Ｔ　「うん。えっとね、１枚めくって上。」

Ｓ６　「意味ですか？」

Ｔ　「はい。」

Ｓ６　「だろうか。」

Ｔ　「あ、さっきみたいにね、文法的な意味を言ってもらいたいんね。」

Ｓ６　「「だろうか」はね。現在推量。」

Ｔ　「はい、そうです。現在推量。で、現在推量なんだけど、なんで現在推量になりますか？その上の形を見てこれを判断するんね。」

Ｓ６　「ラ変の連体形、終止形！」

Ｔ　「はい、「見る」が終止形なんですね。「見る」が終止形だから「らむ」が現在推量になります。いいですか。」

「はい。じゃあ、次、５行目のところの「ば」について考えていこうと思います。「ば」ね。次を当ててください。」

Ｓ６　「Ｓ８さん。」

Ｔ　「はい、じゃあＳ８さん。「ば」は。」

Ｓ８　「「ば」？」

Ｔ　「うん。１枚目のほうの下のほうの右端に載ってるんだけど、未然形とくっつくと仮定の意味になるんよね。で、已然形とくっつくと原因理由とかつながりとかそういうものを表すんですけど、これを「順接の確定条件」っていう風にいいます。じゃあ、ここは何形かわかりますか？」

Ｓ８　「・・・」

Ｔ　「「吹けば」の「吹け」。」

Ｓ８　「・・・」

Ｔ　「じゃあ、ちょっと辞書引いてみて。」

「「吹け」っていうのは何形になるかな？」

(ざわついてくる)

「はい。いいですか。ここは「吹け」っていうのは已然形か命令形なんですけれども、「ば」は未然形か已然形につくんですよね。いい？だから「吹け」は已然形ね。已然形なので「ば」は順接の確定条件になります。」

S４　「先生めっちゃ曲がってます。」

T　「すいません。」

T　「順接の確定条件は已然形だから順接の確定条件っていうのになるのね。」

S２　「難しい言葉っすね。」

T　「うん。その原因理由とかっていうのを順接の確定条件って言うの。」

S４　「原因理由と違うん？」

T　「それとかをまとめて順接確定条件って言う言い方をするの。」

S７　「順接確定条件の意味がわかりません。」

T　「それは、えっと、順接確定条件は「～すると必ず」とかそういう風に訳します。」

S７　「訳す条件ってことですか？」

T　「ん？訳す条件じゃなくって、順接って言うのはそのまま続けるでしょ。逆説って言うのは逆の意味になるでしょ。」

S７　「わかりません。」

T　「わからん？」

S７　「え、「ば」はどういう役割をしとるんですか？」

T　「これになると、順接の確定条件って言うのになると「南風が吹いたら北になびいて」っていう風に「南風が吹く」っていうのが「北になびく」っていいうのの理由になるのね。」

S７　「理由を。」

T　「原因、理由やね。えっと、こっち側が南風が吹くとっていうことが原因になって、北になびくっていうのが結果だよね。っていう風な関係になることを順接の確定条件。」

S７　「それは、その「ば」さんは。」

T　「はい。」

S７　「已然にしかつかんってことですよね？」

T　「已然形のときは順接の確定条件。」

S７　「「ば」が已然についた場合には、順接の確定条件が成立するって事ですか？」

T　「そう。未然だったら仮定形。」

S７　「仮定形。もしも～ならば。」

T　「そうね。ならばだったら、そうだったらっていう風になるでしょ。」

S７　「ならばだったら、そうだったら。」

T　「「吹けば」でしょ？「け」は已然形でしょ？だから、こうなったらこうっていいう風に。」

S７	「「ば」が已然についたら。」
T	「已然についたら順接確定条件ね。」
S７	「順接確定・・・なんだっけ？」
T	「順接確定条件。」
S１	「已然形だったら、順接確定条件が成立して未然形だったら仮定になる。」
S７	「それはどこに書いてあるんですか？」
T	「えっとね、文法のやつの已然形＋「ば」が原因理由、偶然的なつながり、必然的なつながりって書いてるよね。その原因理由とか偶然的なつながりとか必然的なつながりっていうのをまとめて順接確定条件っていう風にいうので、それを書いといてください。」 (チャイム) 「じゃあ、終わっちゃったんで、次はこの続きからやるので、できれば家でこの文法の見方を練習してきてください。じゃあ、終わります。」
S１	「起立。礼。」

第２時間目

T	「じゃあ始めます。号令お願いします。」
S１	「礼。」(号令)
T	「提出物を前に取りに来てください。Ｓ１、Ｓ２、・・・」(返却)
	「はい、じゃあ事前学習プリントを後ろから集めてきてください。」(回収)
	「じゃあ、今日の単語テストを始めます。」(単語テストを行う)
	「まだ時間がいる人はいますか？では集めてきてください。」(回収)
	「はい、じゃあ次の事前学習プリントを配ります。」(配布)
	「教科書の 248 ページを開けてください。はい。じゃあ、昨日の続きなんですが、昨日の本文を書いたプリントを出してください。」
	「東吹けば西になびくを見で、って所があるんですが、ここの「見で」ってところが否定を表しています。これを便覧で確認してみてください。」(確認)
	「便覧の助詞「で」のところを探してみてください。」
Ｓ２	「便覧のなんって言いました？」
T	「便覧の助詞一覧のところで探してみてください。」(探す)
	「422 ページ。ありますよね。真ん中の真ん中の辺り、接続助詞の「で」。」
Ｓ２	「真ん中の真ん中？」
Ｓ３	「どこって？」
T	「422 ページの真ん中の真ん中、接続助詞の「で」のところです。」
	(生徒、見つける)
	「打消し接続で「～ないで」とか「～ずに」という風に訳します。」
	「チェックしましたか？いいですか？じゃあ、チェックしたら次は竹芝寺ワークシートの最後の行、「いかになびくならむ」というところがありますよね。」
	(生徒、ワークシートを開く)
	「ここは「なら」が断定の助動詞、「む」が推量の助動詞になります。」
	(生徒、書く)
	「はい。じゃあ、ワークシートの下の段、１行目、２行目、３行目、４行目、５行目の最後の所、全部「ければ」になってますよね。」
Ｓ４	「１行目、２行目、３行目、４行目、５行目？」
T	「５行連続で最後が「ければ」になってるよね。これは昨日言った已然形＋「ば」ってやつだよね。已然形＋「ば」はどういう意味になるか覚えていますか？昨日最後に当たったのは誰だったかね？」
Ｓ３	「はいはいはいはい。」
T	「じゃあ、誰かあててください。」
Ｓ３	「Ｓ５さん。」

T	「はい、じゃあＳ５さん。」
Ｓ５	「已然形＋「ば」？」
T	「文法のプリントのね、１枚目の下の段の最初。」
Ｓ５	「順接確定条件。」
T	「はい、順接確定条件になります。」
Ｓ２	「あ、そうかー。」
T	「はい、順接確定条件になります。昨日の復習なんでいいですね、ここは。」
Ｓ２	「昨日の復習なんですか？違うところですよね？一緒の使い方ってことですか？」
T	「そうそう。」 （生徒、書く） 「いいですか。」
Ｓ２	「已然形＋「ば」っていうのはあれですか？訳し方を覚えるんじゃなくて順接確定条件って言うのを覚えるんですか？」
T	「已然形＋「ば」だったら順接確定条件。訳せっていうときと、文法を見るときがあるから両方覚えて。」
Ｓ２	「じゃあ、訳せって言われたらどうするんですか？」
T	「だから上でやったように、「南風吹けば北になびき」だったら、「南風が吹いたら北になびいて」、っていう風に訳すでしょ。だから、上が原因になって下が結果になるように訳すんです。下の段の１行目だったら「召しければかしこまりて」でしょ。そしたら、「およびになったらかしこまって」っていう風に原因と理由の関係で訳すんです。」
Ｓ２	「上原因、下結果ね。」
T	「はい。じゃあ、最後から３行目のところ。「論なく人追ひてくらむとおもひて」って所があるんですが、今日のプリントの２枚目のところに昨日のプリントがちょっとわかりにくかったので、文法「らむ」のところをわかりやすく書いていますので、そこを見てもらって考えてもらいたいんです。この「らむ」は現在推量の「らむ」なんですよね。で、現在推量の「らむ」のときは何が上につくって書いてますか？じゃあ、あててください。」
Ｓ５	「Ｓ６くん。」
T	「はい、じゃあＳ６くん。」
Ｓ６	「「らむ」っすか？」
T	「はい。現在推量の「らむ」。」
Ｓ６	「終止形かラ変の連体形。」
T	「そうですね。終止形かラ変の連体形ですよね。で、ここのこれ。１字ですよね。「来」の字。これは何活用だったか誰か覚えてますか？じゃあ、あててください。」
Ｓ６	「Ｓ７さん。」

T	「はい。じゃあ、Ｓ７さん。」
Ｓ７	「ん～？」
T	「わからなかったら辞書引いて。」
Ｓ７	「ラ変？」
T	「ラ変じゃないよ。」
Ｓ７	「カ変！」
T	「そう！カ変ね。じゃあ、カ変の活用表を言ってください。次。」
Ｓ７	「Ｓ４さん。」
Ｓ４	「こ、き、く、くる、くれ、こよ。」
T	「じゃあ、現在推量は上にラ変の連体形か終止形がつくよね。これはカ変だから終止形になって、「くらむ」になるよね。」
Ｓ４	「え、なんで連体形じゃないん？」
T	「ラ変だけ連体形であとは終止形なんよ。」
Ｓ４	「ラ変だけ連体形なんや。」
T	「うん。そうやね。」
	「できましたか？じゃ、文法はもういいでしょう。では、本文の方にはいっていきましょう。昨日配った本文の訳のついているプリントのほうを出してください。訳を読んでいってください。Ｓ４さん、あてて。」
Ｓ４	「Ｓ８くん。」
T	「じゃあ、読んで。」
Ｓ４	「どこ？」
T	「口語訳のプリント。」
	（Ｓ８、音読。以下読みを間違えたり詰まったりした時はその場で指導。）
T	「じゃ、次。」
Ｓ８	「Ｓ９くん。」
	（Ｓ９、音読）
T	「じゃ、次。」
Ｓ９	「Ｓ１さん。」
	（Ｓ１、音読）
T	「はい、ありがとうございます。はい、じゃあ、今日配ったワークシートを出してください。まず、第１段のところには国の人と皇女の２人が出てきますよね。２人の行動を読んで行こうと思うんですが、国の人は火焚屋の衛士になって、御前の庭で何をしていたでしょう？次の人。」
Ｓ１	「Ｓ３さん。」
Ｓ３	「御前の庭を掃いていた。」
T	「はい、それで庭を掃いていて独り言を言っていましたよね。何といっていました

か？次の人。」

S３　「Ｓ１０さん。」

Ｓ１０　「などや苦しき目を見るらむ。わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」

T　「はい、こういう風に言っていますよね。このときに皇女はこれを聞いてどういう風に思ってますか。次の人。」

Ｓ１０　「Ｓ１１さん。」

Ｓ１１　「非常に見たい。」

T　「そうですね。非常に見たい、と興味深くお思いになっていますよね。それで皇女は国の人に対して興味深く思ったから何と言ってますか？次の人。」

Ｓ１１　「Ｓ１２さん。」

Ｓ１２　「こっちへ来いと言っている。」

T　「そうですね。こっちに来いと言っていますね。そしてもう１度言ってくれといっていますね。」

Ｓ２　「え～ちょっと待って、読めん。」

T　「今言ったことをもう１度言って聞かせなさいっていってるんよ。」

Ｓ２　「どうしても「言う」が読めんかった。」

T　「すいません。ちょっと汚かったね。」(板書を書き直す)

Ｓ２　「無理はいけませんよ。」(笑い)

T　「はい。それを受けて国の人はもう１度話してますね。そうしたら、もう１度話したら皇女が何か言っているんですが、それは何といっていますか？次の人。」

Ｓ１２　「Ｓ１３さん。」

Ｓ１３　「私を連れて行って。」

T　「そうね、私を連れて行って見せなさい。そして、そういうだけの理由があるのでしょう、って言ってますね。そしたら書けなくなったから向うに書くね。それに対して衛士は、国の人はどういう風に思ってますか？次の人。」

Ｓ１３　「Ｓ２さん。」

T　「はい、Ｓ２さん。」

Ｓ２　「あのー、言葉？」

T　「はい。」

Ｓ２　「どういうこと？」

T　「私を連れて行ってって言う皇女に対してをのこはどういう風に思ってますか？」

Ｓ２　「恐れ多く恐ろしい。」

T　「そうですね。それでこう思った後にもう一回思いなおしてるよね。それはなんていって思い直していますか？次の人。」

S２	「S３さん。」
S３	「・・・」
T	「本文をそのまま読んでください。」
S３	「小さい字のほう？大きい字のほう？」
T	「大きい字のほうだよ。」
S３	「論無く人追ひてくらむとおもひて。」
T	「それをね、思う前にかしこくおそろしと思いけれどってなって、思ってるよね。」
S３	「なんで？」
T	「かしこしおそろしって思ったけど、何とかって思ってるよね？」
S３	「背負ったんじゃないん？」
S１３	（S３に対して）「そうなるはずの因縁だったって思っとるやん。」
T	「そこなんだけどいいですか。」 （S１３のS３に対する説明、続く）
T	「ちょっと聞いてね。かしこしおそろしと思ってるんだけど、さるべきにやありけむって、そうなる因縁があったんだって思い直してるよね。そうじゃなかったらそのまま皇女を連れて帰ったりしないよね。だから次のカッコには「さるべきにやありけむ」が入るよ。」 （S３、まだわからない表情）
T	「１回ね、１回恐れ多いって思った後に思いなおして皇女を連れて行ったんだよね。」
S３	「じゃあ、さっき私が言ったところは入らんのんですか？」
T	「うん。そこはここにはいるんだよね。それもここのところで思っとんじゃけどね。という風にして全部埋まりましたか？」
S２	「先生。なんでここだけ日本語じゃないん？」 （笑い）
T	「あ、なんでここだけ口語じゃないか？それは後から同じ台詞が出てくるからここだけ変えてるんよ。」
S３	「じゃあ、日本語でもいいん？」
T	「いいけど書くときは「さるべきにやありけむ」って書いといて。じゃあ、ぬいぐるみを使って皇女とをのこについて説明しましょう。」 （うさぎとドラえもんのぬいぐるみを出す）
S３	「かわいい～！」
S２	「ウサギがほしい！」
S３	「ドラえもんがほしい！」
T	「はい。いいですか。こいつドラえもんがをのこでウサギが皇女ね。こいつ「をのこ」が掃除しながら独り言をいいよったんね。そしたら皇女がそれを大変興味深く思ったんね。それで今言ったことをもう一度言いなさいってこいつに言うの

ね。」

S３　「ドラえもんに？」

T　「そう。そうしたらこいつがもう１回話すの、皇女に。話したら皇女が私を連れて行きなさい、そんな風にひさごが揺れているっていう風なことを言うのには何かわけがあるのだろうっていうのね。そしたらこの人は恐れ多く恐ろしいって思うんね。この人天皇の娘だから偉い人だからね、すごく。このドラえもんはあんまり身分が高い人じゃないから、恐れ多いって思うんだけれど、連れて行ってって言うからには何かわけがあるんだろうって思って、こうおんぶして連れて行きましたよって、これが第１段。」

「はい。じゃあ、今回は時間がもう無いからこのくらいで終わります。次回は皇女とをのこの立場について考えて、皇女が「我率て行きて見せよ」っていう風に言ったこと、「さるべきにやありけむ」って考えたことについて考えてみたいと思います。じゃあ終わります。」

S１　「礼。」

第３時間目

Ｓ１	「礼。」
Ｔ	「じゃあ、提出物を返します。Ｓ２さん、Ｓ３さん・・・」(返却)
Ｓ２	「先生、ここ見えにくいけん。前行ってもいい？」
Ｔ	「いいよ。はい。じゃあ、恒例の漢字テスト、じゃないや単語テストからいきます。あと提出物がある人は前に持ってきてください。」
	「じゃあ、配りますよ。」(単語テスト)
	「いいですか？まだ時間いる人？じゃ集めてください。」(回収)
	「はい。じゃ次の事前学習プリントです。」
Ｓ３	「いつですか？」
Ｔ	「月曜日。」
	「じゃ、前回の授業で配ったワークシートを出してください。いいですか。全体の流れのプリント。それと教科書の２４８ページを開いてください。」
	「いいですか。ワークシートを前回完成させたんですが、まず・・・(ぬいぐるみを出して)国の人が庭を掃除しながら独り言を言ってます。「どうしてこんな辛い目にあうのだろうか」って独り言を言っていたら、この皇女が興味深く思って「もう１度言いなさい」って言って、「私を連れて行きなさい」って言ってるよね。あ、をのこがもう１回言って、「私を連れて行きなさい」って言ってるよね。そうしたら、はじめをのこは「恐れ多くも恐ろしい」って思ったんですが、その後でもう１度思い直して武蔵国に皇女をおんぶして連れて行ったんですね。今日は、」
Ｓ４	「「恐れ多くも恐ろしい」ってどういう意味なん？」
Ｔ	「んー、たとえばＳ４さんが芸能人と急にデートすることになってどう思いますか？」
Ｓ４	「どうしようって思う。」
Ｔ	「じゃろ。いいんかな？って思っちゃうよね。そういう感じかな。」
	「はい。えっとじゃあ、教科書を読んでワークシートの下のほう、１枚目の下のほうにある「皇女とをのこの立場の違いを考えてみよう」のところからやっていきたいと思います。はい。じゃあ、皇女とをのこどちらでもいいので、その立場がわかるところが１段の始めの方に書いてあるところがあるからそこから抜き出して答えてください。昨日の最後は誰やったかね？」
Ｓ５	「はい。」
Ｔ	「じゃ、誰かあててください。」
Ｓ５	「Ｓ２さん。」
Ｔ	「はい、じゃＳ２さん。答えてください。違いじゃなくてもいいから、皇女の立場、をのこの立場がわかるところを答えてください。」

Ｓ２	「帝の御娘。」
Ｔ	「そうですね、帝の御娘である。帝の御娘でどうされていましたか？」
Ｓ２	「たいそう大切にされていた。」
Ｔ	「はい、帝に大切にされている。次の人。」
Ｓ２	「Ｓ６さん。」
Ｓ６	「・・・」
Ｔ	「をのこでも、皇女でもいいから何か身分のわかるところはないかな？」
Ｓ６	「身分が高い。」
Ｔ	「そうね。天皇の娘だから身分が高いよね。次の人当ててください。」
Ｓ６	「Ｓ４さん。」
Ｔ	「はい、じゃあＳ４さん。今度はをのこについてわかるところを挙げてみてくれるかな。」
Ｓ４	「身分が低い。」
Ｔ	「そうね。なんで身分が低いってわかった？」
Ｓ４	「掃除しよった。」
Ｔ	「そう。火焚屋で掃除しよったんね。火を焚く衛士って書いてますよね。あとは？次の人。」
Ｓ４	「Ｓ７くん。」
Ｔ	「じゃあＳ７くん、をのこは今どういう状況にあるかな。」
Ｓ７	「状況？」
Ｔ	「状況って言うかね。どういうことをしていますか？」
Ｓ７	「見張り。」
Ｔ	「見張り。これ、まぁ火焚屋の火焚く衛士って言うのは労役だよね。あとね、台詞からわかると思うんだけれども故郷を懐かしんでいる、ね。」
Ｓ５	「先生、字が抜けとる。」
Ｔ	「お、ありがとう。」(訂正) 「だから立場で言うと、(ぬいぐるみを出して)皇女って言うのは天皇にすごく大事にされてて身分が高いですよね。をのこは武蔵国から労役に来ていて身分の低い人です。じゃあ、それを踏まえて２番。☆印のところ「をのこが独り言を言っていたのはなぜだろう」ってところについて考えてみたいと思います。をのこが独り言を言っているんですが、この独り言を読んでみてください。次の人。」
Ｓ７	「Ｓ８くん。」 (Ｓ８、音読)
Ｔ	「はい、ありがとうございます。じゃあ、ここから、ここからって言うのはをのこが独り言を言っていたことからどういうことがわかりますか？次の人。」
Ｓ８	「Ｓ９くん。」

Ｓ９	「火焚屋で火を焚いているのはなんでだろう。」
Ｔ	「じゃあ、次の人当ててください。」
Ｓ９	「Ｓ１０さん。」
Ｓ１０	「仕事が辛い。」
Ｔ	「はい。次の人。」
Ｓ１０	「Ｓ１１さん。」
Ｔ	「自分だったらどんな気持ちかな、って言うのを考えてみて。」
Ｓ１１	「風に吹かれているひさごを見てみたい。」
Ｔ	「そうですね。この風に吹かれているひさごっていうものはみんなにとったら賀茂北高校の風景のようなもので、急になくなってしまうと思い出してみたくなったりするようなものですね。じゃあ、次のかっこの所を見てください。皇女の「我率て行きて見せよ」ということに込められた思いを考えてみようということなんですが、皇女は「我率て行きて見せよ」って言うふうに言っているんですが、さっき言ったとおり皇女はすごく身分が高いんだよね。をのこは皇女から見たらすごく身分が低い人なんだけれども「我率て行きて見せよ」っていうふうに言ったって言うことはどんな思いとか考えがあって言ったんだと思いますか？考えてみてください。」 （２分程時間をとる）
Ｓ１１	「Ｓ１さん。」
Ｓ１	「宮中が退屈なんだろう。」
Ｔ	「じゃ次の人。」
Ｓ１	「Ｓ１３さん。」
Ｓ１３	「宮中に飽きた。」
Ｔ	「当てて。」
Ｓ１３	「Ｓ５さん。」
Ｓ５	「武蔵国を見たいだろうと思って。」
Ｔ	「はい。ほかにはもう無いかな。じゃあ、昨日配ったワークシートの２枚目、２枚目の下の段、『枕草子』が載っているんですが、これは線を引いているところが火焚屋について述べているんですね。ここの場面がどういう場面かといいますと、男たちが宴会を開いているんですね。それでその宴会が終わって残った食べ物を庭にばら撒いて火焚屋の女たちがそれを競って食べているという場面なんですが、って言うくらい火焚屋に勤めている人たちは身分が低かったって言うことを考えておいて欲しいんですけど、そうしたらこういうときにどうでしょう？確かにこういう意味はあるんだよ。(板書を指して)だけど、火焚屋の男の人にたとえば自分がついて行く、ってなると並大抵の決心じゃいけないよね。そういうところから考えると、「我率て行きて見せよ」っていうのは身分の低いをのこの故郷に連れて

行って見せよって言ってるんですけど、ある種の愛の告白だって取ることもできますね。直接好きだって言う風には言ってないんだけれど、こんなに身分が離れていてもあなたのところへ行ってみたいわ、って言うのはある種の愛の告白って言う風に取ることもできます。日本的な表に感情を出さない形の表現なんで、表現っていうかそう取ることもできるっていうことなんで絶対って言うわけじゃないんだけどね。」

「そう考えると、をのこが独り言を言っていましたよね。こんなことをね、いちいち掃除しながら言わなくていいよね。これは、こういう考え方をすればだけど皇女の気を引こうとした言葉って考えれるよね。だから、この人の言ってた「などや苦しきめを見るらむ」ってひさごの話をしていたのは、皇女に対するプロポーズって言う風に捉えることもできます。どうですか？たとえば宮中でめちゃくちゃ身分の高い人を手にいれたいって思ったときに、をのこが考えて取った行動かもしれないですよね。」

「今だったらどうですか？はい、Ｓ５さん。」

Ｓ５　「え！」

Ｔ　「今だったら。」

Ｓ５　「今だったら直よね。」(隣の人に話しかける感じで)

Ｔ　「直接？じゃあ、Ｓ６くんだったら？」

Ｓ６　「直接。」

Ｔ　「じゃ、Ｓ４さんは？」

Ｓ４　「え、直接よね？」

Ｔ　「はい。今は結構みんな直接言うようになってきているんですけれども、例えば、「君の味噌汁が毎朝食べたい」とかね。遠まわしでしょ。」

Ｓ１　「古っ！」

(笑い)

Ｓ４　「結婚するときやん。」

Ｔ　「そう、結婚するとき、プロポーズなんだけど、これね、あなたの国に私は行きたいってすごい身分の高い人がゆっとるんよ。ね。抜け出して駆け落ちしてもいいって言ってるんだから、そういう風にとってもいいかなって思ってください。じゃ最後。をのこの行動のすごさを考えてみようっていうところなんですが、考えていって見ましょう。をのこの行動ですごいな、って思うところがあれば出してみてください。はい、じゃあ当てて。」

Ｓ４　「じゃあＳ１４くん。」

Ｓ１４　「・・・」

Ｔ　「行動の中にも皇女を背負って武蔵国に行く場面があるよね。そこの中で出してみて欲しい。」

Ｓ１４「(をのこが皇女を連れて行く場面を音読)」

Ｔ　「まぁその中で、１個すごい所。」

Ｓ１４「七日七夜のうちに武蔵国に行き着きにけり。」

Ｔ　「これは延喜主形式っていうのによると武蔵国へ下るときは、当時だったら便覧の地図を見たよね。大体１５日くらいかかるっていう風に定められています。っていうことは、これは大体半分くらいで着いているっていうことになります。じゃあ、あと他にすごいなぁっていうところがあるかな？」

Ｓ１４「Ｓ１５さん。」

Ｓ１５「橋を壊した。」

Ｔ　「うん。そうだね。」

Ｓ１５「飛び越えた。」

Ｔ　「勢多の橋を壊して、飛び越えたんね。一間っていうのは教科書の下のところに絵があると思うんだけれどこの橋げたと橋げたの間ね。すごい広い範囲を壊して、で、ここは間違っちゃいけないから確認なんだけど、まぁこっち側から来るよね。で、こう橋を渡って皇女をこう下ろすよね。こうをのこが戻ってぴょんって、わかるかな。」

Ｓ５　「ドラえもん押さえ過ぎ！」(ぬいぐるみを押しつぶしていたから)

Ｔ　「ああ、ごめんごめん。じゃあ、なんで壊したのか。追っ手が来るからだよね。教科書２５０ページの４行目の最後のほう「論なく人追ひてくらむと思ひて」っていうところがありますよね。いうまでも無く人が追ってくる、追っ手が来ると思ったから、時間稼ぎっていうことね。武蔵国に人が追ってこれないように橋を壊して飛び越えて、背負って武蔵国に行った、っていうことになりますね。で、まぁもうひとつすごいところっていうのが「かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ」っていう風に思いながらも思い直して皇女を連れて行くことを決意したって言うところがすごいっていうふうに考えることができます。じゃあ、第１段はこのくらいにして第２段いきます。教科書２５０ページの最後の行から。じゃあ、読むので読みのわからないところやわからない単語があるところをチェックして聞いていてください。」

(第２段範読)

「ね、いいですか？確認できましたか？はいじゃあ次回は第２段のほうを大事な文法だけ確認して内容を取って行きたいと思います。終わります。」

Ｓ１　「起立。礼。」

第４時間目

Ｓ１	「礼。」
Ｔ	「提出物返すんで取りに来てください。Ｓ１さん、・・・」(返却) 「はい。じゃあ、提出物を集めてください。」(回収) 「じゃ、恒例の単語テストです。」 (単語テスト) 「まだできていない人いますか？じゃあ、集めてきてください。」(回収) 「はい、じゃ次の事前学習プリントです。」(配布) 「はい。じゃあ、えっと昨日のワークシートを開いてください。まず、前回やった第１場面の内容を復習したいと思います。ワークシートを人形でやるんで流れを見てください。前回の流れのまとめのところね。(ぬいぐるみを出す)まず国の人が庭を掃いていて独り言を言っています。で、皇女が興味深く思ってもう１度私に言って聞かせなさいっていう風に言ったら、をのこはもう１度皇女にひさごのことを話してあげます。そして、皇女は私を連れて行って見せてください、で、をのこは１度恐れ多く恐ろしいことだって言う風に思ったんですが、やっぱりさるべきにやありけむって思って武蔵国にこう連れて行くってことでしたね。はい、ここで昨日やっていなかったんですが、ここにある「どうしてだろう？」っていう所からやって行きたいと思います。「どうしてだろう？」って言うことなんですが、これは「さるべきにやありけむ」っていうのはどうしてだろうって言うことなんですが、ちょっと考えてみてください。」 (１分程考えさせる) 「いいですか。１度恐れ多く恐ろしいって思ったけど考え直したよね。それがなぜか考えてみてくださいね。はい、じゃ、Ｓ２さん当てて。」
Ｓ２	「Ｓ３さん。」
Ｓ３	「皇女が興味を持ったから。」
Ｔ	「はい。皇女が興味を持ったから。」
Ｓ３	「Ｓ４さん。」
Ｔ	「はい、Ｓ４さん。」
Ｓ４	「・・・」
Ｔ	「じゃあ、もし自分がをのこだったら、自分がをのこの立場だったらどういう理由があったらそういう風に思う？１度、恐れ多く恐ろしいって言う風に思ってるでしょ。それを考え直した。考え直すにはなんか理由があるでしょ？」
Ｓ４	「わかんない。」
Ｔ	「うん、じゃあ、言いますね。昨日のワークシートでも書いたと思うんだけれども、まぁ興味を持ったからって言うのもあるし、皇女が宮中に飽きているんじゃない

かなっていう風なことを考えてかわいそうに思ったっていう風なことが考えられますよね。それとあとは、昨日言っていたようにこれを愛の告白という風にとると、隠された愛の告白っていうものに気づいてそれに応えようとしたからっていう風なことも考えられます。じゃあ、第一段の復習はこのくらいにしておいて第２段に入っていきます。で、読みのほうは昨日１度僕が読んで確認しているんで順番に音読をしていってもらいたいと思います。じゃ、当てて。」

Ｓ４　「Ｓ５さん。」

Ｔ　「はい。Ｓ５さん。」

Ｓ５　「(音読)」

Ｔ　「はい。じゃ次の人。」

Ｓ５　「Ｓ６さん。」

Ｓ６　「(音読)」

Ｔ　「はい、次の人当ててください。」

Ｓ６　「Ｓ７さん。」

Ｓ７　「(音読)」

Ｔ　「はい、次の人。」

Ｓ７　「Ｓ１さん。」

Ｓ１　「(音読)」

Ｔ　「はい。じゃあ、今日配った２枚目のワークシートを開いてください。２枚目のワークシートの下側、見てください。第２段の重要な文法のまとめを最初に２つだけやります。まず、第２段１行目、「帝、后、皇女失せ給ひぬと思し惑ひ」のところ。はい。ここの「ぬ」なんですが、「ぬ」には大きく分けると打ち消しの助動詞の「ず」の連体形のものと、完了の助動詞の「ぬ」があります。打消しの場合は、未然形＋「ぬ」っていう形で、完了の場合は連用形＋「ぬ」っていう形になります。じゃあ、これはどっちの「ぬ」でしょう？じゃあ次の人。」

Ｓ１　「Ｓ８さん。」

Ｔ　「はい、Ｓ８さん。」

Ｓ８　「未然形。」

Ｔ　「未然形。じゃあね、「給ひ」っていうのを辞書で引いてみてください。「給ひ」っていうのはみつかった？「給ひ」って言うのは何形ですか？」

Ｓ８　「連用形。」

Ｔ　「はい。連用形ですね。ってことはこの「ぬ」は何になりますか？」

Ｓ８　「完了。」

Ｔ　「はい。そうですね。完了の「ぬ」っていう風になります。次に「論無くもとの国にこそ行くらめと」っていうところの「らめ」っていうところなんですが、「こそ」が係り結びっていうのがありましたよね。係り結びでつながります。で、「こそ」

の結びは已然形、になって、「こそ」の係り結びは強意を表します。はい、いいですか。それじゃあ、文法はこのくらいにして、今日配った１枚目のプリントに現代語訳があるのでそれを読みながら第二段の内容をまとめていきましょう。はい、こうなってますね。国の人と皇女は、七日七夜、七日七夜で武蔵国につきました。そこで帝と后はひどく心配して、探してますね。ひどく心配して探すんですが、帝、后の使いは武蔵国までどのくらいかかったでしょう？次の人。」

Ｓ８　「Ｓ９さん。」

Ｔ　「Ｓ９さん。」

Ｓ９　「どのくらい？」

Ｔ　「えっとね、帝と后がひどく心配して武蔵国に使いを出すよね。それがどのくらいかかったか。」

Ｓ９　「三月。」

Ｔ　「はい。ここ枠ないんだけど、こういう風に書いてください。三月かかってつきました。橋を壊したりしてやってたからかもしれないけど、七日でつくのと３ヶ月かかるの、ね、すごい差がありますよね。３ヶ月たって使いがついたんですが、そのときに皇女はここ「あ」のところね、なんていいましたか？古文のほうから抜いて欲しいんですが、次の人。」

Ｓ９　「・・・」

Ｔ　「三月たって武蔵国に使いが着きますよね。で、このをのこを尋ねていきますよね。そしたらこの皇女は使いを呼んでなんていったでしょう？」

Ｓ９　「さるべきにやありけむ。」

Ｔ　「そうですね。「さるべきにやありけむ」。「我さるべきにやありけむ」っていってます。それでさらに、ここが良いんだってことを強調するためになんか言ってます。次の人。」

Ｓ９　「Ｓ１０さん。」

Ｔ　「はい、じゃＳ１０さん。」

Ｓ１０　「たいそうここは住みやすい。」

Ｔ　「はい、そうですね。ここは大変住みやすい。っていう風に言ってますね。はい、で、そういっておいて、最後なんていってますか。」

Ｓ１０　「Ｓ１１くん。」

Ｓ１１　「この国に住むべき因縁があったのだろう。」

Ｔ　「はい。そうですね。この国に、この国に住みつくべき因縁があったのだろう。いいですか。皇女は使いを呼んで「我さるべきにやありけむ」って言った後に、「ここは大変住みやすい」だからいいんだよって言って、「この国に住みつくべき因縁があったんだろう」、因縁っていうのはこの国に住むようになるだろうっていう風に、前世から決まってたんだろうっていう風にこの人が考えたってことですね。

で、こうやって言っておいて皇女は使いに対して、帝にこういう風に皇女が言ってたよって伝えなさいって言います。そうしたら帝は何って言ったでしょう？」

Ｓ１１「Ｓ１２くん。」

Ｔ「はい、Ｓ１２くん。」

Ｓ１２「帝がっすか？」

Ｔ「はい。」

Ｓ１２「いたしかたない。もし、この男を処罰したとしても、今となってはこの姫宮を取り返して、都に返し申し上げることもできない。竹芝の男に、生きている限り終身、武蔵国を預け与えて、租税や労役なども課することはやらせまい。ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばす。」

Ｔ「はい。そうね。全部言うとそういう風になるよね。まず、「言ふかひなし」って言ってるんですよね。どうしようもないなぁっていってるんね。どうしようもないなぁ、つまりその男を処罰しても今はもう姫宮は帰ってこないだろう。だからその男が生きている限り武蔵国を与えて租税とか労役とかって言うこともさせないでおこう、姫宮にその国を預けてあげよう、っていう風に宣旨を出したんですね。ここで宣旨、さっき言った内容を２つに分けると武蔵国を任せる。って言うものと租税も労役も免除しようっていう宣旨が下ったってことになりますね。そうなったら、国の人は、国の人はどうしたでしょう。」

Ｓ１２「Ｓ１３さん。」

Ｔ「はい、Ｓ１３さん。」

Ｓ１３「ん？」

Ｔ「宣旨が下ったよね。その後男はどうした？」

Ｓ１３「んー。」

Ｔ「まずね、家を変えたよね。」

Ｓ１３「家を宮中のように作り変えた。」

Ｔ「そうですね。家を宮中のように作り直したんですね。で、宮中のように造って住んでいたんですが、ここで皇女が死んじゃいます。宮がなくなった後この家は何になりましたか？」

Ｓ１３「Ｓ１４くん。」

Ｓ１４「寺。」

Ｔ「はい。寺になりましたよね。寺になりました。寺にしたんですが、この寺はなんですか？」

Ｓ１４「竹芝寺。」

Ｔ「そう、この寺が竹芝寺。で、子どもがいたよね。子どもはその後名前をもらったんだけど、どういう名前をもらいましたか？」

Ｓ１４「Ｓ１５さん。」

S１５「武蔵。」

T　「はい、武蔵。っていう名前になったんね。っていう風になって、こういう風に火焚屋の男に皇女をとって行かれるっていう風なことがあったので、それからは火焚屋に女が勤めているっていうことになりますね。埋まりましたか？じゃあ、この内容をやってみたいと思います。(ぬいぐるみを出す)国の人が皇女を背負って七日七夜で武蔵国に着きました。帝が、帝です。帝がひどく心配したんね。それで使いをね、はい、使いこいつ。使いが来たんだけど、命令を受けて、でもこれは三月もかかちゃった。で、きた時に皇女がこの使いを呼ぶのね。呼んで話したことには、「我さるべきにやありけむ」、「ここはとても住みやすいよ」、「この国に私は住みつく因縁があったんだろう」って言って使いをかえすんね。そうすると帝はこれをこう聞いて、この使いからこの話をきいて、「言ふかひなし」っていうんね。「言ふかひなし」っていうんはどうしようもないなぁ、それで宣旨を出して武蔵国を任せて、租税や労役をこのをのこにさせないでおこうっていう風になりますね。そうしたらこのをのこは、家を、こう家をね、家だったのをちょっとバージョンアップさせて宮中のように作り変えて、ね、その後皇女が死んじゃったらこの家が竹芝寺になりました。で、その子どもだったこいつらは武蔵っていう姓をもらいました。そういうことがあって宮中には女が勤めるようになりましたよっていう事ね。そしたら、「さるべきにやありけむ」っていうのがありますけど、第２段。この「さるべきにやありけむ」っていうのは第１段でもあったと思うんですがどうしてもう一回出てきたんでしょうか？どういう風に思いますか？じゃ、次の人。」

S１５「Ｓ１さん。」

T　「はいじゃ、Ｓ１さん。「さるべきにやありけむ」って２回出てきているよね。なんでかな。」

S１　「同じことを考えていた。」

T　「うん。じゃ、もう１人いってみようか。」

S１　「Ｓ７さん。」

T　「「さるべきにやありけむ」っていうのが２回出てきたのはなんでだろう。１回目は男の人が思ってるよね。で、２回目は皇女が自分で私は「さるべきにやありけむ」っていうよね。ということは、ここは「さるべきにやありけむ」っていうのはそうなる運命だったんだろう、って意味なんだけど、それを強調しているんだよね。」(チャイム)

T　「これだけ書いてください。」

「はい、じゃあ、ちょっとのびてしまってすいません。終わります。号令お願いします。」

S１　「起立。礼。」

第３節　授業実践を通して得られた知見と反省

(1)指導者について

授業をいかに魅力的なものにするか、ということを考える際に、まず思いつくのが生徒と教師との人間関係である。生徒との人間関係が良いものであればあるほど、授業を行う上で教師側から見ても、生徒側から見ても良い授業ができるのではないかと今回の実践で感じた。生徒との関係作りは、主に休み時間や放課後、部活動の時間に行った。特に部活動を通して、親しくなった生徒が授業クラスにいると、授業も行いやすく、円滑に進んだと思う。

そうした、生徒との関係作りにおいて大切なことは、次の２点ではないかと考える。

1、お互い尊重しあうという心得のもと、生徒との関係作りを行うこと。

これは、授業とまったく関係ない場所でもできることである。例えば、私はソフトテニス部に参加し、その活動の中で高校生にとっては高度なサーブの技術、ストロークの技術などを示す機会があった。そのような機会があった後、徐々に生徒の反応が変化してきた。授業において、それまであまり話を聞いてくれなかった生徒が、話を聞いてくれるようになる、ということが多くあった。これは、授業技術などではなく、一個の人間として、生徒が教師を認めるということから起こったのであろうと考えられる。また、そういう生徒に対しては、教師の側からも積極的に話しかけ易いという事もあり、生徒の話を聞く機会を多く持てるということがあったように思う。そうした中で、生徒が日頃どのようなことに興味をもっているのか、どのようなことを考えているのか、を知ることができ、１人１人の生徒を尊重し、良い関係作りができるように心がけた。すると回を重ねるごとに、授業も活発なものになり、生徒から疑問点に対する質問などが出てくるなど、授業をする上で、生徒の状況を把握する上で良いことが増えた。はじめは一部の生徒に限定されてしまっていたが、しばらく経つと、自然と他の生徒とも同じような関係作りができたと思う。このようなことから、私は生徒との関係作りというものが、授業をする上でとても大切なものなのではないか、と感じた。

2、生徒からの質問に適切に答えること。

例えば、古典の授業の後に、生徒が質問に来たとする。そのときの対応ひとつで生徒との関係は、全く異なったものになるだろう。基本的には、生徒に対して、わかりやすく丁寧に理解できるまで教えることは大切なのだが、時に生徒の質問に対して適切な答えを教師が持っていないこともある。そのような時に、曖昧な答えをするよりも、調べておくから少し待ってくれ、と答えておいて、適切な答えを後で提示したほうが生徒にとっては良いものだということがわかった。ここで、曖昧な答え方をしてしまうと、あの先生に聞いてもわからない、となってしまう。その場で答えられるに越したことはないが、正確で適切な説明をすることで、生徒との信頼関係も生まれると感じた。

(2)指導法について

指導の上で重要なことは、次の２点であると考える。

1、生徒とのやり取りの中で、信頼関係を築くこと。

生徒とのやり取りの中で、曖昧なことを教えることは絶対に避けなければならない。分かりやすい説明をすることは、もちろん大切であるし、生徒の理解を深める上で必要である。しかし、それにも増して大切であると感じたことは、正確な回答、適切な回答をしなければならないということだ。これができないと生徒との信頼関係は築くことができない。信頼関係を築くことができないということは、回りまわって良い授業ができないということになってしまう。これを、私は今回の授業実践の中で、最も注意した。

2、生徒が授業をどの程度理解しているかを的確に把握し、授業を構想すること。

授業において、生徒の理解を助ける板書を構想し、作ることが大切である。ところで、今回の授業実践では、ノートを使用せず、全て板書計画と同様のワークシートを準備し、ワークシートを用いながら授業を進めるという形をとった。そのため、板書(ワークシート)が授業の思考の流れを表したものになるように配慮した。しかし、ワークシートに教えたいことを載せすぎた為に、何が重要なのか、がわかりにくい授業になってしまったことは反省すべき点である。改善策として、全体構造に関する板書(ワークシート)と、補足説明に関する板書(ワークシート)とに分けて生徒に配布する、もしくは、補足説明に関するプリントを最小限に抑えて、中心となるワークシートに書き込む方式を採るなどが考えられる。資料が豊富であるというのは、教師が授業をつくっていく上では大切なことだが、資料が多すぎても、教えるべきポイントの焦点がぼやけて、生徒の理解を難しくしてしまう恐れがある。教師側から見ると提示したくなってしまう資料を、生徒の立場から見つめなおし、取捨選択することが大切である。

(3)終わりに

今回の授業実践を通じて学んだことの中で、特に大切にしたいものは、生徒との関わりに関することである。教師と生徒との関係作りが上手くできていないと、同じ授業を行っても生徒の授業に対する取り組み方も違ってくる。生徒との関わりをより良いものにしていく為に必要なことのひとつとして、教材についての豊富な知識がある、と私は考える。それは、生徒の問いに対して、適切な回答、正確な回答が求められるからであり、それらが生徒との信頼関係に大きく関わると感じた。そして、その知識は教材を研究することによって培われ、教材に対する教師の理解も、より深いものになることから、授業自体の完成度も高いものになっていくと思う。賀茂北高校においては、生徒が放課後に質問に来てくれて、どういう授業がいいか、ということについて生徒の意見を聞く機会が持てたために、以上のようなことを学ぶことができた。賀茂北高校での実践とその経験を通して学んだことを忘れることなく、日々努力し、より良い授業を行えるようになりたいと思う。

第４章　第１学年基礎クラス『更級日記』授業実践の研究　　豊田慎一郎

第１節　「竹芝寺」学習指導案

授業者：豊田慎一郎

１、日時：平成１７年２月１４日～１８日
２、場所：社会科教室、書道教室
３、学校、学年、学級：広島県立賀茂北高等学校、１年次生、基礎クラス
４、教科、科目、単位数：国語科、国語総合、４単位
５、教材、単元：新編国語総合（東京書籍）、「竹芝寺」
６、本課について

①教材観：　女性の強い意志が男性をも巻き込み、自ら新天地で生きる道を開いたというのが話の大きな流れである。ここには平安朝の貴族階級の女性が失っていた、未知のものへのあくなき好奇心とそれを実現する力強い実行力とを見ることができる。また、言葉による愛情表現はないが、行動や振る舞いに見える女性の男性への愛を感じることができる。

②生徒観：　対象とするクラスは、国語が苦手な生徒が集まっている。「読む」「書く」「聞く」「話す」といった基礎的な国語力において、生徒の個人差は大きい。しかし、授業に対する姿勢や態度はとても積極的なので、生徒の発言を中心とした授業を考えた。

③指導観：　文法を適宜おさえながら、「竹芝寺」の内容を正確に理解することに重きをおいた。生徒各自の自由な思考や発想をもとに、登場人物の心情を考えさせたり、話に対する感想を言わせる活動を行うなどして、楽しく古文に触れさせたい。

７、本課の目標

「竹芝寺」を正確に音読でき、内容について正確に理解し、その内容について自分なりの考えをもつことができる。

第１時	・本文第１段を正確に音読できる。 ・男性と女性の身分の違いを理解する。
第２時	・男性が女性を東国に連れて行かねばならなくなった経緯を理解する。
第３時	・男性と女性とが東国で幸福に過ごせるようになった経緯を理解する。
第４時	・本文全体の内容を理解し、この話にみえる登場人物のふるまい、行動または人間関係等について自分なりの意見をもつことができる。

8、学習活動の展開

第1時

（1）本時の目標

①本文第1段を漢字や歴史的かな遣いに注意しながら、正確に音読できる。

②男性と女性の身分の違いを理解する。

（2）本時の評価の観点

①漢字や歴史的かな遣いに気をつけながら、正確に読むことができたか。

②男と皇女の身分の差を理解できたか。

（3）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
範読を聴く。	1　本文の横にふりがなを書き込みながら授業者の範読を聴く。	1　古典のリズムや言いまわし、スピード等に注意して範読をする。 2　次の斉読、音読に備えさせる。	10
第1段の追従読みをする。	1　クラス全員で声を合わせて、大きな声で追従読みをする。	1　教師が適切な部分で区切りながら読み、クラス全員で声をそろえて読ませる。	20
第1段の音読をする。	1　指定された箇所まで大きな声で音読する。	1　数名を指名して音読させる。	27
登場人物のまとめ。	1　指名にしたがって、第1段に登場した人物を発表する。	1　指名して発表させる。 2　ワークシート①の「一」に書き込み、整理させる。	30
「火焚屋の火焚く衛士」とは何か、まとめる。	1　火焚屋、衛士の意味を辞書で調べ、発表する。 2　男の身分について理解する。	1　火焚屋、衛士、それぞれの意味を辞書で確認させ、発表させる。 2　男の身分は低かったことをおさえ、理解させる。	35
「かくてあるよ」と述べられている内容を理解する。	1　補助プリントを参照して、対象となる部分を探し出し、指示語「かく」の指示内容を確認、理解して自分の言葉で発表する。	1　指名して尋ねる。 2　出ないようならば、補助発問を行う。「かく」が指示語であることや、今まで読んできた内容を再度確認させる。	40

「いみじうかしづかれ給ふ」の部分の読解をする。	1　皇女の境遇を理解する。	1　身分の低い火焚屋の男と違い、皇女は、たいへん身分が高かったことを理解させる。	45
本時の復習をする。	1　授業者の説明を聴き、本時で扱った内容を理解する。	1　漢字の読み、歴史的かな遣いの読みの確認、登場人物の確認をしながら、学習内容をふりかえらせる。	50

㊟「漢数字」は、各ワークシートの対応箇所を示す。

第２時

（１）本時の目標

①本文第１段を漢字や歴史的かな遣いに注意しながら、正確に音読できる。

②男が皇女を東国に連れて行かねばならなくなった経緯を理解する。

（２）本時の評価の観点

①漢字や歴史的かな遣いに気をつけながら、正確に読むことができたか。

②２人が東国に下った経緯を理解できたか。

（３）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の想起をする。	1　第１段を斉読する。 2　前時の学習内容を想起する。	1　第１段を漢字や歴史的かな遣いに注意して読むようにさせる。 2　ワークシート①の「二」までを復習させる。	１０
「かくてあるよ」の部分を読解する。	1　ワークシート②の「三」に書き込む。 2　指名にしたがって発表する。 3　授業者の説明を聴き、理解する。	1　「こうしている」とは、どうしていることかを、指名して、発表させる。 2　男の身分、境遇を簡潔に説明する。	１５
「いみじうかしづかれ給ふ」の部分を読解する。	1　ワークシート②の「四」に書き込む。 2　授業者の説明を聴き、皇女の境遇について理解する。	1　皇女の身分、境遇を男のそれと対照させながら、理解させる。	２０
「いみじうゆかしくおぼされければ」の部分を読解する。	1　ワークシート②の「五」に書き込む。 2　授業者の説明を聴き、皇女の心情を、想像を膨らませて考える。	1　皇女が見たいと思ったのはひさごが風になびくさまであることを確認させ、理解させる。 2　実は「衛士のをのこ」に興味を示しているのかもしれないということに触れる。	２５
皇女が男に要求したことをまとめる。	1　皇女の要求は何かを考え、ワークシート③の「六」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。	1　皇女の要求は、「我率て行きて見せよ」であることを確認させる。 2　指名して発表させる。	２７
男が橋を壊	1　男が橋を壊した理由を考	1　男が橋を壊したのは、追っ	２８

した理由を考える。	え、ワークシート③の「七」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。	手から逃れるためであることを確認させる。 2　追っ手に捕まるとどうなるのか、考えさせる。	
皇女が「率て行きてみせよ」と言った理由を理解する。	1　ワークシート③の「八」に書き込む。 2　指名にしたがって発表する。 3　授業者の説明を聴く。	1　「そう言う」とは、「我率て行きて見せよ」ということ、理由とは、具体的なものではなく、運命的なものであることを理解させる。	33
男が皇女を連れて逃げる場面を考える。	1　皇女を連れて逃げる場面に現れる男性の特異な行動を、ワークシート③の「九」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。 3　授業者の説明を聴き、理解する。	1　2つの行動について、どのような点が特異であるのかを確認させ、理解させる。 2　行動と同様に、2人の恋も特異なものであることを理解させる。	38
皇女の運命について考える。	1　皇女の運命について考え、ワークシート④の「十」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。	1　「そうなる」とは、身分の低い男が、皇女を連れて東国へ逃げるということであることを確認させる。	43
本時の復習	1　授業者の説明を聴き、本時で扱った内容を理解する。	1　漢字の読み、歴史的かな遣いの確認をする。 2　話の流れを確認しながら、学習内容をふりかえらせる。	50

㊟「漢数字」は、各ワークシートの対応箇所を示す。

第３時

（１）本時の目標

①男が皇女を東国に連れて行かねばならなくなった経緯を理解する。

②男と皇女とが東国で幸福に過ごせるようになった経緯を理解する。

（２）本時の評価の観点

①２人が東国に下った経緯を理解できたか。

②話の筋通りに、男と皇女が幸福に過ごせるようになる経緯を理解できたか。

（３）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の想起をする。	1　適宜メモをとりながら授業者の説明を聴き、前時の学習内容を想起する。 2　皇女が興味を抱いたものについてワークシート②の「五」にまとめる。	1　「我率て行きて見せよ」までの流れを、分かりやすく説明する。 2　皇女が興味を抱いたものについて解説し、ワークシート②の「五」にまとめさせる。	１０
男が橋を壊した理由を考える。	1　男が橋を壊した理由を考え、ワークシート③の「七」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。	1　男が橋を壊したのは、追っ手から逃れるためであることを確認させる。 2　追っ手に捕まるとどうなるのか、考えさせる。	１２
皇女が「率て行きて見せよ」と言った理由を理解する。	1　皇女が「率て行きて見せよ」と言った理由を考え、ワークシート③の「八」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。 3　授業者の説明を聴き、理解する。	1　指示語「さ」の指示内容は「我率て行きて見せよ。」であることを理解させる。 2　皇女がそう言った理由は、皇女が、運命を感じていたからということを理解させる。	１７
男の特異な行動について考える。	1　皇女を連れて逃げる場面に現れる男の特異な行動を、ワークシート③の「九」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。 3　授業者の説明を聴き、理解する。	1　２つ示した男の特異な行動は、どのような点が特異であったのかを理解させる。 2　男の行動と同様に、２人の恋も特異なものであることを理解させる。	２２

女性の運命について考える。	1　女性の運命とは何か、具体的に考え、ワークシート④の「十」にまとめる。 2　指名にしたがって発表する。	1　「そうなる」とは、身分の低い男が、皇女を連れて東国へ逃げるということであると理解させる。	２５
帝が皇女を探し出した経緯をまとめる。	1　指名にしたがって発表する。 2　帝が皇女を探し出させた経緯を、ワークシート④の「十一」にまとめる。	1　帝が皇女を探す手順を本文に沿ってまとめさせる。	２８
「わが国」とはどこか、理解する。	1　指名にしたがって発表する。 2　「わが国」がどこを指しているのか、ワークシート④の「十二」にまとめる。	1　男の出身が武蔵の国であることを理解させる。	２９
皇女の主張をまとめる。	1　指名にしたがって発表する。 2　皇女の主張をワークシート④の「十三」にまとめる。	1　皇女の主張をまとめさせる。また、皇女が、自己の力では如何ともしがたいものであったと言っていることを理解させる。	３４
「いみじくここありよく」思った理由を考える。	1　「いみじ」を辞書で調べ、発表する。 2　皇女の気持ちを考え、指名にしたがって発表する。 3　皇女の気持ちをワークシート⑤の「十四」にまとめる。	1　皇女が、「いみじくここありよく」思った理由は、宮中での堅苦しさが武蔵にはなかったことや、その地が新鮮であったことなど、いろいろと考えることができるので、生徒に考えさせる。	３９
宣旨の内容をまとめる。	1　指名にしたがって発表する。 2　宣旨の内容を理解し、ワークシート⑤の「十五」にまとめる。	1　帝の宣旨の内容を簡潔にまとめて理解させる。	４３

火焚屋に女が詰めるようになった理由を考える。	1　指名にしたがって発表する。 2　ワークシート⑤の「十六」にまとめる。	1　どうして火焚屋に女が詰めるようになったのかを考えさせる。	48
本時の復習	1　授業者の説明を聴き、本時で扱った内容を理解する。	1　本文全体の内容をもう1度ざっととらえさせる。	50

㊟「漢数字」は、各ワークシートの対応箇所を示す。

第４時

（１）本時の目標

①男と皇女とが東国で幸福に過ごせるようになった経緯を理解する。

②本文全体の内容を理解し、自分なりにこの話について考えることができる。

（２）本時の評価の観点

①話の筋を追って、２人が幸福に過ごせるようになった経緯を理解しているか。

②積極的にこの話について考えようとしたか。

（３）本時の指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点	時間
前時の補足を聴く。	1　皇女が興味を抱いたものをワークシート②の「五」にまとめる。	1　指名等はせず、板書する。	3
前時の想起をする。	1　授業者の説明を聴く。 2　指名にしたがって発表する。	1　帝や后が、皇女を探し出すまでの流れと、皇女探しの経緯を、前時に学習したところまで口頭で簡潔にまとめる。	１０
第２段落の読みを練習する。	1　本文第２段を、教師の読みにしたがって追従読みする。	1　教師が一節読む。 2　大きな声で、漢字や歴史的かな遣いに注意させながら音読させる。	１５
帝が皇女を探し出す経緯をまとめる。	1　指名にしたがって発表する。 2　帝が皇女を探し出す経緯を、ワークシート④の「十一」にまとめる。	1　前時で残った「朝廷からの使いを…」の部分を指名して生徒に答えさせる。	１８
「さるべきにやありけむ」を解釈する。	1　辞書で「けむ」を引く。 2　指名にしたがって、「けむ」について発表する。 3　指名にしたがって、女性の運命について発表する。 4　「さるべきにやありけむ」を解釈し、ワークシート④の「十」にまとめる。	1　助動詞「けむ」について、辞書を引かせ、過去推量の意味であることを確認させる。 2　「そうなるはずの運命」とは、身分の低い男が、皇女を連れて東国へ逃げることを指すことを理解させる。	２３
男の故郷とはどこか、確認する。	1　男の故郷とはどこか考え、ワークシート④の「十二」にまとめる。 2　指名にしたがって板書す	1　指名して生徒に板書させる。	２４

	る。		
皇女の主張をまとめる。	1　「宿世」を辞書で調べる。 2　指名にしたがって「宿世」の意味を発表する。 3　指名にしたがって皇女の主張をまとめ、発表する。 4　ワークシート④の「十三」にまとめる。	1　「そうなる」とは、皇女が武蔵の国に住みつくことをさすことを理解させる。 2　名詞「宿世」について、辞書で調べさせる。 3　皇女は、自己の力では如何ともしがたい運命だったと主張したことを理解させる。	29
武蔵の国での居心地のよさについて、考える。	1　指名にしたがって「いみじ」の意味を発表する。 2　「ありよし」を辞書で調べる。 3　皇女の、武蔵の国での居心地のよさについて考え、ワークシート④の「十三」にまとめる。 4　指名にしたがって発表する。	1　「いみじ」の意味を答えさせる。 2　形容詞「ありよし」を辞書で調べさせる。そこに本文がそのまま掲載されているので、ワークシート④の「十三」に口語訳を記入させる。 3　居心地がよいと感じたのはなぜか、生徒に自由に考えさせ、発表させる。	34
宣旨の内容をまとめる。	1　指名にしたがって発表する。 2　宣旨の内容を理解し、ワークシート⑤の十五にまとめる。 3　「かひなし」、「おほやけ事」を、辞書で調べる。	1　宣旨の内容を箇条書きでまとめさせる。 2　「かひなし」、「おほやけ事」について、辞書で調べさせる。	40
火焚屋に女が詰めるようになった理由を考える。	1　指名にしたがって発表する。 2　火焚屋に女が詰めるようになった理由を理解し、ワークシート⑤の「十六」にまとめる。	1　簡単なので、生徒に自らの力で口語訳をさせる。 2　なぜそうなったのかを考えさせる。	45
音読をする。	1　大きな声で本文全体を音読する。 2　授業者の説明を聴き、本時で扱った内容を理解する。	1　話の内容を味わいながら音読するよう注意を促す。	50

㊟「漢数字」は、各ワークシートの対応箇所を示す。

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

竹芝寺

これは、昔、竹芝といった坂である。この国の人で（ここに）住んでいた男を、火焚屋の火を焚く衛士に（国司が）指名し献上したところ、（この男は）御殿の前の庭を掃きながら、どうしてこんなつらいめをみるのだろうか。私の故郷で、（あっちに）七つ、（こっちに）三つと

これは、いにしへ竹芝といふさかなり。国の人のありけるを、火焚屋の火焚く衛士にさし奉りたりけるに、御前の庭を掃くとて、「などや苦しきめを見るらむ。わが国に七つ三つ

酒を仕込み据えてある酒壺に置いてある直柄のひさごが、南風が吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、東風が吹くと西になびく光景を見ないで、こうしていることだなあ。」と、独り言を言い、ぶつぶつ言ったところ、その時、帝の御娘でたいそう大切にされていらっしゃる（御娘が）ただひとり、御簾のそばにおでましになって、柱に寄りかかって（外を）御覧になると、この男が

造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄のひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。」と、独りごち、つぶやきけるを、その時、帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ、ただひとり御簾の際に立ち出で給ひて、柱によりかかりて御覧ずるに、このをのこのかく独りごつを、いとあはれに、いかなるひさごの、いかになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので、御簾を押し上げて、「そこの男よ、こちらへ参れ。」とお召しになったので、男は、かしこまって、高欄のそばに参上したところ、「今言ったことを」もう一度、私に

なびくならむと、いみじうゆかしくおぼされければ、御簾を押し上げて、「あのをのこ、こち寄れ。」と召しければ、かしこまりて高欄のつらに参りたりければ、「言ひつること、いま一かへり我に

言って聞かせよ。」と仰せになったので、酒壺のことを、もう一度言ひて聞かせよ。」と仰せられければ、酒壺のことを、いま一かへり申し上げたところ、「私を連れて行って（それを）見せよ。そう言う理由があるのだ。」と仰せになって申しければ、「我率て行きて見せよ。さ言ふやうあり。」と仰せられたので、おそれ多くおそろしいと思ったが、そうなるはずの因縁であったのだろうか、

けれども、かしこくおそろしと思ひけれど、さるべきにやありけむ、（姫君を）背負い申し上げて国に下る時に、きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、その夜、負ひ奉りて下るに、論なく人追ひて来らむと思ひて、その夜、勢多の橋のたもとに、この姫宮を置き申し上げて、勢多の橋を一間ほど

勢多の橋のもとに、この宮を据ゑ奉りて、勢多の橋を一間ばかりこわして、それを飛び越えて、この姫宮を背負い申し上げて、七日七夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。

こほちて、それを飛び越えて、この宮をかき負ひ奉りて、七日七夜といふに、武蔵の国に行き着きにけり。

帝と皇后は、姫が姿を消しなさってしまったとひどく心配し、おさがしになると、「武蔵の国の衛士の男が、大そうよい香りのするものを首にひっかけて飛ぶように

帝、后、皇女失せ給ひぬとおぼしまどひ、求め給ふに、「武蔵の国の衛士のをのこなむ、いと香ばしき物を首にひきかけて飛ぶやうに逃げて行った。」と（ある者が）申し出て（来たので）、この男を探してみるといなかった。

逃げける。」と申し出でて、このをのこを尋ぬるになかりけり。まちがいなく故郷の国に帰って行っているだろうと、朝廷から使者が下って、追いかけてみるのだが、論なくもとの国にこそ行くらめと、おほやけより使下りて追ふに、勢多の橋がこわれて行きつづけることができない。（都を出発して）三か月という日数で武蔵の国に

勢多の橋こほれて、え行きやらず。三月といふに武蔵の国に到着して、この姫宮は朝廷からの使者をお呼びになって、この男を探すと、行き着きて、このをのこを尋ぬるに、この皇女おほやけ使を召して、

補助プリント③

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

「我さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、率て行け（連れて行け）

「私はそうなるはずの因縁であったのだろうか、この男の家が見たくて、

と言ったので（男は私を）連れて来てしまったのだ。たいそうここは住みやすく思われる。もしこの

と言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。この

男が罪せられ、ひどいめにあわせられるならば、私はどうしていろと（いうのか）。これも前世でこの国

をのこ罪し掠ぜられば、我はいかであれと。これも前の世にこの国

に住みつくはずの因縁があったのであろう。

に跡を垂るべき宿世こそありけめ。はや帰りておほやけにこのよし（早く都に帰って朝廷にこのこと）

を奏上しなさい。」とおっしゃったので、（使者は）言いようもなくて、（都に）登って、帝に、

を奏せよ。」と仰せられければ、言はむ方なくて、上りて、帝に、

このようであったと奏上したところ、（帝は）「いたしかたない。

かくなむありつると奏しければ、「言ふかひなし。そのをのこを（もし、その男を）

罰したとしても、今（となって）は姫宮を取り返して、都に返し申し上げることもできない。

罪しても、今はこの宮を取り返し、都に返し奉るべきにもあらず。

竹芝の男に、（生きているかぎり終身、）

竹芝のをのこに、生けらむ世のかぎり、武蔵の国を預けとらせて、（武蔵の国を預け与えて、）

租税や労役なども課することはやらせまい。ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばす」

おほやけ事もなさせじ。ただ、宮にその国を預け奉らせ給ふ。」よし（旨）

の宣旨下りにければ、この家を内裏のごとく造りて住ませ奉りける（男が）この家を内裏のように造って住まわせ申し上げた

の宣旨が下ったので、

家を、姫宮などがお亡くなりになったので、寺としたのを、竹芝寺という

家を、宮など失せ給ひにければ、寺になしたるを、竹芝寺といふ

のである。その姫宮が生みなさった子どもたちは、（親の領国の名を）そのままとって武蔵という姓を

なり。その宮の生み給へる子どもは、やがて武蔵といふ姓を

得て、ここに住んだ（ということだ）。それより後、（宮中の）火焚屋には（男はおかず）女が詰めているそうだ。

得てなむありける。それより後、火焚屋に女は居るなり。

ワークシート④

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

一　登場人物

・

・

・

・

・

・

・

二　火焚屋の火焚く衛士

・火焚屋

||

・衛士

||

ワークシート②

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

三　かくてあるよ。

＝　こうしていることだなあ。

＊

四　いみじうかしづかれ給ふ

＝　たいそう大切に育てられていらっしゃる。

＊

五　いみじうゆかしくおぼされければ

＝　非常に見たいとお思いになったので

＝

＊　皇女が興味を抱いたものは、　　で

ある。

ワークシート③

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

六　結局、女性は男性にどのようなことを要求したのか。

↓

七　なぜ橘を壊したのか。

八　さ言ふやうあり

＝　そう言う理由があるのだ

九　男性が女性を連れて逃げる場面に現れる特異な行動

・「勢多の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越え」る

＊

・「七日七夜」で武蔵の国に達する

＊

ワークシート④

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

十　さるべきにやありけむ

‖　そうなるはずの運命だったのであろうか
　　＝

十一　帝や后が、皇女を探し出した経緯

十二　「わが国」とはどこか？

十三　皇女の主張

我さるべきにやありけむ

‖　私はそうなるはずの運命だったのであろうか
　　＝

前の世にこの国に跡を垂るべき宿世こそありけめ

‖　前世でこの国に住みつくはずの因縁があったのであろう

＊　　という主張

ワークシート⑤

年	組	番	氏名

授業日　年　月　日　曜日　限目　天気

十四　いみじくここありよくおぼゆ

‖

＊

十五　宣旨

・

‖

・

‖

・

‖

十六　それより後、火焚屋に女は居るなり

‖

＊

第２節　「竹芝寺」授業記録の文字化資料

第１時（平成１７年２月１４日、６限）

T　プリントが３枚あります。授業が終わったら出してもらうのでしっかりメモなりなんなりしながら聞いとってください。

T　はい、じゃあ今日は竹芝寺というのをやります。えーと、これは更級日記っていう本から引っ張ってきてあるやつなんですけど、まあ更級日記の説明は今度中原先生のほうからしてもらうことにして、今日はまあとりあえずみんなで読んでいってみましょう。

T　じゃあ、えーと、教科書持っとる人は教科書の２４８ページね。で、とりあえず先生が読みますから、で、この後みんなにも読んでもらいますので、あのー、読み方がわからんところとかは、横に自分で振り仮名でもうってから、で、次当てられてもすぐ読めるようにしとってください。

T　はい、じゃあ読みますよー。いい？鉛筆でも持ってから聞いてね。あー、そのプリントに書いてもいいし教科書に書いてもいいけん、自分の好きなようにしとってくださいねー。読みます。

（授業者が「竹芝寺」を範読）

T　はい、じゃあみんなメモしたかな。じゃあまずはえーと、前半半分読む練習しようか。古典はまず声に出して読めんといけんけ、どうしようか。じゃあＳ１くんから、ちょっとずつ読んでいってもらおうか。

Ｓ１　これはいにしえたけしばといふさ、さかなり。

T　うん、えーとね、竹芝という坂なり。「ふ」、「ふ」じゃなくて「う」ね。「う」。

Ｓ１　ふさなり。

T　ん？違う、「いう」、坂。竹芝「という」、坂。わかる？

Ｓ１　いう、さか。

T　ん、わかった？

Ｓ１　はい。

T　「ふ」て読まんでいい。「う」、「う」て読まんと。横に書いとってね、わからんなら。

Ｓ１　いう。

T　うんそうそう、うん、オッケー。じゃあ次、Ｓ２くん。

Ｓ２　くにのひとのありけるをひ、ひたきやのひたくえじ？

T　火焚く…。

Ｓ２　火焚く…何これ？なんですかこれ。

T　何て読んだっけ？

Ｓ２　えじ？

T　おう、そうそう。

Ｓ２　えじにさしたてまつりたりけるに。

T	はい、オッケー。んー、じゃあ、S3くん。
S3	おまえのにわをはくとて、などやくるしきめをみるらむ。
T	オッケー、あー、「らむ」はね、「らん」て読む。「ん」。わ、を、んの「ん」ね。じゃあ次は、S4くん。
S4	わがくにななつみっつつくりすえたるさかつぼに
T	うん、オッケー、サンキュー。えーっと、じゃあ次S5くん。
S5	さしわたる…。
T	わたしたる。
S5	さしわたしたる…。
T	うん。
S5	ひさごの
T	はいオッケー。じゃあS6さん。
S6	みなみかぜ、みなみかぜふけばきたになびき、きたかぜふけばみなみになびき…。
T	はい、OK。じゃあえーと、S7くん。
S7	にしふけばひがしになびき、ひがしふけばにしになびくをみでかくてあるよ…。
T	はいありがとう。と、次はS8くん
S8	とひとりごちつぶやきけるをそのときみかどのおんむすめいみじゅうかしづかれたまふ…。
T	はい、ありがとう。あ、ここは「たまふ」て書いて「たもう」、ね。「た・も・う」、「たもう」。
T	はい、じゃあS9くん。
S9	ただひとりすみのきわにたちいでたまいて…。
T	はい、ありがとう。「すみ」じゃなくて「みす」ね。
S9	あ、みす、はい。
T	オッケー。えーっと、じゃあS10さん。
S10	はしらによりかかりてごらんずるに、この、このおのこのかくひとりごつを
T	はい、ありがとう。じゃあ、S11くん。
S11	いとあわれにいかなるひさごのいか、に、いかになびくならむと、ならんと…。
T	うん、ありがとありがと。いいよいいよ。な、なら「む」じゃなくて「ん」、「ん」ね。「む」は「ん」ね。読み方は。えーっと、じゃあS12くん。
S12	いみじゅうかしくおぼされければ…。
T	うん、あ、ちょっと違う。い、いみじゅう、「ゆ」、「ゆ」がある。
S12	あ、いみじゅ、ゆ…。
T	いみじゅう。
S12	いみじゅうかしく…。
T	ちゃうちゃう、いみじゅう、ゆかしく。

S12	ゆかしく。
T	そうそうそう。
S12	あー、おぼされければ。
T	うん、ありがとう。んー、じゃあS13くん。
S13	みすをおしあげてあのおのここちよれとこれめしければ？
T	そうそうそうそう、はい、サンキュー。んじゃあ、S14さん。
S14	かしこまりてこうらんのつらにまいりたりければ…。
T	はい、ありがとう。うーんと、じゃあもう1回S1くん。
S1	これは…。
S	違う！
T	ちが、違うらしいよ。
S1	いいつることいまいちかえりがにいいてきかせよと…。
T	オッケーオッケー、いちかえりじゃなくて、横に書いてあるじゃろ。
S1	え？いいきかせいちかえり…。いいつることいまいちかえり…。
T	われに。と、ひとかえり。
S1	とおおせられければ、さかつぼのことを、いまひとかえりもうしければ…。
T	はいオッケー、いいね。えーっとじゃあ、S3くん。
S3	われいていきてみせよ。
T	うん、もういっちょ。
S3	さ、さいうようあり。
T	うん、ありがとう。さ、いうようあり。えーっとだけん、「さ」が「そう」、そういう理由があるんだていうこと。さ、いうようあり。はい、次S4くん。
S4	とおおせられければかしこくおそろしとおもいけれど…。
T	もういっちょ。
S4	さるべきにやありけむ…。
T	ありけ「ん」。
S4	ありけん。
T	うん、はいオッケー。
S5	おいたてまつりてくだるに、ろんなくひとおいてくらんとおもいて…。
T	よーし、完璧完璧。はい、じゃS6さん。
S6	そのよ？る？
T	うん。
S6	せたのはしのもとに…。
T	うん。
S6	このみやをすえたてまつりて…。
T	はい、オッケーいいねー。はいS7くん。
S7	せた？
T	うん。

S7	のはしをひとまばかりこおちて…。
T	あ、ここはね、こ「ほ」でいい。
S7	こほちて。
T	うん。
S7	それをとびこえてこのみやをかきお、おい、つ？
T	たてまつりて。
S7	たてまつり、て…。
T	うん。
S7	なな、なぬ、なぬ、かななよというにむさしのくににいきつきにけり。
T	はい、ありがとう。んじゃまあ今日の読みの練習はここまでかな。じゃあちょっと、確認の意味で今度はみんなで読むよ。俺が読むけ、その後おっきい声を出して読んでね。で、まだわからんとこがあるやつはどんどん書いていけよ、横に。
T	よし、じゃあやるよー。はい、よし。「む」は「ん」て読まなんよ。覚えたろ？
S	はい。
S	はい。
T	はい。
S	むーん。
T	書き方がいけんかったね。よし、じゃ読みまーす。ついてこいよ。 （追従読み）
T	はい、ありがとう。よし。はいどうもー。 じゃあ、今の古典を声に出して意味が分かった人ー？おらん、かな？おらんね。おらんから、ちょっと、現代文を先生プリントしてみました。ので、だれか読んでもらおうか。ど、どこまで当てとったっけ？S7？あ、そうか、じゃあS8くん。
S8	はい。
T	訳をね、みんなに聞かせてあげて。で、みんな、聞きながらちゃんと自分の目でも読んでいけよ。して、分からん所とかあったら後で教えてあげるけんチェックしとってね。じゃS8君、適当に読んでみて。
S8	これは昔、竹芝と言った坂である。この国の人で、住んでいた男を火焚屋の火を焚く、衛士に…。
T	そうそうそう。
S8	こくしが？
T	うん。
S8	指名し、こうじょう…。
T	けんじょう。
S8	献上したところ、この男は…。
T	あ、ごてん。

S8　ご、の前のにわを…。
T　ごてんのまえのにわをはきながら。
S8　掃きながら、どうしてこんなつらいめ、をみるのだろうか。私の故郷で、7つ、3つと…。
T　聞いとけよー。聞いとけよ。
S8　酒をしこみ据えてある酒壺に置いてある…。
T　ひたえの。
S8　直柄のひさごが、南風が吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、西風が吹くと東になびき、東風が吹くと西になびく光景を見ないで、こうしている、ことだなあ、と、ひとり言を言い、ぶつぶつ言ったところ…。
T　はい、ありがとう。じゃあ次、S9くん。続けて読んでいって。
S9　はい。帝の…。
T　おむすめ。
S9　御娘でたいそう大切にされていらっしゃる　ただ1人、御簾の側にお出ましになて、柱に寄りかかって…。
T　ごらん。
S9　あ、御覧になると、この男がこのようにひとり言を言うのを、非常に心を動かされ、どのようなひさごがどのようになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので…。
T　はい、ありがとう。んじゃあ、S10さん。続き。
S10　ごらん？ごらん…。
T　あー、これ、「みす」。
S10　御簾を押し上げて、そこの男よ、こちらへ参れ。とお召しになったので、男は、かしこまって、高欄の側に参上したところ、いま言ったことをもう1度、私に言って聞かせよ。と仰せになったので、酒壺のことをもう1度申し上げたところ、私を連れて行ってそれを見せよ。そう言う理由があるのだ。と仰せになったので…。
T　はい、ありがとう。じゃS11くん、続き。
S11　おそれ多くおそろしいと思ったが、そうなるはずの…。
T　いんねん。
S11　因縁であったのだろうか。…。
T　ひめぎみを。
S11　姫君を背負い申し上げて国に下るときに、きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、その夜、勢多の橋のたもとに、この姫宮を置き申上げて、勢多の橋を一間ほど壊して、それを飛び越えて、この姫宮を背負い申し上げて、7日7夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。
T　はい、ありがとう。ていうところが、今、みんなで一緒に声に出して読んだところね。んで、じゃあ質問。登場人物を挙げていこうか。ね。だ、だれが出て

	きたか。これ、プリントの、えーとね、４ページに書くとこがあるけ、まとめていって。
S	これノートに書くんですか？
T	あ、んーん、このプリントに書いていいよ。
S	はーい。
T	このプリントがノートぐらいのあれで。
T	じゃＳ12くん、まず１人挙げて。だれが出てきたかい？Ｓ12、Ｓ12！だれが渡したん？
S12	え、えじ？
T	じゃ、Ｓ12から１個出ました。火焚屋の火焚く衛士っていうのが１人ねー。じゃあ２人目Ｓ13くん。
S13	帝。
T	帝！いいねー。帝が出てきたねー。
S	帝の娘。
T	帝の娘？帝の娘。
S	后。
T	后。
T	ま、今日読んだのはこのくらいかな？まだおる、かな？
S	サザエさん！
T	サザエさんは出てこんよ。
T	いーい？なんか、これ言っとかな、ていうやつはおらんねー？いいねー？じゃあ書いて書いてー。書いたー？
S	武蔵！
T	武蔵はあれや、小次郎と戦ったやつだな。
S	あー。
S	でもここに武蔵て書いてある。
T	うーんこれはね、ここで出てくる武蔵は国の名前よ。えっと今で言えば広島みたいな感じよ。わかる？武蔵ていう国があったんよ。
S	高欄？
T	んじゃあせっかくだけん高欄を教えとこうか。高欄は、教科書を開けてみ。教科書の２４９ページ。
S	え、高欄て、人ですか？
T	ん？２４９ページを見たらわかる。
S14	あーほんま柱じゃ。
S	柱？
T	柱っちゅうか、なんつーかね、欄干？欄干ってわかる？もうちょっとおっきく、これこれ、これがわかりやすいよ。後ろから４ページ目ぐらい。これこれ。これこれ。ね。オッケー？　Ｓ12くんわかった？高欄は人じゃないけんね。わ

	かった？
T	じゃあ次はね、火焚屋の火焚く衛士ていう登場人物がおったよね？この、S13、火焚屋の火焚く衛士て、意味わかる？
S13	火を焚く人？
T	そうそうそうそうそうそう。よーわかったね。ただ火を焚く人じゃないんよね。だけんちょっと、解説をしとこか。えーと、まず、火焚屋。火焚屋とはなにか。S13くん。
S13	えーとね、これ、みやちゅうて読むんかね？
T	きゅうちゅう。
S13	宮中警護の…衛士が？
T	うんうん。…にわび。
S13	庭日を焚いて見張りをする小屋。
T	うん、そう。S13くんがよー見つけてくれました。２４８ページの下のほうに、この火焚屋の説明が書いてあるけん、みんな、プリントにうつしてー。
S	先生じゃあここにうつすんですか？
T	うん、イコールのところに。 みんな辞書持ってる？…ない？じゃあねー、辞書に載ってないらしいけ、先生が辞書になります。みんな、うつしよってねー。長いけんねー。はーい、じゃあうつしてー。
S13	じょうきょうってなんすかー？
T	じょうきょうって、どれかい？
S13	上っていう字に京都の京っていう
T	あー、都に、上ること今でいえば東京に、ほら、東京デビューすること。デビューじゃないな、東京に行くこと。
S10	独立ってこと？
T	違う違う違う。都に遊びに行くでもいいし、仕事で出張で行くとかでもいいし、だけんこの場合は、だけん、おまえ、衛士をしろよって言って、都に来いって呼ばれて、都に行くわけだ。仕事に…。
T	わかる？だけんえーと、いろんな国から呼び出して集めた兵士の中から、選んで、上京させた者、あーだけん、都に来させた者。3年の間いつも、刀を帯びとったり弓を持っとったり、武装して宿衛、泊まりがけの、えーと、警護。えーと、護衛の仕事、をした人のことを衛士といいます。だけん、火焚屋の火焚く衛士ていうのはえーと、これ、庭火を焚いてみはりをする小屋で、火を焚いて見張りをする男のこと。が、火焚屋の火焚く衛士ですね。ごめんね長引いて。じゃあ今日はここまで。終わります。

第２時（平成１７年２月１５日、６限）

T	教科書開いて。２４９ページ。あ、それか、まあ、プリントの本文でもいいよ。どっちでも、自分の好きなほうを。いい？
	（斉読）
T	はい、ありがとう。みんな大きい声で読んでくれるけん、助かります。
S7	うれしい？
T	うん、とてもうれしいです。
T	えーと、ちょっと、追加の説明。宮中、これ、どういう意味かというと、そのままよ。
S13	みやの中？
T	そうそうそう。宮の中。宮っていうのは、宮殿って言ったらわかるかな。お屋敷？の中ていう意味ね。まだ読めん人がいるみたいだけん、しっかり理解しとってください。きゅうちゅうね、きゅうちゅう。
T	んで、最初のほうからお話を追っていくと、ここは昔竹芝という名前だった坂です。この国の人で、ここに住んでいた男を、火焚屋の火を焚く衛士に指名して、えー、献上したところ、この男が、御殿の前の庭を掃きながら、どうしてこんなつらいめをみるのだろうか。私の故郷で、あっちに７つ、こっちに３つと酒をしこみ、据えてある酒壺に置いてある直柄のひさごが、南風が吹くと、北になびき、北風が吹くと南になびき、西風が吹くと東になびき、東風が吹くと西になびく光景を見ないで、こうしていることだなあ、と、独り言を言いました。と、まあとりあえずそこまでね。
T	で、途中に、西になびくを見で。じゃあＳ１くん。このかぎかっこの所があるよね。などや苦しきめを見るらんから。
S1	読むんですか？
T	いや、読むんじゃなくて、書いてあるよね。などや苦しきめを見るらんわが国に７つ３つて。ていうとこがあるけど。だからここまで、が、ここが男の独り言なんよね。男はどういうことを言うとるか、みんなに説明して。
S1	ああ、プリント？
T	プリント見てでもいい。わかりやすく。
S1	どうしてこんなつらいめをみるのだろうか。私の故郷で７つ３つ酒をしこみ…。
T	すえてある。
S1	据えてある酒壺に置いてある…。
T	ひたえ。
S1	直柄のひさごが、南風吹くと北になびき、北風が吹くと南になびき、西風がふくと東になびき、東風が吹くと西になびくを見ないで、こうしていることだなあ。
T	うん、だけんそれが独り言でつぶやいたいうことね。これの、なんか、どうい

う感じかイメージできる？直柄のひさごとか、まずわかる？

S　わからん。

T　わからん？じゃあ直柄のひさごから説明しようか。直柄のひさご、教科書にも書いてあるんだけど、ひょうたんを２つに割って作った、ひしゃく、って言ってわかるかな？こういうのね、水をすくったりするやつ。わかる？

S　スプーン？

T　あーそうそう、スプーンみたいなやつ。なんか神社みたいなところに行ったら手洗うところにあるじゃろ、あのー。ひしゃくっていうのが。こういうの神社で見たことない？

S　ある。

T　そうそうそうそう。それの、ひょうたんで作ったバージョンね。で、これが、風になびきよるわけよ。酒壺の中で、これ、酒壺ね。酒壺があって。ちょっと絵が下手だけど、酒がここまで入っとるとするじゃん。ここって、浮くよね？

S　ん？

T　この中に水入れたら沈むけど、空だったら浮くよね。

S　スプーンて沈むよね。

T　スプーンだったら沈むね。で、スプーンを竹とかで作って。

S　あ、木のスプーン。

T　うんそうそうそうそう、ひょうたんだけん、ね。

S6　浮かぶね。

T　で、ここを落ちんようにひっかけとくじゃん。

S6　あー。

T　で、外から風が吹くと、たとえばこっちが東としよう。東から風が吹いたら、これが、くるーんて回る。イメージできる？

S　半回転？

T　それは、おまえのイメージしだいよ。こういうのを読んでから、頭に想像させながら、読んでいってね。だけん、男が言いよるのは、こうなんかこれ、これが、風が吹いたらくるくるくるくる回りよるのを見ないで、こうしていることだなあて、ため息をつきながらつぶやいとるわけなんですけど。

T　プリントの「三」番。かくてあるよ。かくてあるよ、が、こうしていることだなあていう意味なんだけど。じゃあ辞書を出してから、みんなで「かくて」をひいてみて。かくて。辞書出して、辞書。

S　持ってない。

T　持ってない？忘れた？持っとるやつは調べて。

S7　あった！かくてありました。こうしているままで…。

T　もう１回言って。

S7　こうして。

T　うん。

S7　このままで。
T　うん。
S7　さて。
T　うん。
S7　こうして、これから。
T　どれにしようか？どれでもいいんだけど。一番ふさわしいのはどれ？
S7　さて。
T　ん？
S7　さて…違う。
T　かくて、かくてあるよだけん、S7、かくてあるよだから、なんとか、あるよ。さてあるよじゃ、ちょっと意味わからんじゃろ。
S7　それから。
T　それからじゃないな、ちょっと、それから…。
S7　こうして！
T　うんそうそう。こうして、こうしてある、ことだなあていう意味なんよ、ここは。プリントにも書いてると思うけど、こうしていることだなあ…。
S　書いてあるじゃん。
T　書いてあるよ。確認してもろただけよ。
S　書いてある。
T　「かくて」がだから「こうして」ね、「こうして」、が「かくて」。「ある」が、「いる」。えーとだけん、おれがここにある、とか、ね、いるていうことよ。要するにここにある、あそこにある、ね、S13がそこにある。
T　いいか？で、「よ」、が…。おいおい、おい！聞いてねー、聞くときは聞いてねー！おい！
S　はい！
T　よーし。「よ」。「よ」は、あのー、なんとかだなあていう、詠嘆の…「えいたん」てわかるかな？
S　英語の単語。
T　違う違う違う。感動を表す。感動を表すていうか、この場合は、ため息じゃない、独り言でしょ。嫌だなあていう気持ちをこめるために、「よ」、て入れとる。ね。だからここは、こうしていることだなあていうことなんだけど、プリントに矢印書いとったよね？こうしている、ていうのは、どうしていることでしょうか。ちょっと考えてみようか。S3くん。こうしていることだなあて男がつぶやいているんだけど、どうしている、ことかわかる？
S3　えー、直柄のひさごが…。
T　うん。
S3　風になびいているのを…。
T　うんうん、本当にそうかな？

S3	見ている光景を、あ、風になびく光景を見ないで…。
T	うん、だけん見ないでこうしている、て言いよるね。こうしているてどういうこと？よしじゃあS5くんに助けてもらおうか。わかる？みんな、じぶんが当てられたと思って考えてよ。
S5	こうしていること？
T	うん。あのね、読んだらわかるよ、読んだら。よし、じゃあS6さん。
S6	えっ？
T	こうしているとかいうくらいだけん、前にいっぺん出とるんよ。
S6	こうしている、こうしている…。
T	うん。
S6	うーん、なにかしている。えっ、こうしている…思っとる？ん？違うよね？
T	考えて。
S6	えーわからん。
T	S7、考えてみた？
S3	つらいめ。
T	ちょっとまって、S3くん、なんて？
S3	つらいめをみるのだろうか。
T	そうそう。つらいめをみている。よし、じゃあそれにしようか。じゃあ今S3くんが言ってくれたけど、なんでつらいかはわかる？
T	よし、じゃあS3くんはそこまで出してもらったからいいや。ありがとう。
T	S7、S3くんから今、こうしているっていうのはつらい状態でいるっていうのが挙がったんじゃけど、なんでつらいんかね、男は。
S7	ひさごが動くっていう…。
T	動きよるのを見れないからつらい。
S7	そうそう。
T	わかる？さっきセリフであったじゃん。じぶんの故郷でなびきよるんよ。
S6	あー。
T	それを見ないで、こうしているからつらいんよね。
S	書いてある。
T	見れないからつらい。
S7	見たらうれしいんですか？
T	うん、そらあ、だって、じゃあ自分がたとえば東京に行くじゃん。で、もみじまんじゅうが恋しくなったりするかもしれんよ？
S	よくわからない。
T	無理？よそに出たらわかるよ。じゃ、書いてね。故郷にも帰ることができず、宮中でつらい境遇に耐えている、が、こうしているね。
S6	そういうことね。何をあれしよんかわからんかった。
T	ため息をつきながら、故郷のスプーンを見ることもできないで、つらい日々が

	続いているなーていうことね。
S13	そういうこと。
T	そういうことよ。これ境遇ね。境遇ていうのは生活していくうえでの環境のことね。自分のまわりの状況、状態のことね。わかったや？S8。
S8	はい。
T	帰りたいていうことよね。 で、この男について、ちょっと補足。男は、火焚屋の火焚く衛士だよね。衛士っていうのは、夜火を焚いて番とかするわけだけど。
S	見張り。
T	うん、だけん、下っ端のやつがすることよね。だけん男の身分はけっこう、かなり低い、ということをおさえておこう。
S	先生の身分は？
T	先生の身分はね、けっこう…。まあいいけん書いて。
S	書きました！
T	さすが。みんな書いた？じゃあ男はまあこういうやつね。いつも家帰りてーとか、だりーとか言いながら、見張りをしとる男なんよ。身分がとても低い。ちょっと、かわいそうな感じですね。
T	じゃあまた辞書をひいてみようか。次は「いみじゅう」。「いみじゅう」をひいて。
S	「いみじ」しかない。
T	そうそう、「いみじゅう」は「いみじ」が変わったやつ。
S8	あった。とてもひどい。
T	S8、とてもひどいでいいかな。
S8	ひどい。
S	おそろしい。
T	じゃあそれをだいたいどんなのがあったかを覚えておいて、「かしづく」を調べて。「かしづく」。「かしづく」を見つけた人。
S	はい。
T	言ってみて、かしづく。
S	大切に育てる。
T	大切に育てるね。じゃS8、さっきのいみじはさっき言ったのでよかったかな？何だったっけ？とてもひどい？
S8	とてもひどい…。
T	とてもひどく大切に育てる？ひどくて、悪いことに言うじゃろ。とてもひどくけがをするとか。
S8	とても。
T	うん、だけんとてもをとればいい。とても大切に、「かしづく」が大切に育てるでしょ、大切に育て、「給う」が「なさる」っていう感じなんよね。「れ」「給

	う」が。そだて…あー違う違うこれは「れ」が受身だから、育てられて、られて、いらっしゃる。
T	じゃあS9、とても大切に育てられているのはだれ？あー、プリントはたいそうて書いてあるけど、「とても」と「たいそう」も、意味もあんま変わらんけ、どっちでもいいよ。
S9	娘。
T	娘？そう、帝の娘ね。だけん、えーと、帝の娘ね、あ、これ、赤か青か何かで囲んどって、で、こっちは…。んでこっちも囲んどってね、色つけてから。
T	今S9くんが言ったみたいに、とても大切に育てられていらっしゃる。しかも、どこぞのお父さんお母さんからとかじゃなくて、帝、帝て言ったら、今で言ったら天皇か。だけん、日本で一番偉かった人、が、かわいいかわいいていってから育てよったひと。だから、この、男性とは違ってから女性はとても身分の高い人だった、と。そこをおさえとってねー。
T	訳とか見よってねー。えーと、男が、だから、つらい日々だなーて独り言を言いよったら、その時、帝の娘でとても大切に育てられた、御娘が、ただ1人、御簾の側にお出ましになって、柱によりかかって、外を御覧になると、この男が、このようにひとり言を言うのを、いと、えーと、非常に心を動かされ、どのようなひさごがどのようになびくのであろうかと、非常に見たいとお思いになったので、という風に話が流れとるけど。
T	「四」番。いみじゅうゆかしくおぼされければ。じゃ、S10さん、さっき「いみじ」て調べたよね。あっ、そっか、おまえは辞書を持ってなかったか。どういう意味だったか聞いとった？
S10	わかりません。
T	わからん？じゃあS8いこうか。「いみじ」係ね。
S8	あ、はい。とても。
T	とても、じゃまた辞書ひこう。ゆかし。ゆかしを調べて。ゆかし。
S	知りたい。
T	知りたい。早かったね。知りたいだけじゃないんだろうけど…。
S	読みたい。
T	だけん、ここに一番ふさわしいのを入れにゃいけん。
S	見たい。
T	見たい、そう、だれが言った、今。見たいね。「ゆかし」ていうのは見たいとか知りたいとか聞きたいとか、何とか「たい」ていうのを表すことばだけんね。だけんとても、見たいとおぼされければ、お思いになったので。
S	先生それ「五」番です。
T	「五」番？あー、ありがとう。じゃあその見たい、って書いてあるけど、これは、この帝の娘さんは何を見たいと思ったのか、S11くんわかるかな？
S11	外。

T　外を見たい？ちょっと違うぞー、もうちょっと読んでみて。
S 11　柱。
T　ちょっと違うね。みんな考えろよ。男が帰ってスプーンが回っとるのを見ないで、つらい日々だなーて言っとるのを、帝の娘さんはそのひとり言を聞いたんよ。聞いてそれを見たいなーって思ったんよ、娘さんは。S 11、わかる？
S 11　水。
T　そうそう。そんな感じよ。水じゃないな。
S 11　御簾。
T　御簾？みすは全然違うよ。
S 13　ひさご。
T　S 12 が言った？
S 12　いや。
T　だれが言った？ああ、S 13？そうそう、ひさごを見たいんよ。S 11 わかる？
S 11　はい。
T　ひさごがくるくる回る。風が吹いたらくるくる回るってさっき説明したじゃろ？
S 11　はい。
T　あれを、男があれ見ないでさびしいなあて言いよったのを、お姫様が聞いて、あたしもそれ見てみたい、ていう気持ちよ。いいね？これは本文を書いたけど、現代語のところでいうと、どのようなひさごが、どのように…。これを見たかったんよ、女は。ここね、ここ。いかなるひさごの、いかになびくならん…。
T　いいかなー？じゃあぼちぼち進めよくよ。どのようなひさごがどのようになびいているのか、と、お姫様は、非常に、いみじゅうゆかしく、とっても見たい、とお思いになったので、御簾をおしあげて、そこの男よ、こちらへ参れ、とお召しになったので、男はかしこまって高欄の側に参上したところ、今言ったことをもう１度私に言って聞かせよ、と仰せになったので、酒壺のことをもう１度申し上げたところ、私を連れて行って見せよ。そういう理由があるのだ。という風に言いましたね。
T　えーと、「六」番。じゃあS 12、「六」番みて。結局女性は男性にどのようなことを要求したのか。ていう質問があるね。「六」番ね。いい？これ、どういうことを要求した？
S 12　連れて行って。
T　お、よーわかっとるね。もう１回言って、S 12。
S 12　ひさごが回る所に連れて行って。
T　そうそう。ひさごを見せに連れて行ってにしとこうか？それでいいかね？
S 12　はい。
T　ごめん、またオーバーしたけど、書いてね。私にひさごを見せてっていうことね。いいや？だけんある所に男がおって、男は毎日見張り大変だなあ。地元の

酒壺のひさごがくるくる回っとるのを見たいなー、て独り言を言いよったら、お姫様がそれを聞いて、あたしも連れて行ってー、っていう風な今のところお話の流れです。また、次に続きますのでよろしくお願いします。終り。

第３時（平成１７年２月１７日、５限）

（録音の不備により、約５分省略。黒板に絵を書きながら、第１段のあらすじの解説をしている。）

T　どうしてこんな、つらい生活を送らにゃいけんのかと、そして、故郷に帰って、ひさごが、この間説明したね、くるくる回るのを、見たいなー、てつぶやいたら、それをお姫様が聞いてから、このお姫様ていうのは、やっぱり大事に育てられとるけん、あんまり外にも連れていってもらえずに中で大切に箱入り娘ていうか、もやしっ子ていうか、育てられとるけん、そんなひさごが回っとる様子なんか見たこともないし、だけん、ひさごが風でくるくる回るってのはどういうことなんだろう、よくわからんけん見たいなー、と思ったから、男、こっちに来て、よく聞こえんかったけん、もう１回、今の独り言を聞かせてくれ、て言ったのね。ここまで、オッケーかな？

T　じゃあ次をＳ13くん。

S 13　はい。

T　よろしく。あ、ごめん、ちょっと先までやってしまったね。「言いつること」からいって、まず。

S 13　言いつること？

T　うん。

S 13　いいつること、いまひとかえり…われ？

S　われ…。

S 13　われにいいてきかせよとおおされければ

T　違う違う。おおせられければ。

S 13　おおせられければ、さかつぼのことをいまひとかえりもうしければ、わがいきていってみせよ。さいうようあり。

T　もうちょっとわかるように読んで。われ、いてゆきて、みせよ。

S 13　われ、いてゆきてみせよ。

T　うん。そうそう。

S 13　さいうようあり。

T　うん。

S 13　とおおせられ、ければ、かしこくおそろしとおもいけれど、さるべきにやありけん、おいたてまつりてくだるに、ろんなく…。

T　そこまででいいよ。で、口語訳のほうを。

S 13　今言ったことをもう１度私に言って聞かせよと仰せられ…、あっ、仰せになったので、酒壺のことをもう１度申し上げ、申し上げたところ…。

T　はい、ありがとう。あ、もうちょい先か、ごめんごめん。

S 13　私を連れていって、それを見せよ。そう言う理由があるのだ、と仰せになったので、おそれ多く恐ろしいと思ったが、そうなるはずの因縁であったのだろうか、姫君を背負い申し上げて国に下るときに…。

T	はい、ありがとう。そこんところは、えーとね、これが、まあこの間までやったところね。今日からこれから先は、新しいところだけん。
T	こういうことね、えーと、だから、お姫さんが連れていけって言ったわけなんじゃけど、で、連れていくんだけど、男が、おそれ多く恐ろしいて思ったて、あったよね、S13。ね、自分で言ったよね。だから、それなんでかというと、こっちはお姫様で、すごい偉いひと、でしょ。で、こっちはどこの田舎のやつかわからんようなやつ。がね、お姫様をおんぶしていっていいのだろうか、ていうこと。わかる？それがおそれ多いていうこと。わかる？意味。
S	うん。
T	いちお、オッケー？で、ま、そういう感じで、とにかくお姫様が男の田舎に行ってみたいけん連れて行け、っていったから、男はしょうがなく、まあうれしいのかもしれんけど、お姫様をおんぶして、田舎まで走っていくことになりました。ていうのが、この間までのおさらいね。
T	なんか、聞きたいことがある人？よし、じゃあ今、ちょろっと、S13 が読んでくれたところにちょろっとあったんだけど、さいうようあり。ワークシートで言ったら「八」番ね。さ、いうよう、あり。はい、じゃ今日は辞書もってきた？じゃあね、「よう」をひいて。やう。
T	わかったやつ、だれか教えて。
S	はいはいはい！
T	一番早かったS10さん
S10	はい。重要語。
S	はいはい！
S10	はい。
T	だめだめ。じゃあS7。聞け聞け！
S7	様式、形式、方式、様子、…
T	何て？
S7	なんかいっぱいあるんですよ。
T	選んで、一番よさそうなのを。
S7	様式、形式、方式、様子、…。
S	理由だ！
S7	じゃ理由だ。
T	いいね、3番のここは理由とか、わけとかいう。
S	書いてあるじゃんか。
T	ええや、「さ」が「そう」ね。さ、いう、理由、が、あり。 「さ」が「そう」ていうことね、いう、…ほらっ、そう、いう、よう、わけ、が、あり。あるんだ、と。そういう…。
S6	わけがある。
T	うん。

T	じゃあＳ10。敗者復活。そういうていうのは、どういうこと？
S 10	調べろってこと？
T	調べんでもええよ。お話の中身を考えたらわかる。だけんお姫様がそういう理由があるんだ、って今言っとるわけでしょ。
S 10	姫が言うん？
T	うん、姫が言っとるでしょ。で、そういうて、どういったこと？
S 10	連れてって。
T	そうそう。じゃあこれは本文のほうで書こうかね。
S	これ書くんですか？
T	うん、端っこのほうに書いとって。
T	だけん、女が男に連れて行けって言うのには、理由があるんだ、と。だから連れて行けって言いよるのね。で、その下に矢印があるけど、まあここは、お話を全部読んでみたほうがわかりやすいかなあと思うけん、ここでは飛ばしてから、先にいくね。
T	じゃあＳ３くんにしようか。本文の続きを。
S 3	ろんなくひとおいてくらんとおもいて、そのよる、せたのはしのもとに、このみやをすえたつまつりて、せたのはしをひとまばかりこほちて、それをとびこえて、このみやをかきおいたつまつりて、なぬかななよというに、むさしのくににつきにけり。
T	ちょっとまってよ、奉りがなんか怪しいよ。
S 3	たてまつり。
T	奉る、ね。「たつまつる」か何か聞こえたけん、言うことはちゃんとやってね。難しいけどね。で、口語訳のほうを聞かせてみて。論なくからね。
S 3	きっと追っ手が追いかけてくるだろうと思って、その夜、勢多の橋のたもとに、この姫宮？
T	うん。
S 3	を置き申して、申し上げて、勢多の橋をいっけんほど壊して、ひとまほど壊して、それを飛び越えて、この姫宮を背負い申し上げて、７日７夜という日数で武蔵の国に行き着いたのであった。
T	よし、ありがとう。んじゃあＳ５くん、橋を壊したって書いてあったよね。勢多の橋を一間ばかりこほちて。なんで、橋を壊したんだろうか。
S 5	通れなくする。
T	うん。だれを？何を通れなくするの？自分を通れなくするのかな？違うやろ。お話を考えてみたらわかるよ。わからん？
S 5	追っ手？
T	そうそう。これプリントの「七」番の答えね。追っ手がなんて言った？追っ手を来させないようにする、か。
T	じゃあＳ６さん、なんで追っ手を来させないようにしたかったの？あ、これは

	頭で考えて。書いちゃないけん。追っ手が通れたらどうなるの？
S6	捕まる。
T	捕まるよね。
S6	捕まらないために…。
T	そうそう、そういうことね。どこの馬の骨かわからんやつが帝の大事な大事な娘をかっぱらっていったわけだけん、もう、捕まったら本当にどうなるかわからんけんね。もうこの頃には男も必死で逃げよるわけね。だから橋を壊した、と。
T	で、えーと、いまS3くんに読んでもらったんだけど、この、逃げるところに男のすごいとこが2つあるんよ。プリントの「九」番の勉強にいきますよ。 男性が女性を連れて逃げる場面に現れる特異な行動。S9、特異な行動てわかる？
S	かんちょう。
S9	かんちょう。
T	自分で考えて言わにゃあ。 特異な行動て、易しい言葉で言ったらどんな意味？みんなが、特異な行動ていってわかるかな、と思って。わからん？なら、ちょっと説明しとくけど、えっと、他のもの、とか普通のもの、と、だいぶ違うていうことよ。特に異なる。非常に違っていること。
S6	それって、人とは違うこと？他のものと？
T	別に人でも物でもいいよ。良い意味で言ったら、他の人にはできないぐらい上手、とかいう意味にも使えるし、悪い意味に言ったら、他の人はだれもせんような変わりもん、みたいな意味にも使える。だけん普通とはちょっと違う、普通よりすげー、ていうことね。な、行動が、そこに2つあげてあるね。1番が勢多の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越える。
T	じゃあS11くん、なんで、勢多の橋を一間ばかり壊して、それを飛び越えるというのは、特異な行動だと、俺が思ったと思う？どこがすごいんか、その、橋を一間壊して飛び越えるていうのは。
S11	壊したから。
T	ん、壊したから？まあ確かにそうです。
S	背負いながら壊したの？
T	あー、そこはね、たぶん、橋があって、ちょ、S11くん聞いとってね。ここが一間ね。ここが。で、こっちからこう逃げて来たてするじゃん、で、ここにお姫様を置いて、で、自分はこう戻って、戻りながら、ばんばん壊していって、で、壊したあとに、多分ここをぴょーんて飛んだんよね。
S6	すごい頭バカ。
S7	どうやってですか？
T	それは、見た人にしかわからん。そこがすごいんよ。そこが特異なんよ。

S6　なんで、置いて、戻って、行くときに壊さんの？
T　置いて…。
S6　置くじゃん、置いて…。
T　ここに置いて…。
S6　で、こっちから行くじゃん…。
T　帰って…。
S6　で、行くときに壊せばいいじゃん。なんでこっち行くときわざわざ壊すんかわからん。
T　うんうん、それは、みんな聞いとってよ。この物語を書いた人がね、この男はすごいやつなんだと、そういうことを言いたかったけん、こう、壊して…。
S　わざと？
T　わざわざこのすごい距離をジャンプさせる物語に仕上げたんよ。まあ要は、男は飛び越えれたけど…。
S　追っ手は…。
T　追っ手は飛び越えることができなかった。
S　１個目のとこに書くんですか？
T　うん、１個目のところに。そらそうよね。追っ手が飛び越えれそうな距離しか壊さんなら意味ないけんね。壊しよる時間が…。
S6　もったいない。
T　もったいないけんね。走れていう感じよね。
で、ここを飛べる男はすごい。すごいその１。
T　書いた？じゃあはい、２番目いくよ。２番目は「七日七夜で」武蔵の国に達する。これは、あの、他の本を読んだりして調べんとわからんけん言うけど、なんで「七日七夜」がすごいかというと、通常ならここは、２週間かかるのね、行くのに。
S　それを１週間で行ったということ？
T　そうそう。どっかで読んだ話によると、馬車で１０日かかる距離らしい。
S　へー。
T　を、こいつは、重いか軽いかわからんけど、お姫様をおんぶした状態で、７日７夜で…。
S　１週間。
T　１週間で行ったと。
S　はやー。
T　これは男すごいその２、と。
S　馬車で１０日かかるのに？
S　すごい足はや。
T　すごいよね。愛の力というやつですか。
S　愛あったん？

S	愛しとったん？
T	あ、そらわからん。ないかね？読んでいったらちょっとヒントがあるかもわからん。
T	じゃあぼちぼち書いたかね。じゃS12、続き、本文を。
S12	みかど、きさき、みこうせたまいと？
T	たまいぬ。
S12	たまいぬとおぼしまどい、もとめたもうに、むさしのくにのえじのお、のこ
T	おのこ。男ていういみ。おのこ。
S12	あ、おのこなむ…。
T	なん。「む」は「ん」、よ。
S12	なん、いとこうばしきものをくびにひきかけてとぶようににげける。ともうしいでて、このおのこをたずぬるになかりけり。
T	はいありがとう。んじゃ口語訳のほうを。
S12	帝とこうてい…え？
T	こうごう。奥さんよ。帝の奥さん。
S12	帝と皇后は、姫が姿を消しなさってしまったとひどく心配し、お探しになると、武蔵の衛士の男が、たいそうよい香りのするものを首にひっかけて飛ぶように逃げて行った。と、ある者が申し出てきたので、この男を探してみるといなかった。
T	はいありがとう。それじゃS8、たいそうよい香りのするものを男がぶらさげて走っていきましたよーてだれかがチクったわけね。その、何だろうね、たいそうよい香りのするもので。みんなも一緒に考えてよ。
S8	…。
T	S8、こんな感じで逃げて行きよったよね。首に何かぶらさがっとるらしいよ。香りのするものが。ね、今でもあるよね。女の人はいいにおいがするでしょ、たいがい。香水しとったりして、だけん要するに、たいそうよい香りのするものっていうのは、おきれいな方とか、そういうことね。帝の娘は美しいということをここは言いたかっただけなんじゃけど。ん、違うね。何か見えなかったんだけどいいにおいがしよったんか。そう、男のすごいその3なんだけど、これ、見えんかったらしい。ちくった人に。なんで見えんかったと思う？
S	速い！
T	それ。走るのが速すぎてから何をおぶっとるんか見えんかったらしい。で、走り去ったあとに帝の娘さんの香水か何か知らんけど、いい匂いがプーンてただよって…。
S	あー、そういうことか。
T	何だろあれ、ていう、話だったらしい。
S	じゃすごい速かったんだね。
T	うん、それぐらいないと、帝の娘さんは奪えんてことよ。

T　じゃあ本文を、S 14、読んで。なかりけりの次。論なくから。
S 14　ろんなくもとのくににこそゆくからと、あれ？からめと…。
T　ちがう、ゆくらめ。
S 14　ゆくらめと、おほやけよりつかいおりておうに…。
T　まずね、おおやけより、つかいくだりておうに。
S 14　おおやけよりつかいくだりておうに、せたのはしこほれて、えゆきやらず。みつきに、いう…。
T　みつきというに。
S 14　みつきという、に…。
T　むさし。
S 14　むさしのくににゆきつきて、この、おの…。
T　おのこ。おとこ。
S 14　このおのこをたずねるに…。
T　ぬ。
S 14　たずぬるに。
T　よしありがとう。
　じゃあここで、あーごめん、口語訳を頼みます。
S 14　間違いなく故郷の国に帰っていっているだろうと、朝廷から使者が下って、追いかけてみるのだが、勢多の橋が壊れて行き続けることができない。都を出発して３ヶ月と言う日数で武蔵の国に到着して、この男を探すと…。
T　はい、ありがとう。じゃあ、今日最後の問題ですね。プリント「十一」番。帝や后が、皇女を探し出した経緯。わかるね？皇女は娘さんね。経緯は、スタートからゴールまで至った道のり。だけん、要するに、どういうふうにして皇女を探し出したか。帝とかお后さんが。
T　順番に出していってもらおうかな。S 10 わかるかな？
S 10　火焚屋で、おらんくなったてこと、ですか？
T　いや違う、探し出すまでの道のり。
S 10　道のり、あー、香水。いい匂いがしたから？香水…。
T　帝がいい匂いをかぎつけたわけじゃないじゃろ？だれかが、ね。
S 10　姫が香水かけてたから、その匂いがしてわかった。
T　そうそう。ていうふうに、だれかが告げ口してくれたからね。申し出があった。申し出があったよね、申し出は、武蔵の衛士のをのこなん、いと香ばしきものを首にひきかけて飛ぶように逃げける。武蔵の衛士の男が、たいそうよい香りのするものを首にひっかけて飛ぶように逃げて行った。ていう申し出があったね。その申し出があって、帝はどうした？S 7。この申し出を受けて、帝はどうした？
S 7　…。
T　まずは帝の近場を探してみた、と。本文でいうと、尋ぬるていう所ね。その次

	は…。
T7	いなかった。
T	いなかった。なんて予想した？探したけどいなかったよね。その次は？予想をたてたんよ。どういうふうに予想をたてた？
S7	間違いなく帰っているだろう。
T	そうそう。じゃあ今日はそこまで書いておわろう。間違いなく、もとの国に帰っているだろう、と。故郷にいるだろう。間違いないとまで言っとるね。いい読みです。故郷に帰って行きよったけんね。
T	んじゃいつも延び延びでごめんね。じゃあ今日はこれで終わります。あと１回よろしくお願いします。

第４時（平成１７年２月１８日、２限）

T　はい、じゃあ、やるよー。じゃあね、昨日気づいたけど、後ろ半分を読む練習をしてなかったけん、ね、一番最初におれが読んだだけだったよね。だったけ、みんなが読んでないと思うけん、みんなに今日はちょっと最初に読んでもらいます。

S　何ページですか？

T　２５０の一番最後の行から。それかプリントだったら２ページの真ん中からね。帝、后ていうとこから。が、後半です。
じゃあ最初１人１人読んでもらおうか。まずＳ３くん、いって、一番最初。

S3　な、何ページ？

T　２５０の一番最後の行から。

S3　みかど、ささき、みこうせたまいぬとおぼしまどひ、もとめたもうに、

T　はい、そこまででいいよ。じゃＳ１くん。

S1　むさしの…。

T　むさし、むさしのくに。

S1　むさしのくにのえいじの…。

T　えじ。

S1　えじ？

T　うん。衛士のおのこっておったじゃん、火焚屋の火焚く衛士。

S1　えじ、のおのこなん、いとかうばししき…。

T　こうばし。

S1　こうばしきものをくびにひきかけてとぶやうに…。

T　とぶように、にげける。とぶように。

S1　とぶように…。

T　じゃちょっと待って、おれがまた読むけん、それをリピートする感じで読もうか。わからんやつは、その都度その都度、横にふりがな打っとけよー。

T　じゃあ最初からね。
（追従読み）

T　はい、ありがとう。じゃあね、まず、今までの時間ですっ飛ばしとった所を。プリントの５ページ。プリント５ページ。プリント出して。Ｓ１、プリント。持ってきた？５ページね。一番左に「五」番があるよね。これ書いてー。わかる？５ページの一番左に穴空いとるね。おう、この線引いた所を埋めとってね。

T　Ｓ12何だった？独り言。

S12　え、故郷の…。

T　故郷の？

S12　故郷のひさごが、くるくる回ること？見たい？

T　そういうことね。ここ説明するの忘れとったけん。ごめんね。
よし、で、あと、この間の続きね。この間はプリント７ページの「十一」番を

しよったね。はい、ここまで書いたねー。みんな書いとるー？

T　で、最後に１個あります。何でしょうか。Ｓ２くん。帝や后が、娘さんが消えとったね。それで、どこ行ったんだろて思いよったら、いい匂いがするのをぶら下げて走っていくやつがいましたよ、てチクったやつがおったね。で、探したらいなかった。で、論なく故郷の国だろう。間違いなく故郷の国だろう、と予測した。ら、最後にどうした？

Ｓ２　…。

T　じゃあここ読んでみて。

Ｓ２　おおおやけよりつかいくだりておうに、せたのはしこほれて、えゆきやらず

T　そこまででいいから。で、口語訳よんで。

Ｓ２　朝廷から使者が下って、追いかけてみるのだが、勢多の橋が壊れて行き続けることができない…。

T　はい、ありがとう。うん、ちゅうことは、どうした？予測を、もとの国に帰っただろうと考えたから…。

Ｓ２　追っ手。

T　そうそう、使者をつかって追わせた。はい、んじゃ最後ね。使者を派遣。派遣てわかる？わからん？えーと、だけん、走らせるていうこと。走らせるじゃないけど、おれが、Ｓ２の家に、家庭訪問に行くのがたいぎいから、影武者をおまえんちに派遣させるとか。わかりにくいか？だけん行かせるていうことよ。命令してから、お使いに行かせる。これがお使いていういみなんよ。遣ていう漢字が。で、お使いに行かせると、そういうことね。とにかく帝が、使者に、おまえ探してこーいて言うて、田舎のほうに、男が走ったのとおんなじルートを走らせてから探しに行かせたと。でまあＳ２が読んでくれたけど、この間橋を壊しとったけん、行くことができんかったと。そして、どうやったんかな？Ｓ13くん。

Ｓ13　ん？

T　読んで、本文を。「えゆきやらず」の後から。

Ｓ13　みつきというにむさしのくににゆきつきて、このおのこをたずねるに…。

T　はい、ありがとう、たずぬる。

Ｓ13　あ、たずぬる。

T　はい、で、口語訳よんで。

Ｓ13　３ヶ月という日数で武蔵の国に到着して、この男を探すと…。

T　はい、ありがとう。ほら、男は７日７夜で田舎に着いたのに、あいつが橋を壊しとったおかげと、まあ、普通の人間が行ったけん。彼は超人だったから７日７夜で着いたんだけど、普通の人間だったし、しかも、橋が壊れとって、超人なら飛び越えられるんじゃけど、普通の人間だったけん、３ヶ月もかかった。男は１週間で行ったのに。で、国に着いたと。

T　で、じゃあここでまた質問です。プリントの「十二」番。わが国とは結局どこ

だったか？わが国ていうのは、男の故郷ね。「わが国に、七つ三つ造り据えたる酒壷に」、てあったでしょ。私の故郷に、あっちに７つこっちに３つと造り置いてある酒壷、て言いよったそのわが国。男の故郷。は、どこだったか。今Ｓ13 くんが読んでくれた所にあるんだよね。じゃあだれにしよっかな。Ｓ5 くん。わが国ていうのは具体的に言うと何ていう所だった？

Ｓ5　武蔵。

Ｔ　そう、武蔵の国。いいや？わかったや？男は武蔵の国出身でした。たらね、武蔵の国はどこかていうと、教科書の、３３４ページ。武蔵てあるけん探してー。

Ｔ　３３４。

Ｓ　ないよ。

Ｔ　貼りついとるけん、３３４。

Ｔ　わかった？武蔵の国。印つけるか何かしとって。

Ｓ14　昔の名前と変わってないとこあるじゃん。安芸とかさ、変わってないよ。

Ｔ　そうなんよ。

Ｓ　東京？

Ｔ　ええや、この辺よ、この辺。埼玉と東京の間ぐらい。見つかった人手挙げて。

Ｓ　はい。

Ｔ　武蔵。あった？

Ｓ　あった。

Ｔ　衛士のをのこが箒で掃きよったのは、京都ね。京都も、探さんでいいかもしれんけど、ついでに探しとって。要は、男は、こっからここまで７日で行ったんよ。京都から、東京、埼玉ぐらい。ね、たぶんＳ6 さんが歩いたら何年かかるかね。

Ｓ6　何年かかるかな。

Ｔ　わからんね。

Ｓ6　長い。

Ｔ　要するにここね。が、武蔵の国。

Ｓ　ばり速いな。

Ｔ　じゃあ次は、Ｓ9 くん。本文の続きを、よろしく。

Ｓ9　この…。

Ｔ　みこ。

Ｓ9　あ、みこ、おおやけずかいをめして、がさる…。

Ｔ　われ。

Ｓ9　あ、われさるべきにやありけん、このをのこのいえゆかしくて、いてゆけといいしかばいてきたり…。

Ｔ　はい、ありがとう。だけんそこの話は、この使いが３か月かけてやっと武蔵の国にたどり着いた。で、たどり着いて、武蔵の国で、こういう男は知らんかねーて探し回っていると、お姫様が自分から、自分の家の方に呼び出してから、

私はそうなるはずの因縁であったのだろうか。この男の家が見たくて、連れて行けと言ったので、男は私を連れて来たんだと、説明をしました。だけんまあ。追っ手は、遣いた。遣いは、おまえお姫様をさらったんだろうが、ていう感じで探しよったんじゃけど、意外や、お姫様のほうが、あたしが連れて行ってって言ったからこの人を連れて来たのよ、ていう風な説明をした、ていうことね。

T　じゃあS7、本文の続きを。

S7　いみじくここありよくおぼゆ。このおのこつみし？

T　うん。

S7　りょうぜられれば…。

T　りょうぜられば。

S7　りょうぜられば。われはいかであれと。これもさきのよにこのくににあとをたるべきすくせこそありけめ。はやかえりておおやけにこのよしを…。

T　そうせよ。

S7　そうせよ。

T　はい、ありがとう。じゃ、口語訳のほうを。

S7　たいそうここは住みやすく思われる。もしこの男が罪され…。

T　罪せられ。

S7　罪せられ、ひどいめにあわされる…。

T　あわせられる。

S7　あわせられるならば、私はどうしていろというのか。これも前世でこの国に住みつくはずの因縁があったのであろう。早く都に帰って…。

T　ちょうてい。

S7　朝廷にこのことを…。

T　そうじょうしなさい。

S7　奏上しなさい。

T　ていうのが、お姫様の使者に対して、いい訳、じゃないけど、説明でしたね。じゃあ「十四」、「十三」でしたね。「十三」。われさるべきにやありけん。はい、「われさるべきにやありけん」ていうのは、私は、そうなるはずの運命だったのであろうか。ていう意味なんだけど、そうなるはずの運命て、どういう意味？S8。

S8　…。

T　どんな運命？

S8　ひどいめにあわされる。

T　んー、違うな。お姫様が、私は、そうなる運命だったのであろうか、ていうのは、じゃあもう1回本文を読んでみようか。聞いとってね。私はそうなるはずの運命であったのだろうか。この男の家が見たくて連れて行けと言ったから、連れて来てしまったのだ。たいそうここは住みよい。で、男が罪せられ、ひどいめにあわせられたら、私はどうしましょう。で、私はここに住みつくはずの

	因縁があったのでしょう。早く帰って朝廷にこのことを言いなさい。ていうことだったね。私は、そうなるはずの運命だったのか、この男の家をみたかったから、ここに来たんだよ、っていっとるね。どう思う？やっぱひどいめにあわせられることかね？
S8	この国に住みつく。
T	うん、そうそう。そういうことね。それを、だけん、運命だったて言いよるのね。プリント左側にイコールが伸びとるけど、こっちに。そうなるていうのは、武蔵の国に住みつく、ていうことね。だけんお姫様は、私は武蔵の国に住みつく運命でしたよー、て言っとるのね。だから、お父さんの所、京都に帰りたくないから、言い訳を何個かしとるわけよ。
T	と、もう１個、運命の主張をしよったよね。運命関係の主張を。S11 くんわかるかな？
S11	…。
T	もう１個、運命のせいにしとるやつは？
T	書くのがあれなんで書かんけど、先の世に、意味は、前世でこの国に住みつくはずの因縁があったのであろう。２回も運命運命ていう風に出して…。こういうことね、自分の力ではどうにもならない運命のしわざで、私はこの武蔵の国に来てしまった。ていうことを、お姫様は言うとるのね。あ、赤いとこは書かんでいいよー。だけん、お姫様は都に帰りたくないから、運命だから、お父さん、許して下さい。こっちに住ませて下さい。て言ったんだよね。なんでお姫様が都に帰りたくないかていうと、やっぱお姫様だから、都で上品ぶって毎日じーっとしてから過ごさんといけんけど、武蔵の国に来てからは、自分の知らない世界があってから、いろいろ新しい発見とか体験とかすることができて、いつも新鮮な暮らしができるけん、都よりこりゃええわいと思って、帰りたくないのね。
T	じゃ、「十四」番。いみじくここありよくおぼゆ。これをみんなで訳してみようか。えーとじゃあ最初に、いみじ。S8、いみじてなんだったっけ？２回ぐらい答えたろ。忘れた？
S8	たいそう。
T	そうそう。たいそう。とてもとか非常にていうことね。じゃ今日は、これ。ここをみんなで辞書ひいてみようか。ありよし。ありよしていう言葉が変化して、ありよくになってるのね。ありよしを調べて、ありよし。
S	住みよい。居心地よい。
T	そうそう。住みよい、居心地よい？わかるね。ありよしだけん、あり、あるていうのは、おれがここにあるていうことね。が、よし、よいんだけん、ま、住みやすいていうことよね。居やすいていうことよ。だから、たいそう、ここ、いみじく、とっても、ここ、これは今も言葉いっしょね。ここは…。
S	住みやすい。

T	うん。住みやすく。で、おぼゆていうのが、漢字で書くとこうなんよね。思ゆ。じゃあ、意味はもちろん、S 10 さん。
S 10	思う。
T	そうそう、思われる、と。いうことね。いみじくここありよくおぼゆていうのは、今の言葉でいうと、たいへん、とか非常に、ここは、住みやすいと思われる。ていうことね。
T	こっちも書いちゃって。どうしてここは住みやすいて思ったのかていうと、さっきも言ったように、宮中にあった堅苦しさとか不自由さがなくて、自由で新鮮、おもしろい毎日が待っとったのね。あと、お姫様だから、っていって、地元のみんなにも大切にされて、まあ悪い思いはしない、と。いいかなー、じゃあとちょっとでこの話が終わりますよ。おちに近づいてきています。
T	本文の続きを、S 14。
S 14	いわんかたなくて、のぼりて？あがりて…。
T	のぼりて。
S 14	のぼりて…。
T	みかどに。
S 14	みかどにかくなんありつると…。
T	そうしければ。
S 14	そうし？ければ、ゆうかいなし。そのおのこつみしても、いまはこのみやをとりかえし、みやこにかえしたてまつるべきにもあらず。
T	口語訳。
S 14	口語訳？
T	うん。
S 14	使者は言いようもなくて、都に上って、帝に、このようであったと…。
T	そうじょう。
S 14	奏上したところ、帝はいたしかたない。もし、その男を罪したとしても、今となっては…。
T	ひめみや。
S 14	姫宮、を取り返して、都に帰し申上げることもできない。
T	よし、じゃあS 3 くん。続きをもうちょっと読んで。
S 3	どこでしたっけ？
T	竹芝のをのこに、から。
S 3	たけしばのおのこに、いけらんよのかぎり、むさしのくにをあずけとらせて、おおやけごともなさせじ。ただ、みやにそのくにをあずけたてまつらせたもう
T	はい、ありがとう。で、口語訳を。
S 3	竹芝の男に、生きている限り終身、武蔵の国を預け与えて、租税や労役なども課することはやらせまい。ただ、姫宮にその国を預け申し上げあそばす。
T	はい、ありがとう。ちょっと、ごめんね。最後の最後まではたどり着かんかっ

たけど、ま、とにかく、帝が、お姫様が、ここ住みやすいし、運命だったからお父さん許してね。て言ったら、お父さんの所に遣いが戻って行って、こうこうこうでしたよーって言ったら、お父さんは、もう、しょうがない。だから、しょうがない。男を処刑したりしても、お姫様はもう帰ってこんだろうから、せっかくだから、姫様が惚れ込んだ男に、生きている限り武蔵の国の殿様になってもらって、しかも、あのー、消費税とかも払わんでいい。税金払わんでいいし、いきなり任命されて、衛士やれっつって言われて、という労働もせんでいいと。とにかく、その国は２人のものにさせてあげようじゃないか、と。もう、いまさら男にこらー、て怒ってもお姫様は取り戻せないような感じがするから、しょうがない、許してやろう、ていう答えが返ってきました。うん、じゃごめん、なんか半端ですけど終わります。

第３節　授業実践を通して得られた知見と反省

（１）指導者について

１、知識不足を痛感した

技術面ではとにかく、私自身の力のなさを痛感させられた。特に感じたのは、教養的な知識のなさである。具体的に言うと、「武蔵の国」が本文に登場した場合、指導者は、武蔵の国について、ある程度の知識を持っていなくてはならない、などといったことである。生徒は初めて出会う言葉について、それが何であるか、知りたがる。その時々に、生徒が求める知識を授けてこその授業者である。細かい仕事を１つ１つこなすことなしに、生徒の信頼を得ることは出来ない。

『更級日記』を授業で取り扱うから、といって、授業をする部分の解釈が出来ればいいというものではなく、さらに広い知識が必要であることを感じた。口語訳ができること、各語の意味や文法的な役割を理解していること、ひさごがなびくのが皇女にはどうして「ゆかしく」感じられたのかを理解していること、男がわざわざ必要のない飛び越えをしたのはなぜなのかを理解していること、など、挙げればきりがないほどに、知識を必要とする。

これは日々の勉強で蓄えていくしかない。今後の課題とする。

２、名前を覚えると、うまくいった

早く生徒の名前を覚えることに気をつけていた。いつまでも名前を覚えずに、他人行儀であることは、授業中のコミュニケーションの妨げになると思うからだ。初めて名簿に目をやらずに生徒を指名したときの生徒の顔は、輝きが違う。やはり生徒にとっては、見知らぬ指導者よりも、親しい指導者のほうがよいようである。親しくなっておいたほうが、質問をしたときなどに、言葉のキャッチボールをしやすくなる。恥ずかしがって何も言わないよりは、少々の要らぬ言葉を交えつつでも、いろいろなことを言ってくれたほうが実のある授業になると思う。

（２）指導法について

１、書かせることで、集中力を喚起する

賀茂北高校の中原先生にご指摘をいただいて気付いたことがある。生徒は、書くという行為を行うことで「勉強している」という実感が湧くようだ。授業中の生徒の様子を見ても、確かにそのような充実感を見て取ることができる。また、私の小学校、中学校、高校生活を振り返ってみても、書くことは、勉強するということの中核をなすものであった。

書くことがもたらすその充実感は、その後の授業の展開にも影響していた気がする。すべての原因はここにある、とは言い切れないが、書かせることをあまりしなかった

授業では、生徒の集中力が散漫になっているように感じられた。ところが、書かせることを意識してやらせると、生徒が授業の中身に集中してきたのである。これは大きな発見だった。

2、ワークシートか、ノートか

今回はワークシートを使って授業を進めた。基礎クラスということで、教科書やノートを持ってこない生徒がいるのではないか、と心配していたからだ。その心配は不要なものだったが、ワークシートを使うことの長短についても考える機会となった。

ワークシートを用いると、記入する場所が定まるので、生徒は聞くことに集中できる。また、書くときも、どこにどのように書くか、あらかじめ教師が用意したひな形に沿えば、うまく授業内容をまとめることができる。そのため、余計な労力を使わずに、すばやく書く作業を終えることができる。そして、復習するときにも、簡潔にまとめられているので見直しやすい。

その裏返しになってしまうのだが、書く力が養われにくいという欠点も見えてくる。授業者の説明を聴いて、あるいは聴きながら、自分の頭の中ですばやくまとめを行い、ノートの適切な箇所に、適切な書式で書くという力をつけることが難しくなる。もちろん書く力をつけることは国語科学習の大きな目標のひとつであるから、なおざりにすることはできない。

ワークシートを使うか、ノートを使うか、その学習内容に適した方法で、いろいろ試しながら、授業を展開していきたいと思う。

（3）おわりに

今回の授業実践では、自分の力のなさを痛切に感じた。国語の授業を成功させるためには、並々ならぬ努力が必要であるようだ。

一番の収穫は、書かせることで、生徒の集中力が高まることを実感できたことである。もちろん、書かせすぎもよくないのだろうが、適度に書かせることは、非常に効果的であった。

また、生徒の反応を確実に確かめつつ、授業を進めていくことが重要だと感じた。説明がうまくいかなかった場合、後回しにせずそのときに立ち止まり、分からせると、生徒の集中力の途切れも、ほんのわずかですむ。生徒が分かっていないことに気付かずに授業をすすめると、特に今回私が実践を行った基礎クラスのような学習者集団では、そのロスを補うのに、大変な労力が必要となることが分かった。

１１月に行ったの教育実習よりも、今回はうまくやることができたと思う。次は、もっと総合的な国語の知識を身につけ、力をつけた上で、教えたい内容がしっかりと生徒に伝わるよう、そしてまた、生徒の意欲、集中力を途切れさせることがないよう、授業の方法論的なこともさらに考えながら、授業をしていきたいと思う。

○おわりに

今回の目的は、二つある。一つは国語の教員が毎日行っている「国語の授業」を学問の域にまで、高めたいという望みを実現するための試みである。二つめの目的は、高校の国語教師をめざす学生が、初めて賀茂北高校の生徒に国語の授業を試行して一喜一憂する貴重な体験を生のままで、記録して客観化することによって、よりよい授業を目指す姿を報告することである。

上の二つの目的に沿って、特に『更級日記』を題材にした実践をまるごと、文字化しつつ、生徒と教員とのやりとりを分析し、国語力を高めるとはどういう営みであるかを考えさせた。一つ一つの実践が事実として積み重なることにより、教えることの喜びと教えることの難しさとを、自覚したようである。

高校段階での古典学習については、とかく、教え方よりも教材研究の質の高さだけが、注目されがちである。たしかに、教え方の技術よりも、古典文法の理解が先決であるという事情はある。しかし、古典嫌いを増やさないためにも、おもしろさを生徒と共有できるような取り組みをしなくてはならない。

本稿で実践した四人の学生は、賀茂北高校の一年生に迎えられて、貴重な授業体験をさせていただいた。それらの一切を、文字化して、授業研究を行ったものである。これらを読むと、生徒の関心を十分には引き出していない授業もあれば、的外れの解釈へ強引に引っ張っていく授業もあった。授業は生き物である。二度と同じ成功を収めることは出来にくい。それ故に、真剣勝負でもある。

なお、四人の実践についての文字化や授業分析の視点などを指導したのは、広島大学博士課程後期一年生の又吉里美さんと博士課程前期二年生の小川俊輔君の二名である。二人は、適切な助言を行い、三年生のゼミ学生は、彼らによく学び従って、改稿作業に取り組んだ。印刷から彙集作業に至るまで、仲良く共同で創造活動に従った。

地道な実践とその反省なくして、教師の進歩も発展も無い。自分の実践を客観的に文字化して、多くの人から批評してもらい、より良き教師を目指すという行為は、多くの人に求められている。

これらの行為を「国語授業自分史」と名付けた。広く、全国に普及することを信じたい思う。教員は専門職である。授業という生きた存在をテープレコーダーに記録し、資料に留めることにより、多くの他の人々に客観的に批判してもらうことが可能になる。こうして、授業を科学的な分析の対象にしていける。授業を資料化することが大切である。自分史は、こうして、多くの努力の上に成り立つ。

国民の国語力を伸ばすことが教員の任務である。活動は、記録しておかないと直ぐに消えてしまう。文字化作業を経なくては、客観化できない。こうした労力を厭わないで行う習慣を、若いころに身につければ、きっと、優れた実践家になっていけるであろう。

以上の二つの目的に即して、気づきを述べた。未熟な国語実践であるかもしれない。高校一年生の『更級日記』の理解は、幼いところに留まったかも知れない。もっと、工夫があっても良かったのではないか、という助言もあり得る。

しかし、多くの制約の中で、精一杯頑張ったことは確かである。そんな初々しさがどこかに芽を出していれば、幸いである。

好意的に彼らの実践を読みとっていただき、何かの参考にしていただければ、幸いである。

今回は、賀茂北高校の校長先生はじめ、教頭先生、特に、国語科の先生の多くには、筆舌に尽くしがたいほど、お世話になった。原一浩先生の万全な準備と計画があったから、生徒との交流を糸口にしつつ、緊張感のある真剣な授業も可能であったように思われる。

先生方の多大な寛容さと生徒の素直さに支えられて、はじめての国語授業を無事に成し得たようである。多くの関係者の方々に心よりお礼申し上げるしだいである。

（江端義夫）

『はじめてな国語授業自分史を書く』

Describing the Individual History on the Japanese Class for the First Time

印刷日　平成 17 年 3 月 15 日
発行日　平成 17 年 3 月 22 日
編集　〒 739-8524 東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院教育学研究科
国語文化教育学研究室
江端義夫（代表）

Yoshio Ebata
1-1-1, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima City,
739-8524, Japan
Tel: 082-424-6789
Fax: 082-424-6789

製本: ニシキプリント